



Satoshi Wagahara
Illustration: Oniku
イラスト 029
和ヶ原聡司

6

わ-6-6



はたらく魔王さま! 6

和ヶ原聡司



ISBN978-4-04-886990-4
C0193 ¥590E



発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 590 円

※消費税が別に加算されます



聞いたか、勇者エミリア。俺たち、
TVアニメ
2013年
アニメ公式サイト
<http://maousama.jp>
電撃文庫
プレゼント実施中!

電撃文庫
¥590

フリーター魔王さま、2013年ついにアニメ界を侵略!!

勇者に敗れ異世界“東京”にたどりついた魔王は、六畳一間のアパートを仮の魔王城としてアルバイト生活を送ることになり!?
話題の庶民派ファンタジーが、2013年、TVアニメ化決定です!

STAFF & CASTも決定!

STAFF

監督 横田直人
シリーズ構成 横谷昌宏
キャラクターデザイン 破谷敦
制作 WHITE FOX

CAST

真奥貞夫 (魔王サタン) / 遠坂良太
遊佐惠美 (勇者エミリア) / 日笠陽子
佐々木千穂 東山奈央
声優西郷 (声優大光線アルシエル) / 小野友樹





はたらく魔王さま! 6

和ヶ原聡司

電撃文庫 ⑤ 590

はたらく魔王さま! 6

2階がカフェ形態となり、ついに魔王のバイト先のファーストフード店が再オープンする。張り切る魔王は、心機一転新たな資格に挑戦することに。

そして、恋する女子高生・千穂もまた新たなことに挑戦すべく燃えていた。テレパシーである概念送受を覚えたいと恵美たちに相談したのだ。それは、天使や悪魔から接触があったときに、すぐに助けを求められるようにするためだった。だが、そんな千穂を見て鈴乃が選んだ修行場所は、なぜか町の「銭湯」で——!

フリーター魔王さまの庶民派ファンタジー、みんなでお風呂で大暴れ!? な第6弾登場です!



イラスト ■ 029
Satoshi Wagnara
Illustration ■ Oniku
和ヶ原聡司

6

電撃文庫



9784048869904



1920193005905

ISBN978-4-04-886990-4
C0193 ¥590E



発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 **590 円**

※消費税が別に計算されます



わがはらきとし
和ヶ原聡司

「執筆が終わって缶詰から和ヶ原を解放する相棒」

粗「はい、お疲れさん」

和「和ヶ原【ヒト】は何故、

同じ缶詰【あやまち】を繰り返すのか……」

粗「コンスタントに仕事しないからでしょ」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま!

はたらく魔王さま! 2

はたらく魔王さま! 3

はたらく魔王さま! 4

はたらく魔王さま! 5

はたらく魔王さま! 6

おにく
イラスト:029

お陰様でまたひとつ底をとりました。

作品と一緒に人生を歩める幸せを噛みしめております。

ありがとうございます!

はたらく魔王さま! 6

和々原聡司

電撃文庫

MF

はたらく魔王さま! 6

和々原聡司

電撃文庫 2129

DENGEKI BUNKO

はなちゃん 魔界ま

6

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Illustration ■ Oniku





CONTENTS

序章

P010

魔王、職場に復帰する

P015

魔王と勇者、日常に惑う

P097

魔王と勇者、
新たな夢の一步を踏み出す

P207

終章

P342

Emilia Justina



Emilia Justina



Chiho Sasaki

汗を流したあとは、
バスルームで
ガールストロー♡



Emi Yusa



周知も知らぬ
おーちゃんが
気になるご様子!?



Suzuno Kamadaki



Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

インキ ■ 029

和ヶ原聡司

6

はなまる幼稚園

Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

イラスト ■ 029

和ヶ原聡司 6

序章

赤い空が滲み霞んだ。

短い命だった。幼い思考で、彼は全てを諦めた。

もはや指先を動かす力とてなく、滲み霞む視界は、彼の命が間もなく消えゆくことを告げているのだと感じていた。

命を落とす恐怖は無かった。そんな恐怖すら抱く余裕も無いほど、彼は幼かったのだ。

寿命で言えば短命な種ではなく、事実彼の両親は千年の時を生きたと言う。

だが、本来持つ寿命など迫りくる暴力の嵐にはなんの意味も為さなかった。

赤、赤、赤、全てが赤く染まり、ただでさえ赤い世界はますます赤くなり、そして、その赤の中に彼を飲み込もうとしていた。

恐れは無い。悲しみも無い。ただそのことが、

「……」

悔しかった。

他者に蹂躪され殺されるために、この肉体は魂を宿していたのか。

一族の全てが非業の死を遂げるために、今日この時まで続いていたというのか。

彼が「自分」というものを意識し、「自分」の足跡を記憶する程度に成長した矢先、その命は空を行き散る雲のように、吹いてやむ風のように、今自分の血を吸う大地の砂のように、無価値に、自然に、失われようとしていた。

何故、そんな所に自分の魂は、命はやつてきたのだろうか。

意味無く魂が生まれ、そして散るのが自然だと言うのなら、何故魂などというものが自分の肉体に宿る仕組みができているのか。

赤い空が滲む。霞む。

そして彼の瞳から、赤い大地に滴る赤い血とは違う、全く透明で不思議なものが落ちた。

その瞬間、赤い空も、赤い大地も、赤い風も、赤く染まり命が失われようとした彼の肉体も、何もかもを押し返して彼の魂の上に君臨するものがあつた。

どこまでも広い漆黒の空に、無数の光が瞬いてる。

その中に、一際巨大な丸い何かが二つ、浮いていた。

多くの魂がひしめく場所。そんな気がした。そして、もしかしたらそこは、自分がこれから向かう場所なのかもしれないと感じた。

それはとても心安らぐ色をしていて、形容しがたい魅力があつた。

彼を染め上げた赤とは比べものにならないその色に、彼は惹かれた。

でも、手を伸ばすことはできない。肉体も魂も動けない。手を伸ばせば届きそうな所に、彼の魂も肉体も安らげる場所があるのに。

虚空に浮かぶその光が、また滲み霞んだ。

「……いや、でもね、正直そんないいことばっかじゃないよ？ 『理想郷』ほど胡散臭い言葉は世の中にないと私は思うね」

視界が、急速に赤を取り戻してゆく。

全身を苛む激痛と朦朧とする意識の中、それでも彼は確かに聞いた。

「見方一つで話は変わるってゆーかさ、私はむしろ、ここの赤ってすごく綺麗だと思うんだ」
「……でも……赤は、怖い」

「おう？ 怖い、怖いか！ こりゃ驚いたね。泣いてる悪魔なんたのには初めて出会ったけど、この魔界の大半を占める色が怖いなんて泣き言を言うとは思わなかった」

声がするということは、自分のそばに誰かがいるということ。命が尽きかけた体とは言え、無防備で横たわっているということに、彼は恐怖を抱いた。

恐れる心は、生きたいと願う心だ。命を繋ぎとめたいと思う心だ。

霞む視界の中で必死に「敵」の姿を探すと、なんと自分を覗き込むように見知らぬ「それ」が立っていた。

幼い彼とほとんど変わらない体軀、いや、それよりもっと細いかもしれない。

見たことのない姿かたちの『敵』は、口の端を吊り上げて言った。

「君が見た色の名前、知りたい？」

『敵』の問いかけに、なぜかなんのためらいもなく頷いていた。

頷くだけの氣力が、魂に戻ってきていた。

そして、『敵』の髪の毛は、彼が知りたい色にとってもよく似た輝きを放っていた。

「それは世界を知ることだよ。そして、君が恐れた赤の、新しい側面を知ることでもある」

瞬間、淡い光に包まれ、彼は全身の痛みが和らいでゆくのを感じ取った。

「君、名前は」

「……サタン」

それがごくありふれた名だという認識はあったが、『敵』は大仰に頷いた。

「いい名だね」

いい名なものか。この大地を古に統治したという大いなる王の名。弱小部族の死に掛けの子供には過ぎた名だ。完全に名前負けしてしまう。

「これから君に、世界を知るための知識を託す。恐怖に彩られた赤を、美しいと感じるための知識だ」

そう言って笑ったその顔は、彼の魂に深く刻み込まれた。

「君が見た色の名前はね……」

魔王、魔線に捕まわぬ



外側だけ見れば、それほど大きく変わったところはないように思えた。

それもそのはず、いくら大規模改装とはいっても、テナントとして入居しているビルの外観に極端に手を加えることなどできるはずがない。

店舗に聞わらない外壁は塗り直されてすらおらず、ビルの定礎の年号を見れば築二十年以上であることは隠しようもない。

「期待外れ、という顔だな」

彼の上司は、書類やら何やらではちきれんばかりの巨大なショルダーバッグを肩からかけて、腕組みをしながら不敵な笑みを浮かべてそう言った。

「ええ、まあ。色々新しくするって言って工事してたじゃないですか。だからもちつと新しい外観になつてゐるのかなーって」

慣れ親しんだ従業員用の自転車置き場に愛騎、シティサイクル・デュラハン式号を停めながら、真奥貞夫は言った。

彼のアルバイト先であるマグロナルド幡ヶ谷駅前店の新装開店前日である。

工事も足場や防塵カバーが剝がされて、改装工事を行う理由にもなった新業態の看板が付属し、全体的に新品の光沢を放っている以外、何かが極端に変化した印象は受けなかった。

ただこうして見ると、以前までの看板は、企業のイメージカラーでもある赤色がくすんでいたのだなと思えた。店舗の外装というのは、防ぎようのない外気の粉塵や紫外線などによる経

年劣化でどんどん色を失うものなのだ。

その点、やはり新しい看板は、赤が燦然と輝いて、如何にも新しい装いといった趣だ。

表の通りに面している大きな窓にはまだ養生ビニールが貼付されていて中の様子はよく分らないが、窓枠の大きさ、自動ドアの位置なども従来のままとすると、内装もそれほど変わっているとは思えない。

厨房の場所と客用入口の位置が変わっていないということは、お客様の動線が大きく変わっておらず、席配置などの主だった内装の構成要素に変化が無いと思われた。

「そこは、仕上げは流々結果をご覧しろ、と言ったところかな」

自信満々の様子の真奥の上司、店長の木崎真弓は自動ドアに屈み込むと、床面にある鍵を開く。どうやら施錠位置も変わらないらしい。

「ちよつと待っていて下さい。ドアを開いてから四十秒以内にセキュリティ会社のパネルを専用キーで操作しないと、通報されてしまうから。えーと、どれだったかな……これか？」

開錠して電源の入っていないドアを手動で開くと、木崎は不安な呟きと共にシオルダーの中から鍵束を取り出し、薄暗い店内へと駆け込んでゆき、真奥も店内に一步踏み込む。

店の奥からは、通報装置が作動する断続的な電子音が聞こえてくる。

真奥はまだ狂威を振るう夏の暑さに辟易しながらその瞬間を待った。

そして、三十秒ほど過ぎた頃、

「!!」

唐突に店内の灯りが灯った。

それは、今まで真奥が日常で触れることのなかった光だった。

これまで慣れ親しんだ蛍光灯の灯りではない。天井を振り仰ぐと、豆電球のように小さく、それでいてとてつもない光を発する灯りが無数に張り付いている。

一つ一つの光源は目を刺すかのように鋭いの、白とオレンジの光が交互に配置され、一本の光の線を作っているその照明は、店内を余すことなく柔らかな光で照らし出していた。

「こ、これが、噂に聞くLED照明!!」

驚愕の言葉が口を突いて出た。

そして、照らし出されているものの全てが、今までとは一線を画すものに变化していた。

長年の使用にくすんでしまったパステルカラーの合成皮革だったソファは、高級革をイメージした落ち着いたブラウンに統一されている。

堅いタイルの床と打ち合って足が耳障りな音を立てて、整理も大変だったカウンターの回転椅子は、壁面固定型の座面を高くしたタイプに変更されていた。

過ぎる年月と共にピンクとも肌色ともつかぬ謎色に変化していた壁は、光と調度品に合わせた落ち着いたイエローの、柔らかな模様タイルに変わっている。

「どうだ。これでもまだ期待外れかな?」

奥から鍵束を振り回しながら木崎が戻ってきて、真奥は勢いよく首を横に振る。

「厨房設備はモデルチェンジこそしたが、従来機と操作はほとんど変わらん。だがプラテンがようやく三連になったから、ピーク時は少しは楽かもしれんな」

「それはありがたいですね！」

真奥は目を見張る。

マグロナルドのバーガーはバンズと呼ばれるパン部分とパティと呼ばれる肉部分、そしてチーズや野菜やソースなどの要素に分別される。

プラテンとは、パティを表裏同時に焼くことができる業務用鉄板・クラムシエルグリルの通称であり、これまでは店舗規模の小さきもあつて、プラテンが二面しかなかった。

照り焼き系やフィッシュ系のパティはノーマルなパティとは味も匂いも違い、場合によっては特別なタレなども使うため、それらのメニューを作った後は、味が混ざってしまうのを防ぐため、一度プラテンを清掃しなければならない。

ピーク時にこれが起こると、ウェイトと呼ばれる「お客様を必要以上に待たせる時間」が発生してしまい、店内のスムーズな業務回転に支障が出るのだ。

プラテンが一枚あるのと無いのでは、仕事にかかる時間とストレスが雲泥の差である。

「手洗い場も少し広くなりました？」

「蛇口がオートになった」

「すげえ!!」

真奥は心の底から感嘆する。

そもそも真奥にとって、捻れば即座に飲用に適する水が出る出水口、すなわち蛇口という存在自体が、日本に來た当初は大きなカルチャーショックだったのだ。

エンテ・イスラの五大陸どころか魔界にさえ、各家庭に行きわたる出水と止水が自由自在な上水道など存在しなかった。基本的に魔界の水道は、水源から下水まで灌漑施設を流れっぱなしのものを指し、魔力で運用される出水と止水が自在な上水道はごくごく一部である。

捻る蛇口にすら感動していたそんな真奥だから、日本に來て初めて公衆トイレの、オートで水が出る水道に出会ったとき、蛇口を捻る手間すら惜しむのかといふかったものだ。

だが今は、不特定多数の人が触れる水道の蛇口というのは想像以上に汚れているという事実を知り、一時間に一度は所定の手洗いをしなければならぬというマドロナルドの規則を照らし合わせれば、このオート蛇口の存在は実にありがたいと言わざるを得ない。

「何か、色々進んでますね!」

新しい機械類を前に目を輝かせる真奥を、木崎はどこか慈愛に満ちた目で見つめる。

「時々思うが、まー君は妙なところで純朴だな」

「は?」

「いや、なんでもない。ちなみに、十番はその角だ。二階と合わせて三つある」

十番、とは手洗いの隠語である。

促されてトイレに入った真奥は、一瞬戸惑う。

「どうした」

「あ、いや……何か足りないなって思うんですけど、小っちゃくありませんか？」

そこには洋式便器が鎮座しているのだが、真奥の知る洋式と何かが違う。

「ああ、これは水洗タンクを必要としない最新暖房便座付ウォッシュレット便器だ。あとそれ」

木崎が指差す先には、何やらリモコンめいたボタンが沢山配置されたパネル。

「そのスイッチで蓋が開く」

「ええええええ!?」

これには真奥も度肝を抜かれた。オート蛇口については納得したもの、目の前にある蓋を、わざわざ遠隔操作で開く必要はどこにあるのだろうか。

木崎はそんな真奥の反応が面白いのか、続いて言う。

「ちなみに男性の小用の場合、このスイッチで便座を上げる」

便座を上げる手間を省くために却って面倒なことになっている気がする仕方がない真奥。不特定多数の人間が使う「ご不浄」だから直接触りたくないという気持ちは分からないでもないが、結局触る対象が便座からリモコンパネルになっただけのことではないだろうか。

「……じゃ、じゃあこの『小』『大』ってスイッチが……」

「そう、それで水を流す」

木崎に促されて「小」のスイッチを押すと、想像していたよりずっと少ない量の水が便器の内側を洗った。

「う、うちの便所もこれくらいなら水道代が少しは浮いたりするのかなあ……」

笹塚駅から徒歩五分、魔王城が入居する築六十年の木造アパート、ヴィラ・ローザ笹塚の和式便所の流水レバーには、そもそも大用と小用の区別すらない。

小用だからといってちよつとしか流さないと貯水タンクが傷むというのだが、そうは言っても毎回全力で水を流すのは心臓に悪すぎる。

「……あの、これって、今じゃ普通なんですか？」

真奥はそんな家庭事情をそつと心の隅に片づけて、木崎に問う。

「いや、俺のうちはちよつと規格外に古いんでアレですけど、普通の公衆トイレとか、大抵銀色のレバーがどんな形にせよついてるじゃないですか。お年寄りのお客様とか、分からなくなっちゃいませんか？」

「……なるほど、そうかもしれないな。最初の内は貼り紙でもしておくか」

木崎は得心した様子で頷く。

「さて、ここまでは、新しくなったとはいえほとんど前座。本命は完全新装開店の二階だ」
「はい」

いつまでも二人でトイレ談義をしていても仕方ない。木崎はレジカウンター脇の階段に真奥を導く。

「ここからは、君も未知の領域だと思う。我らの力が試される、新たな戦場だ。私以外で二階に踏み入る権^{はかり}は谷^や駅前店のクルーは、君が初めてだ。心しなさい」

真奥は息を呑^のんで、木崎の後に続く。

階段の手すりを握^{にぎ}みながら、床と同じ色のタイルの階段を一步一步上り、そして辿^{たど}り着いた二階は……。

※

異世界日本で、人間の姿に身をやつし、アルバイトで稼いだ金銭で日々の生活を賄^{まも}う魔王サタンこと真奥貞夫^{さうだま}にとって、この八月の上旬はどうにも動きようのない日々であった。

銚子^{ちうし}の海の家での仕事から帰ってきた真奥達には、新たな不安の種が生まれていた。

エンテ・イスラの動静に不穏な空気が漂い始めたことと、エンテ・イスラに割拠^{やっぎよ}する勢力が具体的に日本に向けて手を伸ばしてきたことである。

異世界日本に流れ着いた悪魔である真奥貞夫、芦屋^{あしや}四郎^{しろう}、漆原^{うるしはら}半蔵^{はんざう}は、自分達の不在時にかつての配下^{はいか}が勝手に魔界をまとめ、サタンが築いた魔界の体制から造反し、『新生魔王軍』

なる組織を立ち上げていることに警戒を強めていた。

一方、そんな真奥連を追って日本にやってきたエンテ・イスラの人間勢力、勇者エミリアと遊佐恵美と聖職者クレスティア・ベルこと鎌月鈴乃。

魔王を滅する役目を負うはずの彼女達は、勇者の武器である聖剣に、魔王を父として慕う赤子アラス・ラムスが融合してしまった家庭的な事情から、魔王を即座に処断することができないでいた。

そして二人は、その問題を解決するより前に真奥連が新生魔王軍に拉致され担ぎ上げられた末に、エンテ・イスラに本物の魔王軍が再興してしまうことを危惧していた。

そのため勇者と聖職者は、倒すべき魔王を連れ去れないために日本の日々の生活で魔王を護衛しなければならなくなってしまう。

ただでさえややこしかった魔王と勇者の関係が余計にややこしくなっているそんな時期に、更にややこしいことを始めたのが、天界の天使達だった。

彼らが真奥と恵美にまるで関係ないところで進めていた計画に、日本でただ一人、エンテ・イスラや魔王と勇者の正体を知る女子高生、佐々木千穂が巻き込まれてしまう。

千穂を魔力中毒に陥らせ、入院までさせた天使達に怒り心頭に発した真奥と恵美は、初めて自らの意志で相互に共闘を約束し、日本から天使達の影響を排除するために動き出す。

だがその最中、魔王軍に殺されたはずの恵美の父が、今も生きていることが発覚する。

その上、千穂が謎の人物に力を借りて、天使ラグエルを退ける活躍を見せて、真奥と恵美は、自分達や天使達も知らない意志が事態の背後で動いていることに気づく。

千穂は元気に回復したものの、真奥と恵美を取り巻く事態はますます混迷を深めたまま、日本を支配する夏の暑気の中に秋の気配がほんの微かに見え始めたお盆過ぎの八月下旬。

そんな風雲急を告げる異世界の事情なぞお構いなしに、真奥貞夫の勤務先であるマグロナルド轄ヶ谷駅前店の新装開店日は、もう翌日に迫っていたのだった……。

※

「なんつーのかな、いい意味でマッグじゃないっていうか、マッグの気安さを損なわない程度に空間が洗練されてるってゆーかさ!!」

未だ正午にもならないというのに、既に容赦ない陽光の圧力の下、白のTシャツ姿に手には軍手、頭にタオルを巻いた真奥は大声を張り上げた。

「駅前の通りを見下ろせるんだけど、二階なのに結構眺めがいいんだ。日光が暑くないようにブラインドが引けるようになって、なんかこう、今から働くのが楽しみっつーか!」

「真奥さんズルいですよ一人だけ!!」

興奮気味に語る真奥に不満げな声を上げたのが、やはり真奥と同じように軍手をはめて、鋸

の広い帽子を被り、ジャージの上下を着た佐々木千穂だった。

「まあまあ、どうせすぐにちーちゃんだってシフト入るんだろ!」

「そうですけど! でも何かズルい!!」

千穂は真奥と同じマグロナルド幡ヶ谷駅前店のアルバイトクルー。やはり店舗がどのように改装されたか気になっていたのだろう。

「それで、そのマッグカフェ、でしたか。通常のマグロナルドとはどう違うのですか!」

額から額に向かって容赦なく流れる汗をTシャツの裾で拭いながらそう尋ねるのは真奥の腹心、悪魔大元帥アルシエルこと芦屋四郎。彼もまた、真奥と同じように軍手を装備し頭にタオルを巻いていた。

「ああ、カフェって言うくらいだからコーヒーの種類が多い! カフェ・オ・レとかカフェ・ラテとかエスプレッソとか選べる! 今まではプラチナロースト一択だったからな。他にも食事メニューにホットドッグとかホットケーキとか、カフェらしいメニューが増えてる!!」

今からその作業をするのが楽しみで仕方ない、という風に鼻の穴を膨らませる真奥。

「アルシエル、手伝ってくださっている千穂殿の前で腹を出すな、みつともない! 魔王も喋ってばかりいないで手を動かさせ手を!!」

そんな二人に苦言を呈するのは、隣人の聖戦者、クレスティア・ベルこと鎌月鈴乃だ。

こちらは普段着にしている浴衣の背にたすきを掛け、頭に手ぬぐいを巻き、軍手をはめる手



に身の丈ほどの箒を携えていた。

四人がいるのは、魔王城が入居するアパート、ヴィラ・ローザ笹塚の敷地にある裏庭。敷地内に一本だけ生えている常緑樹には夏の間、ありとあらゆる種類の蝉が飛来するのだが、その鳴き声が外に出るとあまりにやかましく大声を上げなければとてもお互いの声が聞こえない。

「へいへい！」

「こ、これは失礼を！」

真奥はそそくさと作業に戻り、芦屋は赤面して着衣を整え、迂闊な行動を千穂に詫げる。

「い、いえ……別にいいんですけど……」

千穂は少し赤面しながらも、ふと思いついて真奥に尋ねる。

「そういえば……カフェ・オ・レとカフェ・ラテって、どう違うんですたっけ!?」

その瞬間、真奥の膨らんだ鼻から間抜けな息が漏れた。

「……えっと」

記憶を探るように宙を見上げた真奥は、またしても手が止まってしまふ。

「それはアレだ、カフェ・オ・レってな牛乳が入ってて、カフェ・ラテってのは牛乳が……あれ? 両方とも牛乳は入ってるんだけど、ラテが確か泡たってたような……おお?」

「要はどちらもコーヒー牛乳ということだろう!? 今は頭より手を動かせ手を!!」

「コーヒー牛乳……いや、なんかそれだと一気にカフェっぽくなるとゆーか、銭湯じゃねえんだから……あー、風呂浴びてよな……」

鈴乃の突っ込みにしどろもどろになりながら、汗だくになってしまった我が身を思い、この作業が終わったら銭湯に行くことを固く決意する。

真奥と芹屋と鈴乃、そして千穂は、現在ヴィラ・ローザ笹塚の裏庭掃除の最中であつた。

本来アパートの敷地の掃除など店子たる真奥や鈴乃の仕事ではないし、まして住人ではない千穂にはもつと関係のない話である。

だが、報酬が出るとなると話は別だ。

ことは例によって、謎の親戚の存在でますます謎の存在となつた大家の手紙から始まつた。

ヴィラ・ローザ笹塚は、壊れてしまつた魔王城の壁の穴を直すために大家の権限で住人を一時退去させた。その居住できなかった日数分、通常の家賃から値引きをする、という通知だったのだが、実際に真奥達と鈴乃がアパートから出たのはたったの四日弱。

本来ならその分を家賃から割り引けばいいようなものだが、大家の志波は人間離れした姿と親戚と謎を抱えているくせに妙なところで律儀だった。

「こちらからお願ひしてお仕事してくださいましたのに、姪の都合で仕事のお約束を反故にしてしまいましたて申し訳ございません」

曰く、海の家「大黒屋」で働く期間が短くなつてしまったのを詫びしたい。

代わりとして、夏の間に手入れのできなかったヴィラ・ローザ笹塚の裏庭の掃除をすること
で家賃の値引き額を増やし、それで不足分の報酬にできれば、というのである。

そこに提示された、掃除をしてくれれば八月分の家賃を一万五千円引きの三万円にさせてい
ただく、という文面に、真奥も戸屋も諸手を挙げて飛びついた。

ただでさえ海の家の収入が予定額に達しなかった上に、先日はテレビなどという大きな買い
物をしてしまったのだ。

真奥が不足分を補填したとはいえ、割引してくれるという話に乗らない手はない。

もう一部屋の住人である鈴乃は家賃の割引そのものには興味を示さなかったが、

「住居周りの掃除なのだから住んでいる自分達がやるのが当然」

と言って自分から進んで作業を引き受けた。

お金が絡むことなので、一応真奥と鈴乃が各部屋の代表として不動産屋に赴き作業を請け負
い、作業日は真奥のマグロナルドの仕事が再開する前日、つまり今日に決まった。

だが不思議なことに当日になってみると、本来の住人であるはずの人物の姿が一人足りず、
住人ではないはずの千穂が真奥達と共に草むしりをしたり小石を拾ったり、精力的に動き回っ
ているではないか。

日頃は自転車を停めるときくらいしか意識しない裏庭ではあるが、長いこと放置されていた
のか真奥の膝ほどの高さの草が繁茂し、草を走けると道路に面したブロック塀の内側には、外

からポイ捨てされたと思われるペットボトルや空き缶も多く出てきた。

それらを全てまとめたゴミ袋を芦屋が縛っているところに、

「カフェ・オ・レはフランス語、カフェ・ラテはイタリア語。両方とも広義に「コーヒー牛乳」を意味してて、どっちもコーヒーと牛乳が半々だけど、ラテの方はベースになるコーヒーがエスプレッソなのが一般的よ!!」

真奥は、炎天下の作業中の雑談で湧いた疑問に対する答えが、明後日の方向から解決されてふと声のした方を見た。

「カフェで働くとかいきがるなら、それくらいばつと答えられる用意したら!?」

そこには、うだるような暑さに顔を皺めつつ、四人の様子を眺める勇者エミリアこと遊佐恵美と、

「ばばー!」

その恵美に抱えられ、大人達が辟易している暑さをものともせず笑顔で振りまく赤子、アラス・ラムスの姿があった。

「おう、アラス・ラムス!」

真奥は蟬の群がる木の下で目を避けるようにして立っていた恵美とアラス・ラムスに近寄るが、

「ちよつと! アラス・ラムスの服、買ったばかりなんだから汚さないでよ!」

真奥が泥のついた軍手と汗だくのシャツのまま近づいて手を伸ばそうとするので、恵美は慌ててアラス・ラムスを遠ざける。

「おお、悪い悪い」

自分を「ばば」と慕うアラス・ラムスにはとことん甘い真奥も、恵美に注意されて素直に引き下がる。

「こんにちは、遊佐さん！」

「エミリア、すまない、もう時間か？」

千穂と鈴乃がそれぞれに恵美に声をかけ、恵美も手を上げて答える。

「ううん、ちょっと早く来ちゃったけど……でも、なんで千穂ちゃんが草むしりしてるの？」

曇時雨に負けないように大声で尋ねる恵美は、真奥と芦屋を睨みつける。

「事情は分からないけど、あなた達最近千穂ちゃんに甘えすぎじゃない？ 一人足りないのはどうしたの？ まさか千穂ちゃんに手伝わせてサボってるわけ？」

恵美が言う一人、とは、言うまでもなく魔王城のもう一人の住人、堕天使ルシフェルこと漆原半蔵である。

日頃からだらしない生活を送り、ニート根性を隠そうともしない漆原がこの場にいないイコール漆原がサボっている、という図式を浮かべるのは人間として当然のことだが、

「公平公正な目から言えば、ルシフェルは決してサボっているわけではない」

意外にも、その疑問に答えたのは真奥でも芦屋でもなく鈴乃だった。かなり厳しい声で。

「ただ、役に立たなかったただけだ」

「は？」

「漆原さん、熱中症になっちゃったんです」

鈴乃の口ぶりに苦笑しながらそう言ったのは千穂だった。

「作業を始めて三十分もしないうちに目を回して倒れてな。死なれても面倒だから、部屋で扇風機に当てる休ませている」

鈴乃と同じく苦々しい口調でそう言いながら、芦屋は二階の魔王城の窓を見た。

恵美もつられて二階を見上げるが、一つの大陸を滅ぼそうとした墮天使が熱中症でダウンなどという情けない話には呆れ果てるしかない。

「でもだからって、千穂ちゃんに手伝わせるなんて」

「あ、私はいんです」

暑さで顔を赤らめながらも、千穂はばたばたと手を振った。

「好きで手伝ってるんですし、それに……」

千穂はそう言うのと、鈴乃の顔をちらりと見る。

「それぐらいじゃ、お札には全然足りませんから」

「お札？」

この場にそぐわない言葉に真奥と芦屋は首を傾げる。

「そういや恵美もちーちゃんも、今日はなんの用だったんだ？ いや、ちーちゃんが手伝ってくれんのはありがたいし助かってんだけどさ」

千穂は真奥が掃宅するのとはほぼ同時にアパートにやってきた。帽子や軍手を用意していたことから見ても、鈴乃からあらかじめ今日のことは聞かされていたのだろう。

だがそこに恵美まで出てくるとなると、真奥としては不審な気配を感じざるを得ない。

「……」

ところが恵美と鈴乃は複雑な顔色を見合わせたまま何も言わず、

「まだ……秘密です！」

千穂は千穂でそんなことを言う。

「ひみつなの。しー」

アラス・ラムスはどこまで分かっているのやら。

「さー 遊佐さんとアラス・ラムスちゃん待たせちゃ悪いですし、私頑張りますよー」

千穂は強引に場を区切ると、壁に立てかけられていたもう一本の箒で、草むしりで凸凹になった地面を均し始める。

そんな千穂の様子をますます不思議そうに見る真奥だが、

「こら魔王ー アルシエルー」

鈴乃に叱責されて我に返り、芦屋を促して二人ともものろと仕上げ作業に参加する。

炎天下、町の片隅のアパートの裏庭で、なんだかんだと言いながら、聖職者と、女子高生と、魔王と悪魔大元帥が仲良く草むしりをしている。

恵美はそんな姿を木陰で眺めながら、

「本当に……」

「ままだ？」

蟬時雨の中、腕に抱える赤子にも聞こえないほど小さな独り言を漏らした。

「いっそのこと今すぐ後ろからやっちゃえれば、どんなに楽かしら……はあ」

その目は、汗と泥ですっかり色が変わってしまった、白いTシャツの背に注がれていた。

「こんなところに銭湯があったんですね。自分の家の近くなのに全然知らなかった」

千穂はその建物を見上げながら感心して言う。

ヴィラ・ローザ笹塚から十分ほど歩いたところにある、魔王城御用達銭湯である銭湯・笹の湯である。

外見は一見普通の雑居ビルに見えるが、中は古式ゆかしい銭湯の佇まいを今も残し、富士山の書き割りも健在だ。

一方で浴槽の種類も豊富、お得な回数券システムの導入、番台の手前には牛乳の自販機を置いた男女共用の休憩待合スペース、石鹸などのオリジナル商品販売など新規顧客を取り込む努力も怠らない商魂たくましい一面もある。

「昼早い時間からやってて、夜もバイトをラストまでやってもぎりぎり滑り込めるくらい営業時間長いんだ」

草むしりスタイルからシャツだけ着替えた真奥がその隣でお風呂セットを抱えて言った。

「笹の湯は色々なタイプの湯があつて、立ったまま使えるシャワーブースもあるから今日の千穂殿にはもってこいだ。もちろん掃除を手伝ってくれた千穂殿の分は私が出す」

鈴乃が何やら鼻を膨らませてそう言い、

「今日のちーちゃんとかシャワーとか、なんの話だ？」

その言い回しに違和感を覚えた真奥が尋ねるが、

「はいはい、いいから早く入っちゃいませよ」

「おふろ、ざぶーん！」

後ろから恵美が強引に会話を割って入って、千穂と鈴乃を女湯の方へと押しやろうとする。掃除の途中からやってきた恵美が当たり前のようにについてきていることは特に気にならないが、問題は恵美も、当然のように銭湯に入る準備をしていることだ。

恵美はいつものシヨルダーとは別に、アラス・ラムス用のタオルと着替えを入れたビニール

バッグを持っていた。となれば当然恵美もアラス・ラムスも銭湯に入る気なのだろう。

掃除している時点で千穂も鈴乃も恵美が来ることは了解済みだったようだし、このあと女性だけでどこかに出かけるのかもしれない。

詮索は野暮（やぼ）というものか。

「ほら、着いたぞ漆原（うるははら）。きちんと立て。全く世話の焼ける……」

「あー……まだくらくらする」

後ろでは、熱中症のピークを過ぎた漆原が芦屋（あしや）に支えられながらふらふらしている。

ほとんど働いていないとはいえ、全員で風呂（ふろ）に行ってしまったている内に部屋でそのまま死なれても困る。水分を摂取させて水風呂にでも放り込んでおけば回復するだろう。

「まあ何する気か知らねエが、ほどほどにな」

真裏は恵美達にそう声をかけて、自分のお風呂セットから回数券を取り出そうとすると、

「全く、気楽なものよね」

恵美のそんな呟（つぶや）きが聞こえてきた。

思わず振り返るが本人は聞かれていたとは思わなかったようでこちらを見もしない。

代わりに、

「ばばもいっしょじゃないの？」

恵美の肩越しに、何やらアラス・ラムスが熱い視線を投げかけてきている。

「え？」

「は？」

これには恵美と真奥が同時に声を上げた。

「ばばとまま、ちがうおふろはいるの？」

「え」

無邪気も無邪氣すぎる問いに、その場の全員が固まった。

「あー、あのねアラス・ラムスちゃん、ばばとままは一緒のお風呂には入れないのよ？」

なんとか最初に立ち直った真奥が引きつる笑顔を浮かべてそう言うが、

「うんー ばばもいっしょ！」

アラス・ラムスは引き下がらない。

「あ、あのねアラス・ラムスちゃん、ばばとままは一緒のお風呂には入れないのよ？」

未だ固まっている恵美に代わり、千穂がなだめに入るが、

「でもおふろ、ここ、ばばといっしょにはいった！ あるしえーるもるしふえるも！」

アラス・ラムスは頑として譲らない。

「アラス・ラムス、大人は女と男で別のお風呂に入らなければいけないのだ。ばばとままを困

らせてはいかんぞ」

鈴乃もなだめに入るが、アラス・ラムスは口をへの字に結んだままだ。

「ばばと……おふろ……」

そのまま俯うつむいて今にも泣き出しそうになってしまふ。

「……ここ、アラス・ラムス連れてきてたことあるの？」

ようやく口を開いた恵美が真奥に尋ねる。

「ああ、アラス・ラムスがうちにいたときはな……ここはぬるめの湯と熱い湯が選べるし」

恵美の聖剣せいけんと融合する以前、アラス・ラムスが魔王城で生活していた短い期間、真奥達はア

ラス・ラムスを連れてこの笹ささの湯にやっていた。

真奥が連れてくることもあったが、仕事忙しい場合には芦屋あしや。ときには鈴乃の手を借りた

こともあったため、アラス・ラムスは男湯と女湯両方の記憶があるのだろう。

「アラス・ラムスちゃん、久しぶりに真奥さんとお風呂入りたいんじゃないですか？」

口をへの字にして目を潤うるませ始めたアラス・ラムスを見て千穂が言い、恵美も嘆息する。

「そうなの？」

「……う」

目をぐしぐしとこすりながら頷うなづくアラス・ラムス。

「なあ、アラス・ラムス」

「ばば……いっしょ」

決壊寸前の涙を、真奥の穏やかな声が止める。

「いつもは、ままと一緒に風呂入ってんのか？」

「……ん」

「そっか、なら今日は、ままと一緒に入るのは我慢だ。そのかわり、ばばと一緒に入ろう」
「ばばといっしょ？」

「……」

アラス・ラムスと目の高さを合わせるために屈み込む真奥のつむじを、恵美は眉を擡めながらも何も言わずに見ていた。

「ままのおうちに行ってから、一人で体キレイキレイできるようになったか？」

「ぐす……うん。ひとりでできるよ？」

「そうか、えらいぞ。頭は？」

「ううん」

そこは素直だ。アラス・ラムスはやたらと髪が長いので、どうしたって一人で洗髪できるよになるのはずっと先のことだろうが、真奥はそんなアラス・ラムスの頭を撫でてやる。

「じゃあ内緒で練習して、ままをびっくりさせてやろうぜ」

「……う、れんしゅう、する！」

なんとか泣き出さずに済んだアラス・ラムスは、そう言うときだけ申し訳なさそうに恵美を見上げた。

「ないしょ、ね？」

「……」

「そんな顔すんなよ。信用しろって。これでも少しの間は風呂に入れてやってたんだからよ」
これは恵美への言葉だ。

「泣く子にや勝てねえし、お前らこれから何か予定あるんだろ？ あれだったら、お前らの用の間、預かっててやってもいいぜ？」

「……」

恵美は真奥とアラス・ラムスの目を交互に見る。そしてそんな様子を、後ろから千穂と鈴乃がハラハラしながら見守っている。

「……別に、そういうところで信用してないわけじゃないけど……」

「あ？」

恵美がほとんど睨むようにしながら口の中でもごもごと言った言葉を、真奥は聞き取れなかった。

恵美は眉を寄せながら手を差し出す真奥を見ていたが、

「まま、だめ？」

その一言で、全てを諦めて肩を落とした。

「そんな目で見ないで。もう……」

アラス・ラムスを悲しませるのは、惠美の本意ではない。

「……じゃあ、お願いするわ」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「……え？」

その瞬間、惠美以外の全員、アラス・ラムスの世話を申し出た真奥までもが疑問の声を発し、疑問の声の五連鎖に惠美本人すら遂に疑問の声を上げてしまう。

「ど、どうしたのよ皆……」

戸惑う惠美だが、両手を差し出したまま固まっている真奥に、アラス・ラムスを渡した。

「ばばーいっしょー！」

「……」

「ばあば？」

「惠美、お前……」

「何？」

真奥は片腕でしっかりアラス・ラムスを保定しながら、思わず惠美の額に手を伸ばす。

「ちよっ！」

「あっ！」

今度は惠美だけでなく、その様子を見ていた千穂も思わず声を上げた。

「お願いするとか素直すぎねえか？ 熱でもあんのか？」

「な、あるわけないでしょ！ 触らないでよっ！」

手厳しい態度で真奥の手をはね除ける様子だけ見れば、普段の惠美と変わらないように見える。だが、

「すすすす鈴乃さん、み、み、見ました？」

「み、見た。確かに」

後ろで千穂と鈴乃が驚いて顔を寄せ合っている。

「おのれエミリア……何か良からぬことを企んでいるのではあるまいな」

「……」

そんな様子を戸屋と漆原もいぶかしんでいる。

それもそのはず、ついこの前までの惠美なら、真奥に手を触れさせることすらないはずだ。

仇敵同士が暢気に同じ銭湯に出向いている時点でお互い命に関わる不意打ちなど今さら考へもしないが、それでも惠美が真奥に対して「お願い」し、あまつさえ真奥に触れられるまで

なんのアクションも取らない、ということとは未だかつてなかったことだ。

周囲の違和感に真奥も気づく。

以前、恵美の怪我の治療を手伝おうとして明確に拒否されたことを思い出したのだ。

「な、何よ皆……私、何か変？」

何かどころの話ではない。

それどころか、恵美の口から「皆」という単語が出てきているのも、千穂にしてみれば驚きの種だ。

これまでの恵美は、起こった事態に対応するためにやむを得ず真奥達と協力することはあつても、真奥と芹屋と漆原を決して自分の人間関係内、すなわち「自分を含めた皆」にカテゴライズすることなどなかった。

恵美にとっては鈴乃やエンテ・イスラと日本の人間を含めた「私達」と、真奥ら悪魔や、恵美に敵対した天使らを向こうに置いた「あなた達」だったはずだ。

「何も、変なことないですよ」

「千穂殿？」

どう考えても変な恵美に、柔らかな笑顔で言う千穂と、それをまたいぶかしむ鈴乃。

「真奥さんすいません、私も遊佐さんも、ちょっとやることがあるんです。その間、アラス・ラムスちゃんお願いします」

「お、おう……ま、任せとけ？」

なぜか疑問形で答える真奥。

「それじゃアラス・ラムスちゃん、また後でねー」

「あとでー！」

手を振る千穂に、小さい手を振り上げて応えるアラス・ラムス。

真奥も思わず手を振りながら、様子のおかしい女性陣が女湯に消えるのを見送った。

扉が閉められ、思わず真奥は芦屋と顔を見合わせる。

「なんだありや」

「鬼の霍乱、^{サクラノ}というやつでしようか」

「芦屋、それ何か使い方違う。まあ、熱が出る疑いがあるって点じゃ正しいのかもしれないけどさ」

「……」

漆原はようやくいつもの調子を取り戻したようで、青い顔をしながらも芦屋に突っ込む。

「……この前のことで、何か引きずってやがんのかなあ」

真奥はぼやく。

この前、とは、八月の下旬に二人の天使がテレビ電波を使って引き起こした事件のことだが、その際惠美は、大天使ガブリエルから、彼女の勇者としてのアイデンティティに関わる真実を告げられたらしい。

魔王軍の侵攻で死んだと思われていた恵美の父親が、生きている。

真奥を父の仇と面と向かつて叫んだ恵美にしてみれば、複雑極まりない心境だろう。

だからといって特に恵美のことを気遣う義理は真奥には無いのだが、その後千穂が手に入れた真実は、恵美に伝えられたのだろうかと思ふ疑問が湧く。

その事件で千穂は、それまで姿の見えなかった第三者から突然強大な力と、真奥と恵美に向けたメッセージを預けられていた。

そのメッセージを恵美が受け取ったかどうかについては千穂は何も言わないし、恵美も当然言つてこないのが真奥も敢えて聞こうとは思ひなかつた。

恵美の態度の微妙な変化は、もしかしたらそのことが原因なのかもしれない。

「だとしても、我々への態度が軟化するようなことではないと思うのですが」
芦屋もその場に居合わせたので、真奥が言う「この前のこと」は大体知っている。

「……ま、あんまり様子が変なようなら後でちーちゃんにでも聞いてみつか」

真奥は御年八十過ぎだという笹の湯の番台の主、村田トヨさんに回数券とアラス・ラムスの分の入浴料を払い男湯の脱衣所に向かう。

「真奥ちゃん」

「ん？ 何、トヨさん」

滅多に口を開かないトヨさんが、突然真奥の背に声をかけてきた。

「嫁か？」

女湯の方に顎をしやくるトヨさん。真奥は苦笑して首を横に振る。

「母親だけど嫁じゃない」

「……ん、子が笑つとりやそれでええ」

何を思ったかは知らないが、トヨさんはそれ以上何を言うでもなく、番台の陰から聞こえるラジオ番組に聞き入るようにして目を閉じる。

たまにあるトヨさんとの会話は、大体こんなものだ。

真奥はアラス・ラムスを抱っこし直してから、威勢よく宣言した。

「さあアラス・ラムス！ 風呂に入るぞー」

「おー！」

「あー、頭に響くから大きな声上げないでよ」

「漆原、爆りが面倒だから貴様は熱い湯には入るなよ」

あまり悩みのなさそうな父子と主従は、だらだらと男湯に消えていった。

※

「わあー！ もしかして私達、一番乗りですか!?」

外から見るとより広々とした脱衣所に人の姿が無いのを見て、千穂が快哉を上げる。

「そうだな。まあこんな昼日中からしつかり風呂に入ろうという人間もなかなかいい。好都合だったな」

鈴乃は手慣れた手つきで、積まれた脱衣籠を手に、ロッカーの前に早くも陣取っている。

「確かに他に人がいないのはいいかもしれないけど、男湯の方は大丈夫なの？」
気楽に構えている鈴乃に、恵美はそう言つて男湯側の壁を指差す。

「まあ大丈夫だろう。千穂殿次第ではあるが、状況を見て判断すればいい。それに……」
鈴乃は苦笑しながら、千穂の方を見る。

「ことが千穂殿に関わる話だ。いつまでも魔王達に隠してはおけない。なら最初から既成事実を作つて追認させた方が何かと楽だ。奴らも馬鹿ではない。話せば分かるだろう」
恵美はそれなりに真剣に尋ねたつもりだが、鈴乃はあまり気にした風ではなく、早くも浴衣を解き始める。

「あ、あの……鈴乃さん、遊佐さん、今日はよろしくお願いしますっ！」
そこに妙に緊張した千穂の一礼。

労働の疲れを癒すために来たはずの銭湯で何をここまで緊張しているのだろうか。

千穂は至極真剣な目つきで二人を見ると、自分も鈴乃の隣に立つて服を脱ぎ始める。
そこまで畏まられると恵美としてもこれ以上変な予防線を張れなくなってしまう。

「……話せば分かる……か」

惠美はふと、さつきまでアラス・ラムスを抱いていた自分の右腕に目を落とした。

「なんだか、私がバカみたい……」

「……あの、遊佐さん？」

千穂がシャツを脱ぐ手を止めて、心配そうに惠美を見ていた。

「や、やっぱり、ダメ……ですか？」

そしてそんな質問。

惠美は即座に首を横に振った。

「ごめんなさい、そうじゃないの、こっちの話。私だってダメなら最初からここには来てないしこれを持ってきてもいいわ」

惠美は慌てて憂鬱な表情を消し去ってから、殊更に明るく言いながら、シオルダーバッグの中にあるものを取り出す。

一見したところ、それはどこにでも売っているような栄養ドリンクの小瓶にしか見えない。だが、その中に凝縮されているものはこの地球上には本来存在しないはずのもの。

「千穂ちゃん、これが日本での私達の力の源、ホーリービタンβ^{ベータ}よ」

千穂は、手渡された瓶をしっかりと握りしめ、真剣な顔で頷く。

「やるからには、私もベルも真剣に取り組むから、そのつもりでいて。いいわね？」

「はいっ！」

千穂の力強い返事。

「ベルが銭湯で何するつもりか知らないけど、始めましょうか。千穂ちゃんの法術修行を」

事の起こりは、ガブリエルとラグエルを退散させた翌日、千穂が退院する前の日に遡る。

恵美は、その日の勤務を終えると、千穂の見舞いに向かった。

諸々の検査で万事健康体であることが分かったとはいえ、日本の常識に照らし合わせれば原因不明の昏睡であつたことに変わりはない。

「大げさだと思ふんですけどね」

「入院患者は皆そう言うものよ。そうでなくても体に無理させたんだから、大人しく休んでなさい」

すぐに退院できなくて不満げな千穂を、恵美はびしやりと窘める。

ドコモタワー、スカイツリー、東京タワーの三ヶ所で見せた千穂の力は、どう考えても千穂が一朝一夕に得られるものではなかつた。

恵美はその点について千穂に聞きたいことが沢山あつたが、千穂は、真奥にしたのとはほぼ同じ話しかすることができなかった。

即ち、何故有り得ない力を得ることができたか。その際にどのようなやりとりがあったのか。恵美と会うまで何をしていたのか。

そしてその力を貸してくれた相手のことは、

「だから結局全然分からなくて……」

千穂が申し訳なさそうにベッドから見上げてくるが、恵美は首を横に振った。

「ううん、ありがとう。大分、参考になったわ」

「……そ、そうですか？ あ、あと、遊佐さんには伝言……というか、お話ししなきゃいけないことがある気がするんです」

「なんでそんなあやふやなの。話さなきゃいけない気がするって」

「その……真奥さんにはまた別の話があったんですけど……」

千穂は、自分の頭の中に、どう考えても自分の記憶ではない真奥の幼い頃の記憶があることを話した上で、

「これは、遊佐さんに話さなきゃいけないことのような気がする……」

それ以外に、また別の記憶が残っているのだと言う。

「大柄な男の人が見えるんです。髭を生やしてて、あんまり髪が長くないのに後ろでちょっと束ねてて、中世ヨーロッパの農家のおじさんみたいな服着た、目が細い優しそうな人です。どこだろう。夕焼けに照らされて金色の稲穂みたいなのが見えて……」

「!!」

惠美の心臓が大きく跳ねる。

「そ、それって……もしかして稲じゃなくて麦の穂だったりしない？ 稲は収穫期になると穂が垂れ下がるけど、大抵の麦は直立したままなの」

「じゃあ、そうかもしれないですね。でも、背景はちよつとはっきりしなくて……そのおじさんが剣を持って、私……というか、こっちの方を見て何か話してるんです」

「え？ 剣？」

心臓の鼓動は、次の瞬間不穏な蠢動に変わる。

「剣？ 本当に？」

「はい。そうですけど」

惠美が何に引つかかっているのか分からない千穂は首を傾げつつ続ける。

「でも実はそれだけ……なんです。記憶としての映像はそれだけで、あとはそれだけ、という言葉に落胆を隠せない惠美に、千穂は言葉を紡いだ。

「あしえすあーら」

「……何？」

「あしえすあーら。その男の人が一言、そう言っただけです」

「あしえすあーら？ アシエス……中央交易言語かしら。後でベルに聞いてみるわ」

聞き慣れない響きを、記憶にメモする恵美。

「なんだかこのことだけは、遊佐さんに伝えなきゃいけない気がして……私も自分で言ってる。なんのことだか分からないんですけど……」

不安げな千穂を見て、恵美は考える。

千穂は東京ビッグエッグタウンの白い女性に会っていないから分からないかもしれないが、これはもう十中八九決まったようなものだ。

むしろどういう意図があって自分の正体を隠すような真似をしているのか分からないが、イエソドの欠片を千穂に与えて、巨大な聖法氣を操り、漆原をないがしろにし、ガブリエルやラグエルに対し反抗し、更に麦穂を背景にした男の記憶を千穂に託す理由のある者など一人しかいない。

「ありがとう教えてくれて。参考になったわ」

恵美は、笑顔を作ってそう言った。笑顔を、作って。

「……あ、あの、遊佐さん？」

「ん？ なあに？」

千穂の呼びかけに恵美はより明るい笑顔で答えたつもりだったが、なぜか千穂は怯えたように身を竦めた。

「な、何か凄く、怒ってませんか？」

「え？」

「あの、その、ごめんなさい。真奥さんにも謝ったんですけど、やっぱりなんの訓練もない私が戦いに行っちゃって、その、邪魔にならないかなって思ったんですけど、でも、あの、その、えーっと心配させちゃって、あの」

千穂が涙目になりながら矢継ぎ早に謝罪の言葉をまくしたてる。

恵美は思わず自分の顔に手を当てて、

「……顔に出ちゃってる？」

「やっぱりっ！」

そんなことを聞くものだから、ますます千穂が怯えてしまう。

「ごめんね。別に、千穂ちゃんに怒ってるわけじゃないの」

「……へ？」

どうにかこうにか表情を普通に戻した恵美は、千穂を落ち着けるようにそう言ってから、大きくため息をついた。

「日本では前時代的な考え方だってことは分かっているんだけどね、私、これでも結構、子供は親に敬意を払うべきだと思っての。ある程度無条件にね」

「ええ、まあ、それはそうだと思いますけど……」

「ごはん食べさせてくれたり、安全な家を用意してくれたたり、教育を受けさせてくれたりする

わけじゃない？ 大人になればなるほど、そういうありがたみってのは骨身にしみて理解できるものだと思うの」

「は、はい……」

恵美が突然何を言い出すのか分からず、千穂は頷くしかできない。

「……でもね……やっぱり、物には限度ってものがあると思わない？」

「な、何がですか……」

恵美は、黒く笑った。美しい笑顔なのに、千穂はますます背筋が寒くなる。

「どこほつき歩いてるかも分からない、面倒事の種ばかりあっちこちにバラまいて、尻拭いは全部人任せ、子供の友達にタカるわ、下らない伝言ばかりで必要なことはなんにも言わず、挙句の果てに全く違う世界の人に迷惑かけっぱなしで……ほんとうにもう!!」

「ゆ、遊佐さん、ちょよ、ちょっと静かに……」

頭を抱えて首を振り、何事か荒ぶる異世界の勇者を落ち着かせようと周囲を気にしつつ声をかけた千穂だが、

「……どうして……どうして見てたくせに、私のところに来てくれないのよ……」

ふと、頭を抱えてうずくまった恵美の小さな泣き声を聞いて、千穂は固まる。

それが、隠しようのない寂しさに彩られた言葉だったからだ。

「……ごめん、少し取り乱したわ」

「……いえ……その」

千穂は、言葉を紡げず氣まずそうに俯いた。

「ごめんね、こんな話、するはずじゃなかったのにね」

惠美は大きく息を吐いて自分を落ち着かせると、足元に置いた紙袋を手を取った。

「これ、お見舞いの品。アラス・ラムスのリクエストだから、ちよつとそれっぽくないけど」

紙袋の中からは、高級和菓子屋のサラダ煎餅が出てきた。それを見て、千穂はようやく顔を緩ませる。

ちなみにアラス・ラムスは、惠美が就業中頭の中でずっと起きていたのが災いし、今は昼寝中。結局惠美と融合しっぱなしである。

「でもありがとう、おかげで色々分かったこともあるわ。千穂ちゃんも元氣そうだし、ひとまづ安心つてとこかしらね」

仕切り直すように言う惠美に、千穂はサラダ煎餅の袋を抱えたまま、わずかに頷く。

「あの、遊佐さん！」

「ん？」

「本当、今回はすいませんでした。軽はずみなこととして……」

「それはもういいわよ。結果的には千穂ちゃんも無事だったし、千穂ちゃんに助けられた部分もあ……」

千穂にしては珍しく、決着済みの件に詫^わびの言葉を重ねてくるのを見て、恵美は問題ないことを伝えようとするが、

「そこなんです！」

更に強い千穂の語氣に、何事かと目を丸くする。

「今回は無事でした。でも、次に何かあったとき、無事だとは限らないですよね」

「な、何を言いたいの」

恵美は不穏な氣配に嫌^{いや}な予感がして尋^{たず}ねると、千穂は、左手の指輪に目を落とした。

「今は、あの力はどこにもありません。今病院の窓から飛び出したら落ちて死んじやいます。

ここ三階ですし」

そういう問題でもないが、恵美はとりあえず黙^{だま}って聞く。

「真奥^{まおく}さんが言ってたんですけど、私は、聖法氣^{せいぼうき}……でしたっけ？ その許容量が大きくないから反動で魔力中毒になっちゃったんですよね。だから、きつとあの力は私のものになったわけでもなんでもなくて、本当に一時的に借りてただけだと思っんです」

恵美は嫌な予感をますます深める。

「でも、ガブリエルさんやラグエルって人にあれだけのことで、今はもう、私も何かあったときには真奥さんのアパートに近づかなければいいって問題じゃなくなってる……」

「ストップ！ ストップ！ 待って待って！ そうくると思ってたわ！」

惠美はこめかみに指を当てて唸る。

「そのあと何が言いたいのか当ててみましょうか！」「私にも身を守るための術を教えてくださいー！」じゃない？」

「え？ な、なんで……」

千穂は図星を突かれて驚いたように目を丸くするが、惠美にとっては容易な想像である。

「今千穂ちゃん自分で言ってたでしょ？ あなたのあの力は借り物で、本来あなたが使っている力じゃない。法術を便利な魔法が何かと思ってもらっちゃ困るわ。身を守ったり戦ったりするための法術は、心技体の訓練を長い間積んだ果てに会得できる、危険を伴う技術なの」

何かと弁が立つ千穂を説き伏せるには、先制攻撃しかない。惠美は早口にまくしたてる。

「お父様が警官なんだから分かるでしょ？ なんの訓練も積んでない高校生がいきなり拳銃を持っても、『戦闘』どころか身を守ることすらできはしないわ。例えば拳銃の扱い方の知識があったとしてもね。『戦闘』っていうのは冷静な言葉の通じない相手が、なんのルールにも縛られず、こちらの命を断つことだけを目的にあらゆる手で迫ってくる環境なの。想像できる？」

「……それは」

惠美が殊更に厳しい口調になるのを、千穂は、ただ黙って見つめ返している。

「平和な日本の常識では測れない次元で『何が起こるか分からない』のが『戦場』よ。千穂ちゃんが法術を習得するってことは、拳銃だけ持って弾丸の雨が飛び交う地雷原に入ってくるよ

うなものよ。そしたらそこで戦ってる奴らは、その拳銃を『武器』、千穂ちゃんを『敵』とみなして殺すつもりで容赦なく攻撃してくるわ。手加減なんかしてくれない」

恵美は一気にそう言っ、小さく息を継ぐ。

「千穂ちゃんはまだ天界、魔界、エンテ・イスラのどこから見ても『関係者』に留まってる。ガブリエルやラグエルも、東京タワーでの出来事を千穂ちゃんだけの力だなんて思っ、てない。でもね、もしこれであなたが自分の『武器』を持って『戦場』に現れたら、誰かがあなたを『排除すべき敵』とみなすわ。そうになったら助けられるものも助けられないかもしれない」

恵美はそう言っ、ちらりと千穂のベッドの横を見る。

そこには千穂の母、里穂が持ってきた、千穂の身の回りの品が入った紙袋があり、里穂の字で、『洗濯物は別にすること』と書かれていた。

「お母様、本当に心配なさってたわ。『関係者』であることはどうにもならないけど、誰から『敵意』を向けられるようになったらダメ。ここだけは多分、魔王も私と同意見のはずよ」

敢えて真実の名を出すことで、千穂を説得しようとする恵美。

だが、しばし俯いた千穂が再び顔を上げたとき、その目には、全く違う力が宿っていた。

「ありがとうございます。そうですね。ようやく私、自分のやるべきことが見えました！」

「は？」

恵美は、一応千穂を叱ったつもりでいたのだが、どうも千穂は恵美の言葉を意図しない方向

に捉えた節がある。

「お父さんもよく言ってます。雑誌なんかでたまに載ってる防犯術とか護身術の案内とか、あんなものはなんの訓練もない人がうわべだけなぞったって役に立たないどころか、怪我の元にならんないって。遊佐さんの言ってること、そういうことですよね」

「えっと……ま、まあそうね。ちよつとスケールは違うけど、間違つてはいないわ」
千穂が何を言い出すのか分からず困惑する恵美。

「でも、やつぱり私、できることなら、遊佐さん達のような法術、使いたいんです」

「あのね、だから……」

「私、サリエルさんに誘拐されたとき、鈴乃さんに携帯取られちゃいました」

「え？」

これまた予想外の方向に話が飛んで、恵美は目を白黒させる。

「でも怪我させられたり、命が危険なことにはなりませんでした。あれ、私が『敵』じゃなくて『関係者』だったからですよ」

「そ、そういうことかしら。サリエルは色々いやらしいこと考えてたみたいだけど……」
そのときは恵美も一緒になつて誘拐されていたので、なんとも言えないのだが。

「あのときは、漆原さんのおかげでなんとか真奥さんが助けに來てくれました。でも、もし今後、ガブリエルさんとかが、遊佐さんも鈴乃さんも真奥さんも見てない所で私を誘拐して、

それで私が携帯電話取られちゃったら、もう私の居場所、知る方法ないですよね」

「……まあ、そうね」

千穂は両の手を力強く握って言う。

「お父さん、いつも言ってます。犯罪の気配を感じ取ったら、下手に自分で対処しようとせず
に迷わず通報してくれって」

「通……報……？」

恵美は、千穂が力を込めて言ったその単語を、思わず復唱していた。

「だから……もしエンテ・イスラの騒動に巻き込まれたり、兆しを見つけたら、絶対に自分で
なんとかしようなんて考えません。だから……」

千穂は顔を引き締めて、真っ直ぐに恵美の目を見た。

「どんな状況でも迅速に遊佐さんと真奥さんに危険を報せることができるように、私にあの違
う世界同士でも話がでるテレパシーの術……概念送受を教えてください!!」

「い、概念送受!?」

「はいっ!」

結果として、

「だ、誰に聞いたの、その術の名前……」

「一番初めのときに、真奥さんの部屋でアルパートさんが言ってたじゃないですか」

惠美は千穂に結局言い負かされていた。

「~~~~~」

相互の安全のために、概念送受を会得したい、という千穂の望みをはね除ける術を、惠美は持たなかったのだった。

惠美はその場は回答を保留にして、帰宅する足で笹塚に立ち寄り鈴乃に相談する。

千穂が法術を習得したがつている、という話の内容には当然鈴乃も難色を示したが、緊急時に「通報」したいという言葉は二人には説得力があるように思えた。

ヴィラ・ローザ笹塚二〇二号室はしばし重い沈黙に包まれたが、

「魔王に言われた。日本の人間をエンテ・イスラの事情に巻き込みたくないと喚くなら、何故私達は千穂殿の記憶を消さないのか、とな」

「何それ……だってそれは……」

鈴乃が来たばかりの頃、千穂と鈴乃が言い争ったことを思い出してはつとずる。

身の安全のためと千穂の記憶を消そうとする鈴乃から真奥達のことを忘れたくないと言った千穂をかばって、惠美は言った。

犠牲を必要悪と断じて、友達を泣かせた事実を目を瞑る、そんな平和のために私は戦ってきたんじゃない。

同じことを思い出したか、幾分居心地悪そうに鈴乃は苦笑した。

「命の安全だけを考えるなら、私達は今すぐ千穂殿の記憶を消して魔王城を滅し、エンテ・イストラに帰るべきだ。だが、私もエミリアもそれをしていない。色々な要因はあるにせよ、私達にとって千穂殿が、包み隠さず全てを曝け出すことができる友であるということは、その大きな理由の一つだ」

鈴乃のその言葉に、恵美も頷く。

「彼女にそうあつてほしいと願っているのは、私達……か」

「そう。だから我々には、その友を守るためにありとあらゆる策を講じる義務がある」

鈴乃はそう言うのと、立ち上がり、冷蔵庫の中にしまつてあるホーリービタンβを取り出す。

「勝手な話だな」

鈴乃は手に握つた、冷えた小瓶を握つて微笑む。

「私は千穂殿の健気な気持ち、純粋に嬉しい」

「……そうね」

恵美もまた、それに釣られるようにゆつくりと微笑んだ。

千穂が退院した後、恵美から法術修行をすることを許可されたときの千穂の笑顔は、まさに花のようで、恵美に向かって何度も何度もお札を言つて逆に恵美を慌てさせた。

そして今日が、恵美と鈴乃がゆつくり時間が取れる日、ということ、最初の修行日に設定されたのである。

裏庭掃除は、言うなれば千穂の最初の授業料代わりのようなものだったのだ。

「では千穂殿、服を脱ぐ前にまずは聖法気を体内に入れることから始めるぞ」

鈴乃がホーリービタンβを見て、解さかけた帯を結び直すと千穂を脱衣所の椅子に座らせる。ホーリービタンβの蓋を開けて千穂に手渡すと、反対側の手を取り、その掌に自分の掌を重ねた。

「いいか、それをちよつとずつ口に含むんだ。違和感があればすぐに中止させる」

「は、はい……」

自分から申し出たものの、やはり未知の力に触れるとあって千穂も緊張気味である。

鈴乃が千穂の手を取り、体内の様子を探索法術であるソナーでモニターする。

千穂は聖法気補充ドリンクであるホーリービタンβを少しずつ飲んで、肉体の受容量を超えないようにする。

千穂の肉体容量の限界まで聖法気が補充されたら、いよいよ法術修行の開始である。

概念送受は、その名の通り、二人以上の術者の間で概念を同調させ、遠距離で通信を行った、異なる言語を用いる者同士で意思疎通の間違いを防ぐために用いられる法術である。

今でこそ日本語を流暢に用いる真奥と恵美も、日本に來た当初はこの概念送受を用い、相手

に自分達の話す言葉を日本語と錯覚させていた。

そして千穂が天使達の策謀の巻き添えで入院する遠因になったのが、恵美の仲間であるアルバートの超遠距離概念送受である。

千穂が万が一エンテ・イスラの騒動に巻き込まれ、携帯電話を紛失して恵美にも鈴乃にも真奥にも連絡ができない状態になった場合、もし概念送受を会得していれば、最後の保険として期待できるのは間違いない。

「地球人に法術を用いる者がいないことから分るように、基本的に千穂殿の受容量は決して大きくない。くれぐれも、飲み過ぎには注意だ」

「……でも、東京タワーでは凄^{すご}い力使ってたけど、あれはどういうことなのかしら」

二人の様子を見ながら言う恵美。千穂は首を傾^なげたが、鈴乃は当然のことのように答える。

「今、私がやっていることと理屈は同じだろうな。今千穂殿の体内には、千穂殿が補給しようとしている聖法気とは別に、私の聖法気に由来するソナーが私の体を通して還流している。それはあくまで私の聖法気であって、千穂殿の総受容量に干渉する性質のものではない」

鈴乃は、握っているのとは反対側、ホーリービタンβを握る千穂の手の指にあるものを見て、低く唸^{うな}る。

「おそらくは、それを媒介にした術者が、千穂殿を聖法気が還流するルートの一つとして用いた、というのが本当のところだろうな。身も蓋も無い言い方をすれば、あのときの千穂殿は、

術者の体の一部として扱われていたとも言える」

鈴乃の分析に、恵美と千穂は違う理由で顔を曇めた。

「他人の体をなんだと思ってるのよ……」

恵美はこの場にはいない何者かに文句を言い、

「じゃあ、私やっぱり操られてたってことなんですか……」

千穂は、未知の力に簡単に身を任せてしまう危険を思い口を引き結ぶ。

「まあ、悪い方向に使われなかったことが不幸中の幸いと思うしかあるまい……」と、千穂殿、ストップだ。それ以上は飲むな」

鈴乃が千穂の手を止める。

「結構飲めるのね。三分の一減ってるじゃない」

恵美が、千穂が卓に置いた瓶を見て驚く。

鈴乃はしばらく千穂の手を握ったまま、それを見て言った。

「逆に言えば、このホーリービタンβの聖法気濃縮量はそれほど高濃度ではないということだ。丸一本飲んだところで、エミリアの力は全盛期には戻るまい？」

「まあ、そうだけど……」

それでも、エメラダには一日二本以上摂取するなどと致命されている。恵美は当初、二本以上飲むと受容量の限界を超えてしまうからだとはかき思っていた。

「やつぱりお薬だからじゃないですか？ 本当は自然回復するものなんですよね？ きつとサプリメントとかの、食事をバランス良く取ってくださって注意書きと一緒にですよ」

「……なるほどね」

千穂の言葉の妙な説得力に、恵美は大きく頷いた。

自然に摂取していればそれで済むものを、無理やり濃縮して保存できる形にしているのである。摂取量を誤れば、逆に自然摂取に問題が生じかねないというのはありそうな話だ。

「よし、体内の様子は安定しているな。千穂殿、体調に異変はないか？」

ようやく千穂の手を離れた鈴乃の間に、千穂は自分の手や体を見下ろして応えた。

「あんまり、何かが変わった感じはしないです」

「だろうな。だが、これで法術ほうじゆつを使うための基本的な準備は整った。ではとりあえず、まずは

風呂に入るぞ」

鈴乃は力強く宣言し、

「は、はいっ！」

千穂は背筋を伸ばし、恵美と鈴乃に頭を下げる。

「よ、よろしくお願ひします！」

どこまでも素直な千穂に、二人は顔を見合わせてる。

恵美自身は未だに風呂と法術修行がどう結びつくのかまるで分からないが、鈴乃はそうは言

つても上級型職者だし、彼女なりに考えがあるのだろう。千穂がやる気になっているのだから水を差すこともあるまい。

「どうするの？ まさかお風呂で基本的な座学を教えるの？」

「さすがにここで延々法術基礎の講義をするわけにはいくまい。それに千穂殿を信用しないわけではないが、座学を先行させれば概念送受以外の術が偶然発現しないとも限らないし、まずは時間をかけて基礎技能の活性安定だけを重点的に行う」

「な、何か難しそうな感じで、わくわくします！」

先ほどから少し声が硬い千穂。

恵美はそんな千穂の背に手を当てて優しく諭す。

「あまり緊張しないで。最初のうちだけはリラックスが肝心なの。だからベルも、お風呂を選んだんでしようし」

「そういうことだ。さあ、折角贅沢な昼の一番風呂だ。まずは仕事の疲れを癒そう」

「はいっ！」

恵美と鈴乃にそう言われてほんのわずかだか緊張が解けた千穂は、元気にそう言うと、着ていたTシャツの裾に手をかけた。

そして数分後。

「……」

「えっと……遊佐さん？ 鈴乃さん？」

磨き上げられたカランの前に並んで腰かけ、難しい顔で体と髪を流す恵美と鈴乃と、脱衣所で服を脱いでからずっとそんな調子の二人を恐る恐る窺う千穂がいた。

恵美も鈴乃も、カランの鏡の上に完全固定されているシャワーから降るお湯で、涙を見られないようにしながらがつくりと俯いていた。

「銚子の旅館のお風呂でも思ったけど……一体どんな生活してるとああいうことになるの？」

「あ、あの……」

「栄養、という点だけなら決して負けていないはずなのに……一体どうして……」

「え、えっと……」

「で、でも考えてみてベル。戦うのには、絶対邪魔よ」

「そ、そうか。非戦闘員なら仕方ないな。……仕方……ないな……」

そして、三人以外誰もいない広い浴場に響く、

「はあ……」

重いため息。

髪が短いので一番最初に洗い終わってもなんとなくその場を離れられずにいた千穂はそんな二人に恐る恐る尋ねる。

「あ、あの、何かあったんですか？」

邪氣の無きゆえに、妬むことも、からかうこともできない。髪に泡をのせたまま千穂の方を向いた二人は、示し合わせたような呼吸で言った。

「自分の胸に聞いて」

「へ」

訳が分からずおろおろする千穂。

恵美と鈴乃の不機嫌の理由が分からず心底慌てている千穂の可愛らしい顔を見て、異世界の勇者と聖戦者は数秒前の自分達の行いを反省する。だって千穂はなんにも悪くない。

「……妬みに身を任せるなど、聖戦者として恥すべき行為だったか……」

「嫉妬すらさせてもらえないなんて……千穂ちゃん……恐ろしい子」

そのまま沈黙の洗髪タイムがしばし続き、全身を洗い終えてから、

「では千穂殿、修業の開始だ！」

心が未熟な聖戦者は何もなかったかのように場を仕切り直した。

「あ？ え？ あ、はい、え？」

「いいの千穂ちゃん、なんでもないの」

涙目になっている千穂を、恵美は諦観の微笑みでなだめた。

恵美も鈴乃もタオルで長い髪を縛っているが、千穂はふと、風呂の中で髪を洗った後だというのに、鈴乃がいつもの簪を手に行っているのを見た。湿気で傷んだりしないのだろうか。



「では千穂殿、あそこのシャワーブースに入って、シャワーを高い所に固定してくれ」

「は、はい」

浴場の端にあるシャワーブースは、カランのそれとは違い、普通のシャワーのようなホース付きで、高い場所にシャワーを付け替えさせた鈴乃は、その下に千穂を立たせる。

「ところで、どうしてこのシャワーなの？」

二人の様子を後ろで見ながら恵美が何気なく問いかけると、鈴乃からは明瞭な答えが返ってきた。

「修行と言えば滝行だろう？」

「……………え？」

千穂と恵美の動きが、一瞬止まった。

しょぼしょぼちゃびびびしょぼぼよぼしょ…………。

千穂は直立不動で目を閉じ、頭の上から落ちてくる湯の刺激を感じながら、早くも鈴乃の方針に疑問を感じ始めていた。

それは恵美も同じで、シャワーブースの正面にあるぬるめの湯につかりながら、あからさまに不審な目で鈴乃を見ている。

鈴乃には、時折日本の文化を盛大に誤解したまま大真面目にそれに取り組むきらいがある。かく言う千穂も、幼い頃にテレビで見た滝行の様子を温泉やお風呂で真似して遊んだ経験があるの、なんとも複雑な気分だ。

鈴乃はシャワーを全開にするのではなく、千穂の頭頂目がけてお湯が太く落ちてくるように湯量を調節していて、お湯を浴びている、という感じでもない。

そんな疑問に拍車をかけるように、男湯の方から、

「アラス・ラムス！ 修行するぞ修行！」

「魔王様！ そちらのシャワーは熱いです！ 滝行の真似事なら隣のほうが！」

と真奥がはしやぎ慌てて戸屋が制止する声が聞こえてきたせいで、余計に千穂は自分が何をしているのか分からなくなってくる。

とそのとき、

「そのまま聞いてほしい。千穂殿、体力に自信はあるか？」

「い、一応人並には……これでも運動部所属ですし」

突然質問されて、千穂は目を閉じたまま、口にお湯が入らないように答える。

「法術を用いる者……エンテ・イスラでは法術士と呼ばれているが、法術はこの世界で呼ばれる『魔法』とは根本的に異なる。日本のみならず、地球では『魔法使い』『非力な人物』という

認識がないかと思つてな」

「……そうですね。私はそんなにやりませんが、ゲームとかでも魔法使い系のキャラはあんまり武器で相手を殴ったりはしないです……わぶっ」

頭から流れたお湯が口に入りそうになり、一瞬慌てる千穂。

「法術士は違う。体力がある者とそうでない者が、同じ法術を使えば、絶対に体力がある者の術が効果が強く、汎用性が高い。だからどれだけ才能に恵まれていようと、子供の法術士が大人の法術士より強い、ということは法術の世界ではまず有り得ない」

「ベル、もしかして昨日の洋画劇場見たの？」

恵美は、鈴乃が真奥と共に液晶テレビを買ったことを思い出す

昨夜は夜九時から、海外の人氣魔法使い映画の一作目がテレビ放映されていたのだ。

「隣の連中が盛り上がっていて、非常にうるさかったから何事かと思って、ついうつかり最後まで見てしまった。おかげで今朝は少し寝坊した」

千穂は目を閉じたまま苦笑する。真奥は、あれで結構な映画好きなのだ。

「一方で、老いた法術士が若いころと同じ感覚で法術を使い、体が術の負荷に耐え切れずぼっくり通ってしまった、という話も後を絶たない。なんの増幅器も用いず最大限の効果で法術を用いることのできる年齢は、十五歳からよほど節制して鍛錬を怠らないようにして、四十歳までと言われている」

「な、なんだかスポーツ選手みたいですね……」

「うむ。五十を過ぎてなんの増幅器も使わずに法術を用いていれば、もう超人レベルだ。エミリアと千穂殿には苦い名前かもしれないが、オルバ様はそういう意味では六十を前に未だ全盛期の聖法氣と法術力を保っておられるのだから、もう怪物のレベルだな」

「まあ……生身で悪魔型のアルシエルと渡り合うくらいだしね」

恵美は湯船で身を伸ばしながら、崩落する首都高の下でオルバやルシフェルと戦ったときのことを思い出す。

それでも日本で暴れたオルバが拳銃を使っていたのは、やはり年齢的に無駄な聖法氣を使いたくないという意識の表れだったのだろう。

「実際『六人の大神官』と呼ばれる方々は、老いてなお、という人物がほとんどだ。だがそれは基本的に例外。千穂殿はスポーツ選手と言ったがまさにその通り。聖法氣を用いる力は、基礎体力や筋力に比例すると思ってい。そしてその理由だが……エミリア。聖法氣は、摂取した後、どこに蓄えられる？」

恵美の答えは簡潔だ。

「心臓ね」

「ええ!?」

千穂としては、不思議な力はなんとなく全身に宿っているものと思っていたが、普通の内臓器官を持ち出されて驚いてしまう。

「簡単な理屈だ。肺から取り込んだ酸素は血液に乗って全身を巡る。血液を循環させるポンプの役割を果たしているのは心臓だろう？ 法術ほうじゆつを用いるには、全身ないし必要な個所せうけうしよに聖法氣を行きわたらせる必要がある。酸素と同じように聖法氣も必要な場所へ血液に乗って運ばれるわけだ。もっと正確に言うなら、還流する聖法氣のターミナルが心臓である、という言い方になる。これで法術と体力が密接に関係すると言った理由は分かるな？」

だから、と鈴乃すずのは言葉ことばを繋ぐ。

「極端なことを言うと、それなりの量の聖法氣を全身に行きわたらせておけばターミナルである心臓が破壊されても、還流している最中の全身の聖法氣を一気に戻して心臓を復活させる、などという荒業あらわざも、理論上は可能だ」

もちろん心臓が破損するような事態に陥るおちいのは戦闘行動ぐらいしか考えられないので、そこまではまねく大量の聖法氣を保持するのはまず有り得ないのだが、千穂ちほはその極端な事例に啞然だぜんとするしかない。

「という訳で、今千穂殿の体では、血液に乗って全身を聖法氣が循環し始めている。聖法氣は法術以外では代謝によってもごくわずかに消費される。エンテ・イスラにいる限りは自然摂取が行われるから意識はしないが、日本に来てからそのことに気づいた。おかげで……」

と、鈴乃は、自分の手の甲こうを指でこすって見せる。

「聖法氣受容量が高いと、総じて肌のツヤとハリが良くなる」

「えっ!?」

それにはさすがに惠美も驚く。

「だ、だから……わっ!! ……だから鈴乃さん、お化粧もしないのにそんなにお肌綺麗なんで
すか……!?」

衝撃の事実に千穂は頭からかかってくる湯も忘れて目を開けてしまい、慌てて閉じる。

「もちろん、バランスの良い食事を摂り、嗜好品や間食を控え、適度に運動をし、早寝早起きを心がけることも忘れてはいないが」

「……」

素なのか皮肉なのか知らないが、自然にそう言っただけの鈴乃の前に、甘いものが大好きでつい夜ふかしがちな年頃の女子高生と、忙しさにかまけてレトルトや外食が多いOLはグウの音も出ない。

「で、でも最近のアラス・ラムスの手前ちゃんにご飯作ってるし、なんとか……」

惠美は惠美で何を気にしているのか知らないが、真剣な面持ちで手の甲をこすりながら独り言を始めた。彼女には鈴乃ほど肌の調子がいい自覚がないのだろうか。

「エミリアの代謝に大きな変化が無いとすれば、アラス・ラムスが原因かもしれないぞ?」

その自己弁護の独り言を、鈴乃は真面目に受け取った。

「アラス・ラムスはエミリアと融合しているのだろうか? 聖剣を形作る進化の天鎖はエミリア

の肉体と不可分だし、アラス・ラムスの聖法氣をエミリアが補っているという可能性は否定できない」

「そういえば……最近お腹すきやすいかも……」

「遊佐さん!? 色々おかしいですよ!?」

恵美がよく分からないドツボに嵌ってしまったので、鈴乃は話を元に戻す。

「とにかく、肉体的な強さと法術の強さは比例する。つまり何が言いたいかと言うとだ。法術を使うと、とても疲れる」

「な、なるほど」

その結論に至るまでに、しなくていい回り道をしてしまった氣もするが、とりあえず納得する千穂。

「エミリアや私が法術を好き放題使っているように見えるのは、それに裏打ちされる体力があるからだ。体が傷ついても、全身に行きわたった聖法氣の代償により治療力が高まるから、千穂殿と私が同じ程度の怪我をしても、私達は千穂殿ほど行動が制限されない」

「じゃ、じゃあ、銃で肩撃たれたり、剣で腕斬られたりしても戦えるのはそういう……」

「そこまで来たら普通に痛いわよ。それこそ映画じゃないのよ」

少なくとも千穂の目の前で、そこまで恵美達が負傷した戦闘はかつてない。

「とにかく、聖法氣の扱いに慣れないうちの疲労は想像を絶する。まずは聖法氣の活性化の仕

方を覚えて、そこから具体的な術の行使を行い、最後に効率良く聖法氣を使う方法を教える。
……さて、シャワーはそろそろいいだろう。次はぬるい方の湯につかるんだ」

「は、はい」

千穂はシャワーブースから出ると髪の手拭を払ってタオルで締めようとするが、

「千穂殿、頭にタオルを巻くな。露を少し拭いて、そのまま入れ」

「あ、は、はい」

千穂は髪の水気を申し訳程度に拭くと、湯に髪をつけないよう注意して湯船に足を入れる。

「湯船の縁に後頭部をつけて……そう、湯に浮かぶくらい体から力を抜くんだ。そして、頭の上からつま先まで、自分の体に聖法氣が行きわたるイメージを作る」

弓道部の練習で行う精神統一の座禅と似たようなイメージを抱いた千穂は、言われるがままに湯船の中で体の力を抜く。

ぬるい湯が肌に心地よく、意識せずともふわりと体が浮き上がる。

そんな中、先ほど細く絞ったシャワーで打たれ続けた頭頂部の感覚が、日頃イメージしにくい「頭の上」を簡単に意識させてくれた。

このためにあの遠行もどきがあつたのだろう。千穂はわずかでも鈴乃の方針を疑ったことを心の中で詫びる。

体内に不思議な力が宿った、という感覚は未だ無いが、未知の世界に足を踏み入れる昂揚感

に、千穂は自然と笑顔になってしまふ。

術を学ぶ動機は至極真面目なものだが、それでも今までできなかったことができるようになる、という期待感には抗いようもない。

「うむ……滞りなく還流しているようだな」

「そうね、全然乱れてない。安定してるわ」

気がつけば、両手を鈴乃と恵美に持たれていた。体の中をモニターしてくれているのだろうか。

「では、まずは活性化だ。最初のうちは小器用に必要量の聖法氣を使うことなどできない。とにかく一回一回の術の行使に全力で取り組み、慣れてきたら自分で無駄な力を削り取るんだ。このあたりの感覚は、千穂殿も運動部に所属しているなら分かると思う」

肉体的な強さに準拠する力なら、確かにその理屈は正しい。

「ではそのまま深呼吸だ。鼻からゆっくり吸って、口から細くゆっくり吐く。そうやって、自分の体を空気と血が巡っていることを感じ取るんだ」

「分かりました」

そのままかなり長いこと深呼吸をしていた千穂はうつすらと汗ばんでいた。

「よし、いいぞ。千穂殿、目を開けて体を起こせ」

言われたように体を起こすと、湯で温められていたこともあり全身が程よく火照っている。

「ではエミリア。すまないが、何か増幅器が必要でない術を一つ、披露してはもらえないか」

「増幅器のいらない術？ 私、大体が破邪の衣が聖剣由来の術ばかりだけど……」

千穂の準備運動の様子をぼんやり眺めていた恵美は、突然振られて目を瞬かせる。

「あ、あのすいません、どうふくき、ってなんですか？」

恵美の思考を遮って千穂が問う。

「ああそうか。すまない。有体に言えば、術の発動に必要な道具だ。例えば私の場合」

鈴乃はやおら湯船の縁に置いてあった簪を手にとると、それを虚空で振って見せる。

「わー」

簪が輝いて、瞬きする間に巨大な大槌に変化していた。

誰もいない銭湯に、巨大な大槌。他の人間に見られたらどんな言い訳をすればよいか見当も

つかず、千穂は誰か新しい客が入ってきやしないかとヒヤリとする。

「簪を媒介に、このように術を発動できる。後でまた説明するが増幅器、つまり媒介があると

聖法氣を行使する際非常にイメージしやすい。結果、聖法氣消費の効率が良くなる。増幅器そ

のものは、別に特殊な道具である必要はない」

鈴乃の簪は、良い品ではあるが決して特別な法術用具ではなく、彼女が日本に来て間もな

いころ、好き放題買い物して手に入れた品である。

「じゃあ、本当なら破邪の衣と一緒にの方がいいんだけど……天光駄靴襪」

言いながら惠美は、湯船の中に座ったまま小さく声を出した。すると、

「ゆ、遊佐さん!?」

湯船の底の惠美の足元あたりが突然光ったかと思うと、惠美が座った姿勢のまま浮き上がってくるではないか。最終的には水面を完全に出て、湯船の上に浮かび上がってしまう。

昼間の銭湯に現れる裸の大槌女と裸の空中浮遊女。何も知らない人間が見れば、怪奇現象どころの騒ぎではない。

「本当は破邪の衣と一緒に使う技だから少し粗いけど、でもこれが増幅器を使わない術ね」

「は、はあ……粗いつて……何がですか?」

入り口をちらちら窺いつつも、千穂の目からは映画の中の魔法のようにとても美しく見えるのだが、鈴乃は浮かぶ惠美に近づいて光のブーツを指差す。

「見る。光の縁を。焚火の炎のように、激しく波打っているだろう?」

「あ、本当だ」

千穂は鈴乃の大槌と見比べる。

鈴乃の大槌からも光が放射されているのだが、惠美のブーツのように不安定に激しく揺らめく光ではなく、ガスコンロから放射される均一な炎の放射を思わせる動きをしていた。

「これはつまり出力されるエネルギーが不安定ということだ。術の種類によるから一概には言えないが、同じ効果を望むなら増幅器があった方が、どんな術も効率よく、かつ高い効果が期

待できる」

「ふう……やっぱり、術単体だと疲れるわね」

恵美はゆっくりとまた浮遊状態から湯船につかり直し、鈴乃も大根を臂に戻したので、千穂はようやく安堵の息をつく。

「さて千穂殿、問題だ。私の術と今のエミリアの術で、何が違った？」

「何が違ったか……ですか？」

千穂は、鈴乃と恵美が術を発動させた際、何が起こったかを頭の中で反芻する。

「……鈴乃さんの術は、術の名前とか無いんですか？」

その回答に、鈴乃は感心して眉を上げた。

「よく一度で気づいたな。もちろん、術の分類上の名前がある。武身鉄光と言う」

「でも、そう言いながら使ったりしませんでしたよね？ その、イメージがしやすい増幅器を使ってるから、ですか？」

「正解だ」

鈴乃は満足げに頷いた。

「術の行使とは、つまるところイメージの具現化だ。聖法氣を用い望む効果を生み出すには、洗練された聖法氣活性化の知識とイメージ力が重要になってくる。硬い粘土をこねて像を作るようなものだ。つまり、増幅器が無い術の場合、術の名や効果を敢えて口にするだけで、よ

り効果をイメージしやすくするという手続きが重要になる。実際それがあるのと無いのでは、効果や効率は驚くほど違う」

改めて解説付きでこのような現象が目の前で起こると、恵美や鈴乃が本当に地球の人間ではないということを実感する千穂。

「だが、聖法氣の活性化、という概念は最初はイメージしづらい。現実の行動には、なかなか無いイメージだからな。だから、どうやって聖法氣を動かすかを学ぶより、自分で活性化させて自分の体の中で処理の仕方を覚えるのが一番早い。エミリア、済まないが、脱衣所に出て番台の注意をそらしてもらえるか。入り口と天窓には私が結界を張る」

鈴乃が顎をしゃくると、恵美は頷いて湯船の中で立ち上がった。

「え、え？ どうしてですか？」

「法術を学ぶ人は皆やることだけど、日本でなんの対策も立てずにやったら通報されちゃうから」

恵美が物騒なことを言い出し、千穂は俄然不安になってくる。

「な、何を始めるんです？」

「簡単だ。大声を出せ」

「へ？」

千穂は思わず鈴乃と恵美の顔を二度見する。

「言葉はなんでもいい。とにかく、腹の底から叫ぶんだ」

「いや……叫べって……ここで、ですか？」

鈴乃は当たり前のように首を縦に振った。恵美もなんの疑問も無く言う。

「叫ぶとき変に全身に力入れちゃだめよ？ 余計に出てこないから体は力抜いてね？」

「あの、あの……」

鈴乃と恵美が求めている動作のことを考え、千穂は急激に心の中で羞恥心が鎌首をもたげてくるのを感じた。

何せ銭湯である。いくら他のお客がいらないとはいえ、脱衣所には番台のお婆さん（ばあさん）もいるし、なにより男湯には真奥（まおく）遠（とほ）が（あ）いるのだ。

そんな千穂の逡巡（しゆんすん）を読み取ったか、鈴乃が真面目（まじめ）くさって言う。

「聞（き）の（こ）声（こゑ）というものの効果は、エンテ・イスラでも日本でも科学的に実証されている。単なる正拳突きでも、無言で行うのと腹の底から声を出して繰り出すのでは、威力が大幅に違（ちが）ってくる。気分の高揚（こうやう）からくる細胞の活性化、心理的な解放感などを得るために、大声を張り上げるのは非常に有効な手段（しゅだん）だ……ただし！」

鈴乃に突然（とつぜん）ずいといと顔を近づけられて、千穂はのけぞる。

「どんな鍛錬（くわんれん）にも言えることだが、後ろ向きな気持ちで臨めばそれだけ鍛錬の効果は出なくなる。ここで大声を出して魔王に聞（き）かれることを恥（は）ずかしがっているようでは、とても聖法氣（せいほうき）の

活性化など望めんぞ」

千穂は心を見透かされて、顔を真っ赤にしてしまう。

「でも、それならここじやなくてカラオケボックスとかに行けば……」

千穂らしからぬ後ろ向きな懇願に、鈴乃は首を横に振る。

「葛藤や羞恥は、それを超えたときの心理的解放感が普通の情動よりはるかに大きい。それだけ短時間で効果が望める。向こう側に魔王がいる状態なら、尚更だ」

「何か小難しいこと言ってるけど、一つ間違うとすごく危うい理論よね」

千穂に迫る鈴乃を見て、恵美は眉間にしわを寄せる。

ここまで言っても千穂が顔を真っ赤にして涙目になっているのを見て、鈴乃はやれやれと首を振った。

「仕方ないな。公共の場で大きな声を出したからないのは日本人の美德だが場合が場合だ。私が手本を示すから、後に続きなさい」

「そ、そんな……」

第一男湯には真奥達以外にも客がいるかもしれないのだ。不安を隠せない千穂に、鈴乃は容赦しなかった。

「返事は大声ではっきりと！」

「はいいっ！」

「……それじゃ私は、万が一にも邪魔が入ってこないように外で見張ってるから」

スパルタモードに入っている鈴乃と千穂を横目に、恵美はそそくさと浴場から出ていった。

「では行くぞー」

「はいいい!!」

千穂の返事に満足した鈴乃は、掃除機のような勢いで大きく息を吸った。

「さあああ! 大きな声を上げて! せあああああああああああああ!!!」

「うわわわわわつつ痛っ!!!」

髪を洗っていた漆原は、突然壁の向こうから聞こえてきた鈴乃の大音声に飛び上がり、持っていたシャワーを足の親指の上に落としてしまう。

「な、な、なんだ今のはっ!」

「て、敵襲!」

だがそんな漆原を真奥も戸屋も笑えなかった。

大浴場という環境のおかげで音が何重にも反響し、人間の騎士団が総攻撃をかけるような関の声に、悪魔達は驚きすくみ上ってしまっていた。

「おおおおおおおおお!」

「うわっ!!」

するとどうしたとか、今まで真奥の膝の上であおむけになって髪を洗われていたアラス・ラムスが、必死で閉じていた目を突然見開き、小さな口をめ一杯開けながら大声を出し始める。そればかりか真奥を弾き飛ばさんばかりの聖法氣を放射し始めたのだ。

「わああああああああああああああああああああ!!!!」

「!?!?!?」

次に聞こえてきたのは、金切り声に近い千穂の絶叫だ。

真奥は一体何が起こっているのか分からず目を白黒させるが、千穂になんらかの危機が迫っているのでは、との思いから泡だらけのアラス・ラムスを戸屋に託し、腰にタオルを巻くことだけは忘れず目にもとまらぬ勢いで脱衣所外の番台まで一気に飛び出すと、

「ちよつとー なんて格好してるのよ!!」

そこには、湯上りのシャツ姿で、番台のトヨさんと手を繋ぎながら赤面してこちらを睨んでいる恵美がいた。

いつも起きているのか寝ているのか分からないトヨさんだが、さすがにこの大声に気がつかないということは有り得ない。法術で何かの細工をしているのだろうか。

「え、恵美っ!? お、お前から隣で何やってんだよ!?」

「ちや、ちゃんと外には漏れないようにしてるから大丈夫よ! 番台のお婆ちゃんには念の為



「終わったら後で説明するから、あんまり気にしないで」

「おい、おま、逃げんな!!」

疑問に全く答えずに身を翻す恵美。後を追って浴場から飛び出ようとした真奥だが、どうやら外から恵美が引き戸を押さえているらしく、何をやってもビクともしない。

「いらっしやいませええええええええええええええええええええええええええええ!!」

「はい喜んでええええええええええええええええええええええええええええ!!」

「居酒屋か!! 本当何やってんだよ!? 恵美っ! おい! 開けろ! ここ開けろ!」

魔王が勇者の手で風呂場に閉じ込められているという稀有な構図が続いたのは、恐らく五分も無かつただろう。

だが、開ける開けないでしばし押し問答した末に、真奥は、

「わああああああああああああああああああ……うきやああ!」

意図的な大声の中に千穂の悲鳴を聞き取って、居ても立ってもいられなくなってしまふ。

「もう通報されようが構うか! 芦屋! 肩貸せ! 中から女湯に乗り込む!」

「れ、冷静になってください! 女湯に入るなどまかり間違えば魔王様の社会生命が!!」

「じゃあ漆原! お前なら大丈夫だ! 行け!」

「僕の社会生命がゴミ同然みたいな物言いと扱いに断固抗議する!!」

「……あのね、もうこっち開いてるんだけど」

大悪魔三人が壁を越えて女湯に乗り込む乗り込まないと下らない談義をしているところに、惠美の呆れ返った声が響いた。

気がつけば、千穂と鈴乃の絶叫合戦は囁りを潜めており、漆原の腕の中のアラス・ラムスも何事も無かったように静かになっている。

「な、なんだったのだ!?」

ようやく床から立ち上がった芦屋が男湯と女湯を仕切る壁を見上げる。

「気づかない? まあ、ほんの微かだから、無理はないけど」

「ああ?」

「ん? あれ? エミリアがそこで、アラス・ラムスがここでベルと……えー?」

一番最初に気づいたのは、漆原だった。

眉根を寄せて顔を曇め、男湯の脱衣所でこちらに背を向けて立っている惠美を見る。

「マジで何考えてんの? 現実でそういうことすんなよ。使えない戦力守るために前線兵力を割くようなマネして自分の首絞めたいわけ? お前らそんなに余裕あったっけ?」

いつになく厳しい漆原の物言いだ、もちろん惠美は、そんなこと言われるまでもない。

「そんなわけないでしょ。本人だってそのことは分かっているわ」

惠美としても本当はこうならないことが最良だったので、害虫を噛み潰したような顔になるのは仕方がない。

「でも、万が一のときに、私かあなたに緊急事態を『通報』する力が欲しかったそうよ」

「通報……って、まさか!?」

真奥もおぼろげにようやく事態を理解し始め、仕切りの壁を見上げた。

「あの子は自分の分をよく弁えて、やっていいことと悪いことの区別がきちんとついてる。私達はそれを信じたの。でもきつと一番の理由は……」

恵美は、啞然としてゐる真奥の顔を見る。

「緊急事態に巻き込まれたとき、必要以上にあなたの手を煩わせたくない、そのことに尽きるんだと思うわ。もうあの子は記憶のあるなしに関わらず、私達の関係者なんだから」

真奥は恵美の言うことをほとんど聞き流しながら体をいい加減に拭って服を着ると、番台そばの休憩スペースに飛び出してゆき、芦屋と漆原もそれに続く。

するとそこには、銭湯備え付けの団扇を持つ鈴乃と、

「理由は後から説明する。だが、千穂殿は決して軽はずみな気持ちでこの事態に臨んだわけではない。それだけは察してやってくれ」

「ま……真奥……さん……」

シャツの胸を上下させて荒い息を吐きながら藤の椅子に横たわり、湯上りにしても赤すぎる顔を火照らせてゐる千穂がいた。

何があつたのか分からず当惑する真奥の隣で、漆原が千穂の手を指差す。

「僕知らないぞ、どうなっても」

苦々しく言う漆原の示す先は、卓に突つ伏す千穂の左手だった。

「佐々木さん、まさか……」

芦屋は信じられないものを見たという顔で、啞然としている。

その手には、金色の聖法氣が宿っていた。炎のように荒々しく明滅し、まるで制御しきれていないのが見え見えた。

だがそれは、東京タワーで見たあの非現実的な力ではない、完全に千穂一人の力で発現した聖法氣の光だった。

「わ、私……邪魔になりたくありませんし、足枷にもなりたくないですから……」
息も絶え絶えの千穂は、それでも必死で笑みを浮かべて真奥を見る。

「いつでも逃げられるように……いつでも真奥さん達に助けてもらえるように……鈴木さん、私、できましたよ。次……アイデア……実践」

それが限界だった。

千穂の臉はゆっくりと下がっていき、意識は夢の世界へと落ちていく。

「……つたくよお」

真奥は、疲労困憊で、それでも満足そうな寝顔の千穂を見て、降参の体で頭を掻いた。

「氣い遣いすぎなんだよ。俺達は異世界の化け物だぜ？ 全部どーんと任せちまえばいいのに」

よ。巻き込んだのはこっちなんだから」

「それができないのが千穂ちゃんなんですよ。感情に任せて突っ走らず『逃げる』ためや『スミーズに助けられる』ための術が欲しいなんて、いじらしいにも程があるわ」

恵美は苦笑して真奥にそう言つて、そして最後に、

「あなたがエンテ・イスラで踏み潰した命の中には、きっと千穂ちゃんみたいな子もいたんでしようね」

真奥にだけ聞こえるように、そんなことを言つた。

「……………」

真奥は思わず振り返るが、恵美はもう自分のその一言など空気に溶かしてしまつたかのように、素知らぬ顔で千穂に歩み寄り、その額にうっすら浮かぶ汗を拭つてやっている。

妙に打ち解けた様子を見せたかと思つたら、突然今まで言わなかつたような痛烈な皮肉を溶びせてくる恵美。

「…………お前も、正直よく分かん」

真奥が口の中で転がした言葉は、誰の耳にも届かなかつた。

魔王の魔術、口炎に勝つ



「いらっしやいませええええええ！」

千穂の大声が、店内にこだまする。

その大声に、店内の客数人が何事かと千穂を見、入ってきたお客は入口で思わず足を止め、もちろん真奥も他のクルーもビクリと身を震わせて千穂を振り返る。

「うむ、何があったか知らないが、元気があるのは良いことだ」

一人全く動じず千穂の隣に立った木崎は、千穂の肩に手を置く。

「だが、お客様との距離感は大切にしよう。そこまで叫ばずとも店内のお客様に声は通る」

「あ、は、はい、すいません……」

我知らず大声を上げていたらしい千穂は顔を赤くして、自分のレジの前に立った客の応対に入る。

その間も、真奥はハラハラしながら千穂の様子を見る。

千穂が恵美と鈴乃から聖法気活性化の手ほどきを受けて一週間が経った。

学生である千穂はマダロナルド幡ヶ谷駅前店新装開店以来今日が初めての出勤なのだが、初日から何かにつけて先ほどのように大声を上げ、大いに悪目立ちしてしまっている。

千穂も場面を選んでいるはずなのだが、いかんせん先日の絶叫合戦のせいで大声のリミッターの上限がマヒしているらしく、何度もお客さんを威圧してしまうシーンがあった。

「張り切るのはいいいことだが、あれではちーちゃんは、しばらくカフェに上げるわけにいかん

な。人手が足りないから、是非ともちーちゃんには上がつてほしいんだが」

木崎は少し残念そうに言い、その言葉を聞いた真奥はどうすることもできず煩悶する。

千穂が大声を上げているのは、もちろん聖法気活性化の訓練をするためだ。

だが現実問題として、日本の町中でひたすら大声を上げ続けても誰にも怪しまれずに済む場所はない。

自宅で騒げば親に怒られるだろうし、近所迷惑にもなる。公園で千穂くらいの年齢の少女が叫んでいればそれだけで通報ものだ。もちろん初日に使った銭湯など論外である。

だからといってそうそう毎日カラオケボックスに行ってもいられないだろう。

結果、こうして時を選んで大きな声を上げているらしいのだが、あまりに熱中しすぎて日常生活に支障が出ては本末転倒だ。

恵美や鈴乃が、千穂に法術の手ほどきをした理由を聞き、一応真奥達も納得はした。

今や、千穂は記憶のある無しに関わらず真奥達のアキレス腱であり、エンテ・イスラと魔界の陰で暗躍するオルバがいつそこを突いてこないとも限らない。

そうなったとき、千穂には記憶を保持しつつ状況に応じて真奥達にSOSを出せる術を持っている。おいてもらうのは非常に有効だろう。

だが千穂にとって、学校やアルバイトも疎かにしてはいけない大切な日常だ。

「ちーちゃん、ちよつといいか」

お客が切れたところを見計らつて真奥は千穂を手招きする。

「……すいません、声のことですよね」

千穂も、何故真奥が声をかけてきたか分かつているようで、俯いてしまう。

「あー……」

そう申し訳なきそうにされると、真奥も困る。千穂はあくまで、真奥や恵美達の重荷にならないために努力を重ねようとしているのだから。

「分かつてゐるならいいよ。ただ、日常は日常で大切にしてくれな？」

「はい」

千穂は少し疲れた顔で笑つた。

「そんなんじや、木崎さんが上に上げてくれなくなるぜ？」

「そうですよね……うん、オンとオフの切り替えは明確に、ですよね」

「そうそう、そういうこつた」

大きく頷く真奥は、視界の端で、木崎が満足そうに頷いているのが見えた。

「でも……そのことが無くても、私、上に上がれる気がしません」

千穂らしくもなく自信なき気に、千穂は斜め下に視線をやる。

「あー……まあ、分かんなくても、ない」

真奥も頬を掻きながら、渋々同意した。

二人が言う「上」とは、当然、二階のマッグカフェのことである。

新装開店から一週間。

近隣ビジネス街の勤め人がお盆明けで財布の紐が堅くなっている時期、ということ差つ引いても、初動はますますと言った様子だった。

かつての常連に加え、競合するコーヒーチェーンなどと比べ若干値段設定が安価なこともあり、普段以上に家族連れや主婦層などの利用が目立った。

通常のマグロナルド部分とマッグカフェの客席は厳密に区別されていないため、下階で通常メニューをオーダーをして上階で食事をするお客もあり、カフェ単体の回転率の上昇はこれらの課題である。

それでも久々のオープンで、店長の木崎が開店から終業まで目を光らせていることもあり、以前の常連客はすぐに帰ってきてくれた。

中には以前の隠れ木崎ファンなどいいて、二階カフェカウンターに掲げられている木崎の写真入りの責任者証らしき緑色の楕圓を携帯電話のカメラで撮影していたりもした。

状況を考えればまずまずのスタートを切ったマッグカフェなのだが、現状、真奥と千穂に限らず、ほとんどのクルーが、マッグカフェで働く自信が無いと考えているのだ。

その原因は……。

「どうやったら、あんなに美味しいコーヒー淹れられるんでしょうねー」

千穂が遠い目をするのもむべなるかな。

木崎が淹れるコーヒーは、どういうわけか美味い。

通常メニューにあるブラチナローストコーヒーもそうだったのだが、マッグカフェのコーヒーメニューを作ると、木崎と他のクルーとでは雲泥の差が出るのだ。

マッグカフェは通常業態とは違い、コーヒーを紙コップではなくマグカップで提供する。

カフェに特化したとはいえ、あくまで迅速かつ均質な商品の提供を行うファーストフードの一業態。ブラチナローストコーヒーとは別に、マッグカフェ専用のコーヒーサーバーというのが存在する。

一定量作り置きして規定時間で廃棄したり、大量に豆を挽くことができるドリンクバー形式のサーバーではなく、確かにある程度は個人の技術の入る余地がある一回一回豆を挽く手法なのだが、手動ミルなどの専門用具ではなく機械を使う。

シフトに入ったクルーはカフェ用のサーバーの扱い方を木崎から指導されるのだが、どういう訳か、木崎が淹れたマッグカフェのコーヒーメニューは、どれも並みのカフェと遜色ないか、それ以上の味が出るのだ。

「だって、同じように指定のコーヒー豆を挽いて、同じ温度のお湯が出て、同じミルクを使ってるんですよ？　なんであんなに違うんだろう……」

真奥も千穂もコーヒーを頻繁に飲む方ではないが、それでも自分が試しにやってみたものと

木崎のそれでは、明らかに質が違ふことは分かった。

少なくともマニュアル通りにやっているだけでは、木崎と同じ味にはならないというのは、木崎のコーヒーを飲んだクルー達の共通した意見である。

「でもまあ、いずれは俺達でも回せるようにならないと仕事になんねえしな」

今は新装開店直後ということもあり木崎も営業時間のほぼ全て店に常駐しているが、社員である以上は店を留守にせざるを得ない日も出てくる。

そうになったとき、木崎がいないからといってマッグカフェを閉めてしまうわけにはいかないのだ。

「でも、木崎さんのと俺達の、どっちが、会社が想定してる味なんだろうな」

「会社が想定してる味？」

真奥が言わんとすることが分からず、千穂は首を傾げた。

「や、どうしたってマグロナルドはチェーンだからさ。店舗ごとの均質な味を提供しなきゃだめだけど、木崎さんのはどう考えても『均質』じゃないだろ？」

「ダメなんですか？ マズいなら問題ですけど、同じ値段で普通より美味しいのに」

千穂の言葉に、真奥はレジ横にあるマッグカフェのチラシに目をやった。

カウンター内から見える裏面には、主だったカフェメニューの値段が印刷されており、件のカフェ・オ・レとカフェ・ラテはそれぞれ二五〇円となっている。

「良きそうに思えるけどな。でも、逆の見方をする、木崎さんのコーヒを飲めないお客さんに対しては、同じ値段で美味しさが落ちるものを飲ませてるってことになる」

「……………あつ」

千穂はやや間をおいて真奥の言うことを理解する。

「マグロナルドは大規模チェーンだからな。『質の上限』が全店舗で一定じゃなきゃ、企業理念の均質なメニューの提供って理屈に反しちゃう。同じ値段で味が良くなればそれでいいって理屈なら、社員が自腹切ってこつそりブルマンとか使ったっていいわけだからな。でも全店舗でそんなことやっちゃったら、それはもう『マグロナルドのメニュー』じゃない」

一方で、地域や店舗、スタッフの特色を生かした外食チェーンも世の中には沢山あるが、マグロナルドに限ってはそのような経営方針を取っていない。

だが木崎が、会社の規定した種々の材料を無視してコーヒを作っているかと言えば……。

「でも木崎さん、私達と同じ機械で同じ豆、同じミルク同じカップ使って淹れてますよね」

「……………なんだよなあ……………だから分らないんだよなあ」

千穂にそう切り返されて、真奥は頭を抱えてしまった。

そうになると、結局真奥達の腕が至らない、ということになるのだが、マニュアルを厳守した上で至らないとなってしまうと、一体何をどうすればいいのかと見当がつかない。

「私の訓練じゃないですけど、気持ちを込めて『美味しくなれ』って言ってみるとか……」

「心はともかく音でどうにかって、畑に植わってる段階じゃないと意味無いんじゃない？」

「木崎さんがコーヒー作ってるときだけ店内BGMがモーツァルトだったとか」

「ない。あとモーツァルト効果って、まだ科学的な裏付け取れてないからな」

結局木崎のコーヒーの秘密についてはいくら議論しても結論は出なかった。

ディナータイムを過ぎるまでそれなりに客入りがあり、夜の二十二時になったので、高校生の千穂はシフトを上げる。

私服に着替えてスタッフルームから出てきた千穂に、真奥は声をかけた。

「そんじゃ、気をつけて帰れよ」

「はい、お疲れ様でした」

千穂は真奥と、残ったクルーに頭を下げる。

「何かあったら、鍛えた声で大声上げろよ？」

「え？……あつ、そ、ど、どう答えればいいんですかつ？」

からかわれたことにしばらくかかって気づいた千穂は、携帯電話を握りしめながら真っ赤になる。

「ま、とにかく気をつけて。それと」

「なんですかつ？」

むくれる千穂は、

「まだ言ってなかったから。頑張ってくれてありがとな」

真奥が他のクルーに聞こえないように小さく呟いたのを聞いて、今度は怒りとは対極の理由で顔が赤くなる。

「べ、別に真奥さんのためだけじゃないですもん！」

だが、からかわれたことを根に持ち、千穂は足早に出ていってしまふ。

その肩には、千穂にしては珍しく大きなショルダーバッグを担いでいた。まさかこれからどこに行くわけでもないだろうが、もしかしたら昼の間、どこかで訓練でもしていたのかもしれない。

真奥は肩を竦めてため息をつき、少しずつ閉店に向けた準備を始めようとしたときだった。

「あー……ちーちゃんは帰ったのか？」

二階から木崎が降りてきた。

真奥は首を傾げる。千穂は着替える前に勤務を上がることを断りに行ったはずだ。

「どうだった、その後あの大声は」

そして木崎にしては珍しく、覇気の無い疲れた様子で千穂のことを尋ねてくる。

「……どうしたんですか？ 具合でも悪いんじゃないですか？」

質問に答えるより前にその疑問が口を突いて出たのも無理からぬことだった。

魔王の真奥をして、木崎ほどに疲れ知らずの人間を知らない。店長という職責上、九一日店

にいない日もあれば、シフトの関係上朝から晩までいっぱなし、ということもある木崎だが、何かの術を使っているのかと思うほど疲れた様子をクルーに見せない。

そんな木崎が、目の下に微かに隈を作り、左手でこめかみを押さえ、声にも覇気が無いと来ては、体調を心配するなと言う方が無理な話だ。

「ああ……すまない」

木崎は真奥の質問にハッと顔を上げ、これまた珍しく慌てた様子で客席を見渡し、真奥には分からない理由で安堵すると苦笑してみせた。

ちなみに通常業態の一階客席は、二組の大学生と思しき若者がおしゃべりをしているだけであとは空席だった。

「ガラにもなく張り切ってしまった。だが、思ったよりも塩梅が難しくて骨が折れた」
真奥は更に衝撃を受けた。

張り切った、はともかく、骨が折れた、などと、木崎の放つ台詞とも思えぬ弱音である。顔を上げて、一階レジカウンター隣の真新しい液晶モニターを見る。

このモニターも二階の空席状況を一階から確認するために新設された設備だが、それを見る限り、二階は現在ノーゲスト状態のようだ。

「い、一体何が……」

木崎が顔を壁めながら自分の肩を揉むなど、マグロナルドで働くようになって初めて見る光

景である。

声を震わす真奥だが、木崎は怪訝な顔で見返しながら真奥の問いには答えなかった。

「で、ちーちゃんは」

「あ、ああ、ちよっと危うい場面ありましたけど、あのあとはいつも通りでした」

「……そうか」

木崎は神妙な顔で頷くと、肩をぐりぐりと回転させる。

「ちーちゃんも、何か次の目標を見つけたかな」

「は？」

真奥はギクリとして目を見張る。

千穂は確かに、今一つの目標に向かって邁進している。あの大声もその一環だ。

何食わぬ顔で一階のレジの日計点検の画面を開く木崎を見るに他愛のない一言だったようだが、何故木崎はそう思ったのだろう。

そして一瞬の動悸が収まった後、真奥はある違和感に気づいた。

「ちーちゃんも、ってどういうことですか？」

「……っ？」

真奥の問いに木崎は小さく息を吞んで、次の瞬間、何かを後悔するように頭を振った。

「ああ、疲れているんだ、気にするな」

低い声だった。

真奥の好奇心は、それを聞いただけで心の中で回れ右して大人しくなる。

どうやら思ったよりも、デリケートな問題のようだ。そこに踏み込めるほど、真奥は木崎の近くにはいない。

「じゃあ、別の気になること聞いていいですか？」

「ん？」

「俺もちーちゃんも疑問に思ってるんですが、なんで同じサーバーで淹れたコーヒーなのに、俺達と木崎さんじゃ味が違っちゃ」

「ああ？」

「……うのかなあ……って」

回れ右して大人しく震えていたところを狙撃されたかのような恐怖が真奥を襲う。

真奥としては向上心からの質問だったが、先ほどの低い声よりもさらに剣呑な気配が木崎の返事から伝わってきて、語尾が尻すぼみに小さくなっていた。

木崎は魔王の心胆すら震え上がらせる恐怖の目つきでしばし真奥を見つめていた。

その時間は、傍から見れば一秒にも満たなかっただろう。だが真奥には、それが永遠にも感じられた。

次の瞬間には、木崎は唐突に目の表情を変えた。そして、視線が一瞬泳いだ。

真奥にとつては一日の間にこれほど驚くことなどもう無いだろうという気分だ。

真奥と見合わせていた陰呑な視線がコンマ一秒外れ、泳ぎ、そして戻ってきたときには、日頃の木崎からはとても想像できないほど素の、黴わな顔が見えた気がした。

「……すまない。ちよつと待ってろ」

木崎は日計点検の画面を終了すると、素直な詫びの一言を発してからスタッフルームへと去ってゆく。

木崎は、真奥が自分の心の動揺を見抜いたことに気づいたのだろう。そういうときにごまかそうとしないのはいつもの木崎だった。

たった五分の間で、全く見知らぬ木崎の表情をいくつも見ることになり困惑する真奥。なんとなくぼんやりスタッフルームのドアを見てみると、中から旧式のプリンターが唸り上げる音が聞こえてきて、それからすぐに木崎が一枚の紙を持って再び出てきた。

出てくる際に真奥と目が合い、妙に気まずそうな顔をしたのも、意外だった。

「興味があるなら、受けてみるか？」

木崎は持っていた紙を真奥に手渡す。

真奥は色々気になりながらも手渡された紙に目を落とすと、

「マグロナルド・パリスタ？」

表題に書かれた文字を見て、真奥は首を傾げた。

パリスタと言えば、城壁や戦車などに設置する、据え置き型の大型弩弓台がまず最初に思
い浮かぶ。

真奥は弓につがえられて空を飛んでゆくパーガーの絵面を想像し吹き出しそうになった。

「パリスタは知っているか？」

「弓矢……じゃないですよね？」

「なんだと？」

「い、いえ……聞いたことはないです」

木崎の間にバカ正直に回答してしまった真奥。

「まあ、あまり馴染みは無いかも知れないな。日本では、コーヒーの専門知識を持つ人間、程
度の認識でいい」

「コーヒーの専門知識」

真奥は木崎の言葉を反芻しながら、書面に目を通す。

どうやらマグロナルドの社内報から抜き出した案内のようだ。

国内のマグロナルド本社と各支社では、従業員向けにマグロナルドの商品をより高い精度で
扱いお客様に提供するための講座が開かれている。

大体は正社員向けのものだが、この「マグロナルド・パリスタ」は、ある程度の勤務実績が
あり、規定の受講料を払えばアルバイトクルーでも受けることができるらしい。

内容は、マッグカフェに関わるコーヒーの取り扱いに関する講座。一日の講習で、機械の扱い方、コーヒー豆の扱い方などを専門的に学ぶことができると言う。

「マッグカフェ業態を持つ店舗には、必ず『マグロナルド・パリスタ』の有資格者を置くことが社内ルールになっている。私は店舗管理責任者だから当然その資格を持っている」

「な、なるほど……」

ただマニュアルに従ってサーバーを扱うだけの真奥達とは、根本から違っていた、ということなのか。

たった一日の講習でそこまで極端に味に差が出るのかは疑問だが、扱う商品の専門知識を得る、という文言は、木崎のコーヒーを抜きにしても、真奥の目には魅力的に映った。

「だがな、パリスタというのは本来、コーヒーだけの専門家ではないのだ」

「え？」

講習日程を確認していた真奥は、木崎の突然の言葉に顔を上げた。

「パリスタ、とはイタリア語の単語だ。イタリアの軽食喫茶店であるバールのカウンターに立ち、アルコール飲料の専門家であるバーテンダーに対し、コーヒーを含めたノンアルコール飲料全般の専門家として腕を振るう。日本での認知度はまだまだ低いが、パリスタはシェフやパティシエ、ソムリエなどと同じ飲食の世界の誇り高い職人なのだ」

「そ、そうなんですか？」

突如始まった講釈に鼻白む真奥。

「一方で本場のパールで働くバリスタの中には、自らをバリスタと称さない者もいる。彼らは飲料だけではなく、食事、店舗設備に備品、接客等の全ての面において、オンリーワンのトータルサービス専門家を自負するからだ。そのような人々を示す言葉がパールマン。パール、つまり店に属する全ての事柄に精通し、神経を行きわたらせ、店舗の状況に合った最高のサービスをお客様に提供することを目指す者のことを言う」

「は、はあ……」

先ほどの疲れた様子もどこへやら、急激に目に活気を取り戻し、熱弁を振るう木崎。

コロコロと変わる木崎の表情に生返事をするしかない真奥だが、その熱弁の最後を結んだ言葉は聞き逃せなかった。

「私は、そのパールマンを目指しているんだ」

「!!」

それは恐らく真奥が初めて聞く、マクロナルド・^{ほろがや}谷駅前店の木崎店長ではない、木崎真弓個人の心の言葉だったのでなかろうか。

だが本心から出た言葉すら、あくまで仕事に関わることであるところはさすがに木崎である。「じゃあ木崎さんがマッグで出世したら、凄^{すご}いことになるでしょうね」

店舗の日計が常に前年比百パーセント越え、という事実がどれほど異常なことかは、真奥も

理解しているつもりである。

本来木崎はこんな小さな店舗で収まる器ではなく、もっと広いエリアを治めるべき人間であると常々思っていた。

真奥にとって正社員を目指す上で目標とする人物でもある木崎が、これほど遠大な野望を抱いていたとは思ひもよらなかった。

自分が世界征服を標榜していることも忘れて感心する真奥だが、当の木崎は意外そうな顔で真奥を見た。

「何を言う。マダロナルドでそれは……」

「……え？」

「あ……」

何か聞いてはいけないことを聞いた気がした。

木崎も、それには気づいたのだろう。どうにも今日の木崎は木崎らしくない。

「……店長がこんなに私語を多発しては、示しがないな」

とりなすようにそう言った木崎は、決まりが悪そうに真奥の持つ紙を見る。

「とにかく、私の腕に迫いつくなら、まずはそれに行ってみたらどうだ？ 時間希責任者経験

のあるまーくんなら、受講料は免除されるはずだ。もし受講したければ、私に言いなさい」

「は、はい……」

「それじゃあ私は、上に戻る。下のことは頼んだぞ」

身を翻し二階へと上がってゆく木崎はいつも通りに見えたが、それでも普段より早口だった気がする。

何より、真奥は木崎の物言いの微妙なニュアンスを聞き逃さなかった。

そしてそれが自分の勘違いであることを、祈らざるを得なかった。

※

「あれ？」

アパートに帰ってきた真奥は、二階の鈴乃の部屋に灯りが点いているのを見て首を傾げる。

鈴乃は聖職者らしくかなりの早寝早起きで、真奥が帰ってくる時間に灯りが点いていることなどまず有り得なかったからだ。

「おい、鈴乃どうしたんだ」

真奥は玄関に迎えに出てきた芦屋に問うと、

「お帰りなさいませ魔王様。先ほど佐々木さんがいらっしやって、二人で何かをしているようですよ？ きつとまた、術の稽古でもしているのではないですか？」

そんな答えがナチュラルに返ってきた。

「ちーちゃんが？ バイト上がって帰ったんじゃないかなかったのか？ もう十二時過ぎてんじゃないか。鈴乃の奴何やってんだ。早く帰らせろよ」

女子高生をこんな時間まで外出させている鈴乃に、魔王として物申さねばなるまい。

芦屋が止める間もなく靴を履き直して隣の二〇二号室のドアを叩く。

「おーいちーちゃん、いるのかー？ もう日が変わってんぞー。早く帰れー」

「うるさいぞ魔王」

ドアから洗い顔を出したのは鈴乃だった。普段の浴衣よりずっとシンプルなデザインは、部屋着か寝巻用なのだろうか。

部屋の中からは困ったような顔の千穂がこちらを見ていた。

「保護者気取りか。千穂殿の母上に許可は得てある。今日は私の部屋に泊まる予定だ」

「……な、なんだそうか」

「そうなんです……すいません」

先ほど店で別れたばかりの千穂は、寝巻姿でべこりとこちらに頭を下げた。

要するに帰り際見た千穂の大荷物、鈴乃の部屋に泊まるためのものだったらしい。

「ま、その、あれだ、本当、無理すんなよ」

「はい……」

「貴様に言われなくても、私がきちんと千穂殿のお世話をする。もう訓練は終えて、今はがあ

るずとおくに花を咲かせていたところだ。貴様の出る幕は無い」

鈴乃はそう言くと、真奥の返事も聞かずドアを閉めてしまった。

「……何がガールズトークだよ」

真奥は不貞腐れるように呟いて、すごすごと魔王城に戻ってきた。

「あの……佐々木さん、先にこちらに挨拶に見えて、お母様のことも……」

鈴乃とのやりとりを聞いていたのだろう。芦屋が申し訳なきように言うのを真奥はひらひらと追い払う。

芦屋が悲しそうな願をしながらも夜食の用意をする後ろ姿を横目に、真奥は木崎からもらった「マグロナルド・パリスタ」の案内を眺める。

「『日常』ってのも、因果な言葉だな」

「どしたの突然」

漆原が真奥の呟きを耳ざとく聞きつけて尋ねてきた。

「ん？ ……何か、皆、知らんうちに変わるんだなあと。思ってたよ。日常ってのは変わらないものなんかじゃなくて、目に見えない速度で確実に時間が動いていることを言うんだろうな」

「は？ なんだよ突然。真奥までおかしくなった？」

真奥の魔王らしからぬ感傷的な呟きを、漆原は一笑に付した。

「だから楽しいんだろ。何も変わらない方がおかしいんだよ」

「……お前にだけは言われたくねえ」

せつかくの感傷をニートのすねかじりに総括されて不機嫌になる真奥。だがブレない漆原は全く動じず、鼻で笑う。

「僕ほどそのことを身を持って知ってる奴もいないと思うけどな」

「なら日々の変化をより確実に知るために、家事でも手伝ったらどうだ？ ん？」

そこに、梅と鯉と紫蘇の握り飯と温めた味噌汁を持ってきた芦屋が加わり、真奥の感傷は食欲と家事分担の言い争いの渦中でうやむやになり心のどこかへ紛れてしまった。

※

「それにしても、たった一週間でそこまで安定活性が可能になるとはな。もう概念感受の基礎訓練に入ってもいいかもしれん」

「本当ですか？」

麦茶のグラスを片手に窓辺で向かい合う鈴乃と千穂。

二人とも団扇を片手に、部屋の間で焚かれてうつすら香る蚊取り線香の匂いの中で、「かあるずとおく」とは程遠い話を繰り返していた。

「部活の先生が言ってたんです。筋トレや柔軟体操するときも、どこに効いてるかを意識しな

がらやると効果が違うつて。だから、大きな声出すとき体の中でどんな変化が起こるかずっと意識しながらやってみました」

「言うほど誰にでもできることではない。そこまで行くとセンスの問題になってくるからな。

千穂殿はエンテ・イスラに生まれていれば、立派な法術士ほうじゆしになったかもしれない」

鈴乃は素直にそう褒めてから、わざと厳しい顔を作つて見せる。

「あ、だからといって、概念送受以外の術は教えんからな？」

「分かってます。でも褒めてもらえるのは嬉しいですよ」

麦茶を一口含んで、ため息をつきながら夏の夜空を見上げる。

「焦やつてるわけじゃないんですけど、でもできるだけ早く概念送受を使えるようになりたいです。鈴乃さんや遊佐あそさんが忙しくならないうちに」

「こう言つてはなんだが、私は毎日ヒマだぞ？」

鈴乃は苦笑する。エンテ・イスラでは立派な聖職者だが、日本では傍はたから見ればよく分からない生活をしている無職である。

特にマグロナルド幡はたヶ谷駅前店が再開したことで、魔界勢力に対し抑止力となる大天使サリエルが昼の間は真奥の近くににいることになる。

真奥がサリエルの影響下にあれば彼に悪魔が接近する心配が減るので、鈴乃は真奥を見張る必要が無く、ますます家に引き籠こももっていることが多くなるだろう。

引き籠もりとはいえ、芦屋や漆原の監視と警護という裏事情を含んではいるが、千穂の要請に応じられなくなるほど立て込んだ仕事でもない。

「そういうことじゃないんです。でも何か……」

千穂はしばし空中に視線を泳がせ、言葉を探している。

「この間の東京タワーのときから、何か、今までと違う気がして」

「何か……とは？」

鈴乃は眉を上げて、麦茶を一口飲む。

「今までもサリエルさんやガブリエルさん、銃子の悪魔の人達とか、いっぱい色々なトラブルがあっても、真奥さんと遊佐さんが、直接喧嘩することって無かったじゃないですか」

むしろ顔を合わせれば喧嘩ばかりしているような気がするが、千穂が言うのは本格的に傷つけあう戦闘、という意味合いだろう。

「でも、この間の東京タワー以来、遊佐さん、何か変じやないですか？」

「……」

千穂は、病院に見舞いに来た真奥と恵美に、自分の物ではない記憶を伝えたことを鈴乃に話す。

「そのとき以来、遊佐さんも、あと真奥さんもずっと何か考え込んでるみたいで……鈴乃さん、怒らないで聞いてくださいいね？」

「話の内容にもよるが」

鈴乃は穏やかな表情のまま、軽く茶化して先を促す。

「真奥さんに穴が空いて、鈴乃さんの部屋で皆でご飯食べてた頃があったじゃないですか」
「色々なことがあって随分前のことのように感じるが、ついこの前のことなのだな」

鈴乃と千穂は、二人で部屋を見回す。

「勝手ですけど私、皆がエンテ・イスラの複雑なことなんか全部忘れて、ずっとそんな日常が続けばいいなあって思ってたんです。漆原さんが遊んでばかりで、芦屋さんが怒って、鈴乃さんがやれやれって感じで場をとりなして、でも真奥さんがアラス・ラムスちゃんを甘やかすから遊佐さんが文句を言って喧嘩になって……それって、すっごく仲が良くなきゃできないことだと思っんです。……甘いって言われるかもしれませんが……」

かつて鈴乃と言い争ったことを思い出して、千穂は首を絞める。

鈴乃もそれは覚えてるが、今は千穂を責めようという気は毛頭ない。むしろ、その考えには大いに共感できてしまう。

「私も墮落したものだな」

「え？」

「なんでもない。それで？」

キッチン近くに置かれた羽の無い扇風機が室内の空気をかき混ぜ、蚊取り線香の煙がゆっく

りと外に流れてゆく。

「はい……でもやつぱり、真奥さんと芹屋さんと漆原さんはエンテ・イスラの人達を苦しめた悪魔で、遊佐さんと鈴乃さんは真奥さん達を倒さなきゃいけない人達で……何かきっかけがあればすぐに楽しかった日常が壊れて、凄く悲しいことが起こって、皆私の前からいなくなっちゃうんじゃないかって、不安が消えないんです」

「……」

「東京タワーのことがあってから、遊佐さん、ずっと何かに悩んでいます。多分、私が話しちゃったことも関係してると思うんですけど……真奥さんと顔を合わせるときも、今までだったら反射的に反発してたのが、何か考えながら話してる気がする……」

鈴乃は話を聞きながら、千穂の観察眼に感服していた。

千穂の話しぶりから察するに、真奥も恵美も、「千穂のものではない記憶」の本当の意味を千穂自身には伝えていないのだろう。

だが、二人のことを大事に思っている千穂には、そのことが引き金となって二人の様子がおかしくなったことなど手に取るように分かるのだ。

「エンテ・イスラの戦争の話や、魔界の悪魔が二つに分かれちゃったこととか、結局は遊佐さんも真奥さんも直接関係ないところで起こったことじゃないですか。でも、私に力を貸してくれた誰か、私に宿った記憶、ガブリエルさんや私が撃ったもう一人の天使の人……少しずつ、

何かが遊佐さんや真奥さん達を元の辛い場所に無理やり引き戻そうとしてるみたいで」

千穂はいつの間にか、俯きがちに畳を見ながら話していた。

千穂の中でも、気持ちや考えを整理しきれっていない部分があるのだろう。探るように、自問自答するような響きが含まれていた。

「私はな、千穂殿。日本に来て以来、どんどん自分の中で信仰心が薄れていくんだ」

「え？」

あまり脈絡のない鈴乃の告白に、千穂は首を傾げる。

「神が万能で、この世の全ては神の創造物と言うなら、何故世界は千穂殿のような心の優しい人間で溢れていないのだろうか」

「え、そ、そんなことないですよ」

唐突に手放して褒められて、千穂は恥ずかしさで慌てて麦茶を零しそうになってしまった。

「大法神教会が伝える神話の中に、『ホーロクリサスの巻物』という話がある。ホーロクリサスという男が神から管理を命じられた巻物があつて、それを絶対に開いてはいけないとホーロクリサスは厳命されるんだ。だがホーロクリサスは好奇心に勝てず、巻物を開いてしまう。するとそこには世界から集めたあらゆる負の感情が描かれていて、巻物が開かれると同時に描かれた負の感情が言葉となって人々の心に入り込んでしまう。だが、巻物の一番最後には唯一それらを制することのできる『希望』が残っていた、という話だ」

「こつちだと『バンドラの箱』っていう話が、似た感じの内容です」

「私が絶対的な神の存在を最初に疑ったのは、思えばその話を聞いたときからだ。神が万能ならそもそも何故負の感情が生まれた、とな。何故負の感情が世に溢れる以前の存在のホーロクリサスが神の命に背くような負の心を生んだかという矛盾もある。何より、神の管理不行き届きを人間に責任転嫁しているようで、なんとも腹立たしいと思わないか」

聖職者らしからぬ暴言を吐いた鈴乃は、優しい眼差しで千穂を見た。

「どうなんでしょう。だとしても宗教……っていうか、神様が必要な人は世の中に確かにいるから、私はそれを否定できないです」

「己を保ちつつ他に寛容であることも、なかなかできることではない。これから千穂殿を神として崇めようか」

「な、なんの話ですかっ！」

「信じる何かを失ったとき、弱い人間にはその先の標が必要、という話さ」

鈴乃は、グラスの麦茶を飲み干して、窓の外を見る。

「エミリアはな、今、標を失っているんだ」

「え？」

「こういう例え話はどうだ？ 千穂殿が第一志望の大学に入るために寝食を忘れ勉強に打ち込んだとする。苦節の果ての試験日、意気揚々と試験会場に向かったが、試験科目がその日だけ

生け花の技術を競う内容に変わっていたとしたらどう思う？」

「どんな例えですか？」

突っ込みが過ぎて千穂は、またグラスを取り落としそうになる。

「だから例えだ例え。どうだ、想定していた試験のためにあらゆるものを犠牲にして熱心に勉強してきたことが全く役に立たず、別次元の無理難題を押しつけられたとしたら」

「ええー……？」

例え話の内容が飛躍しすぎていて頭がついていけないが、それでも生真面目に考える千穂。
「で、でも生け花なんて全然分かりませんし、そんな内容で合格判定なんて非常識で入りたくなくなるかも……」

「だが花を使って何かを表現することくらいは分かるだろう。色とりどりの花も用意されている。それでもダメか？」

「それはそうですけどだからって……」

「大学自体は千穂殿が望むことを学ばせてくれることに変わりはない。ただ、そのときだけ試験科目が英数国から生け花に変わっただけの話だ」

「あの、例え話ですよ？ 要するに、ずっと目指してきたのに、思わぬ理由で目指すのを迷うようになったってことですか？」

「千穂殿は本当に察しがいい。だから、こんな冗談でも言わないと、話を深刻に受け止めすぎ

ると思つてな」

鈴乃は笑つて、魔王城側の壁を見る。

「魔王は、エミリアが討ちたいと願つていた仇ではなかった」

「……え？」

その短い言葉が意味するところが分からず、千穂は尋ね返す。

「それどころか、魔王軍に殺されたと思つていたエミリアの父親は、どうやら生きてゐるらしい。エミリアは、まさにその父親の仇を討つことを目的に、魔王を追つていたというのに」

恵美はエンテ・イスラの救世主で、ずっと魔王を倒すために戦つてきた。それくらい、千穂も承知である。

「魔王を殺せばエミリアは本懐を遂げ、本当の意味で旅は終わるはずだった。だが、その父は生きてゐる。エミリアは標を失つたんだ」

「な、なんでですか!? お父さんが生きてゐるなら、もう日本で暮らしてる真奥さんを無理に殺す必要なんかなくて、お父さんを探しに行けばいいじゃないですか!?」

「じゃあ何故、千穂殿は生け花が嫌なんだ？」

「……………あ」

千穂はしばし鈴乃の言葉の意味を理解するのに時間を要したが、

「今まで自分がやってきたことが、信じていたことが、無駄になつちやう……?」

なんの意味

もなくなくなっちゃうから？」

「そう思ってしまったているのだらうな。他人が、人生に無駄など無い。その経験はいつかきつと役に立つ、と綺麗事を言うことはできるが、本人の気持ちはそうはいくまい。生け花の試験を告げられた瞬間、今まで自分がやってきたことはなんだったんだと、無力感に囚われてしまうことを誰が責められる」

「……」

鈴乃は苦いものを飲んだときのように顔を皺める。

「更に悪いことに、エミリアは、一度エンテ・イスラに裏切られている」

千穂は、まさに隣の魔王城で、恵美の仲間達が語ったことを思い出した。

「あの、教会が、遊佐さんは死んだって嘘ついてたって話ですか？」

その内容に、鈴乃は頷いた。

「そういうことだ。もしエンテ・イスラがエミリアの勇者としての行いを正當に評価し、然るべき称賛の声を浴びせていれば、エミリアはその声援を背に、非道のツケを払わせるために魔王を討つ意志を保てただろう。だが……」

鈴乃は暗い顔で続けた。

「現実とは真逆だ。教会は謀略のためにエミリアの死を喧伝し、民はそれを信じた。勇者に救われた教会を含むエンテ・イスラは、魔王軍討伐後の勇者の存在を不要と断じ、裏切ったのだ」

そして恵美の生存を知っているオルバや天界は、聖剣を狙い、魔王軍討伐後の勇者の力を恐れ、刺客を差し向け闇に葬ろうとした。

「で、でも、エメラダさんやアルバートさんが、遊佐さんの名譽を回復するために頑張ってるんじゃないんですか？ 二人とも、エンテ・イスラでは結構偉い人なんですよね？」

千穂はそう意気込むが、鈴乃の表情は変わらない。

「効果は芳しくない。それだけ教会の権威と信用は絶大で、エメラダ殿ですら国内の反発もあって教会と真正面からことを構えるのは難しいようだ。実際に私がこちらに来るまでも、幾度となくエメラダ殿には教会の意見にたてつく背教者の烙印を押すべしとの意見が上がった」「そんな……だって、嘘ついてるのは……」

「教会さ。だが、教会が一度出した見解を撤回するなどということは有り得ない。教会が白を黒と言えば、白は黒。そういう世界なんだ。少なくとも西大陸はな」

鈴乃は自嘲気味に言う、グラスに麦茶を新しく注ぎなおす。

鈴乃自身、そんな教会の態度にずっと嫌気は差していたのだ。

麦茶を冷蔵庫にしまい、窓辺に戻ると仕切り直すように一息つく。

「エミリアが勇者として戦い続けてこられたのは、いつの日か父の仇である魔王を討つという目標があったからだ。だが、その魔王は父の仇ではなかった。魔王軍の横暴を許さない勇者としての義憤は、救われた私達が踏みにじった。だからと言って……」

「今までずっと抱いてきた憎しみや怒りが、いきなり意味が無いつて言われたって、簡単に捨てるなんて、できないですよね」

「だが捨てなければ、今度はエミリア自身が新たな悲しみと憎しみを生むことになる。磨けられた人々の記憶で勇者の志を復活させ、今、魔王を討つたとしよう」

その瞬間、恵美は、真央は、どんな顔をしているのだろう。仮定の話のはずなのに、千穂は胸が締めつけられるような思いがした。

「魔王が討たれば、アルシエルもルシフェルも黙ってはいまい。だが今の奴らがエミリアに敵うはずもない。三人の悪魔がこの世から消える。それを千穂殿は許せるか？」

「私は……っ」

許せない、でも許さないといけない。でもきつと、許せない。誰を？

「遊佐さんだって……私の大切な人なんですよ……っ」

「そんなことはエミリアだって分かっているさ。だからエミリアは今立ち往生しているんだ。父親が生きていれば、エミリアにとってはそれが一番のはずだ。それを素直に喜べない自分にも、きつと失望していることだろうな」

「遊佐さん……そのことを、エメラダさんやアルバートさんに……」

「話せるはずもない。もし彼らがエミリアの本心を理解し納得していたとしても、エミリアの方から「父が生きていたから魔王を倒すのをやめる」などと持ちかけられると思うか？」

恵美の性格では絶対にそれを良しとはしまい。

「エミリアは今、どんな色の花を手にとつてよいか分からず、何も作れずにうずくまっているんだ」

恵美の真実に対する不可解な態度は、要するにそういうことなのだ。

心理的な動揺から今までの敵対的な距離感を保つことができずに油断が生じ、その反動できつく当たる。

自分の心の在り処が分からず、標を失つて迷っている。

「だから……千穂殿に術を教える決心をしたのかもしれないな」

ふと、鈴乃が千穂の額あたりを見ながらそう言った。

「どういうことですか？」

問い返す千穂に、鈴乃は千穂の頭をグラスを持った手で指し示す。

「千穂殿がエミリアに伝えたという記憶……麦の中に立つ男性というのは、普通に考えればエミリアの父親だろう。そして、あしえすあーらという一節だが」

鈴乃は難しい顔で言った。

「アシエス・アーラ。エンテ・イスラの中央交易言語で『刃の真』という意味だ」

「刃の真？」

「それ単体なら意味は分からない。だが、私達の周りに、『真』を冠する存在が一つある」

千穂もすぐに思い当たり息を呑んだ。

「……アラス・ラムスちゃん……確か、『翼の枝』でしたっけ？」

鈴乃は神妙な顔で頷いた。

「そういうことだ。アシエス・アーラとは十中八九、アラス・ラムスカイエソドの欠片に関する言葉だと思って間違いないまい。カミーオは、聖剣は二振りあると言っていたそうだな」
鈴乃の確認に、直接その話を聞いた千穂は頷く。

「もしかしたら、そのアシエス・アーラとやらが、もう一振りの聖剣の銘……いや、聖剣に宿る何者かの名前なのかもしれない。そうするとエミリアにとつては、父親が生きていたこと、魔王城にいたアラス・ラムス、エミリア自身の進化聖剣・片翼、千穂殿のその指輪。全てが自分の周りに仕組まれた出来事にしか思えない。しかもそれを為したのは恐らく……」

最後まで言われずとも、日本で行われた全ての戦いをすぐそばで見守っていた千穂だからこそ分かる。

「遊佐さんの……お母さんですね？」

病院で恵美が思わず呟いた一言。

「……どうして……どうして見てたくせに、私のところに来てくれないのよ……」

あの絞り出すような言葉には、どんな思いが込められていたのだろう。

「サリエル様も、ガブリエルも、ラグエルも、カミーオもチリアットも、恐らくパーバリッテ

イアもオルバ様も、ある意味エミリアの母親に隨らされていると言つていいだろうな。いや、エンテ・イスラ全土がそうかもしれない。何せ今、エンテ・イスラではエミリアの聖剣を巡つて戦争が起きようとしているのだから。どうだ千穂殿」

「何がですか」

「もし千穂殿の母上が自分の幼少期に出奔したまま一度も帰らず、家族友人他人世界中全てを巻き込む騒動の種をあちこちでバラ撒き、その責任を全て千穂殿に投げて寄越したら」

問われて千穂は想像する。

自分の母親が実はどこかの国のスパイで、父とは愛の無い結婚をして自分を置いて日本から飛び出し、今も世界で起こる無数の紛争を陰から操り大勢の人の命を消し、ある日自分に「世界の命運はあなたにかかっているのよ」という唐突なメールを寄越し、核兵器を狙うテロリストとの戦いに自分を放り込み、そこで精神がマヒするほど奇烈な訓練を受け、世間には存在が知られていない米軍特殊部隊の隊員となり、実は父親こそが全ての事件の黒幕だということが発覚し、血と惨劇の果てに仇と追いついてきた母は、父を止めるために父との対決の中で凶弾に倒れ、千穂の腕の中で全てを自分に託して命を散らした。

「お父さんを止められるのは私じゃない……その結果、二人とも死ぬことになってる！」

「何がどうしてそうなった。父上はどこから湧いて出た」

鈴乃の突っ込みに、千穂は目を瞬き慌てて想像上のハリウッド映画から帰ってきた。

「ま、まあとにかくだ」

千穂の想像力豊かな一面に圧倒されながらも、鈴乃は咳払いせき払いをして続ける。

「そんな状況だから、エミリアは普段通り過ごせなくなっているんだ。そういう意味では千穂殿に自衛の術を手ほどきすれば、千穂殿の安全確保に加えて少しはエミリアの気も紛まぎれるのではないかと思つて、私も強硬に反対はしなかった。こんなことを言うとき、エミリアに怒られるかもしれないが」

鈴乃は苦笑して言った。

「これまでのエミリアは、ただただ復讐たてしやう心と使命感のみに突き動かされ、自分の生き方を考える余裕も悩む暇も無かった。結果的にだが日本にすることで、エミリアは自分の生き方を見直すチャンスに恵まれているとも言える」

鈴乃は立ち上がって、自分と千穂の空になったグラスを流し台の中に置き、水に浸ひたす。

「今は少し、エミリアは魔王から視線を外した方がいい。幸いさいわいにしてマグロナルドが再開したから、私もエミリアも魔王にそれほど気を配らなくてもよくなっているしな」

「え？ どういうことですか？」

「饒子ニギコに襲来した悪魔達を覚えているな？ パーパリツティアという悪魔の一角はカミーオと袂たもとを分かち、オルバ様に唆そそされて、再びエンテ・イスラに侵攻を始めているらしい」

「えっ？ そ、それって、大丈夫なんですか？」

魔界の悪魔が魔王たる真奥の指揮をはずれて新しい軍隊を起こしていたり、その裏でオルバが糸を引いていたりというのは結構な事態ではなからうか。

「憂慮すべき事態ではある。が、私とエミリアは今現在の侵攻以上に、魔王とアルシエルが奴らに拉致され、エンテ・イスラで新魔王軍の頭として祭り上げられることを恐れている。魔王はパーバリッティアの行いをよく思つてはいないらしいが、油断はできんしな」

「は、はあ……」

そんな聞くだけで大変そうな事態と、マグロナルドの再開がどう関係があるのか分からない千穂。

「向かいのセンタッキーにはサリエル様がいるだろう。天使達も不穏な動きこそしているが、彼らの行動はパーバリッティア達と繋がっていない。仕事中の魔王を襲おうと思えば必然的に木崎店長を巻き込まざるを得ないし、そうなればサリエル様が黙つてはいまい。木崎店長には防衛機構のような役割を勝手に押しつけて申し訳ないとは思うが」

「あー……」

「もちろんサリエル様が魔王の味方をするとは思わんが、サリエル様レベルの聖法氣に気づけば、悪魔なら恐れを為して近づくことすらしまい。オルバ様にも悪魔達にも、大天使を巻き込むリスクを冒してまで得られるメリットは無いだろう。下手をすれば天界の矛先がパーバリッティアに向けられることになる」

千穂は頭の中で、鈴乃が想定しているサリエルの立ち位置を想像する。

要するにオルバやバーバリツティアと直接繋がりのないサリエルを、抑止力として働かせようと考えているのだろうか。

そのトリガーになるのはサリエルが骨の髄まで入れ込んでいる木崎だ。
一瞬納得しかけた千穂だが、あることに気づき、思わず口を開いた。

「あつ……そ、それ、今、マズいかもありません」

「何？」

キッチンで振り返った鈴乃が首を傾げる。

「さ、サリエルさん……もしかしたら今、何かあっても戦えないかもしれません」

千穂のその一言は、鈴乃にとって寝耳に水だった。

「ど、どういうことだ？」

「じ、実は、銚子に行く前の日に……」

千穂は、サリエルが千穂に迫っているところを木崎に見られ、マグロナルドに出入り禁止を食らいショツクのあまり魔人状態に陥ったことを告げる。

「そのあと、何回かサリエルさん見かけたことがあるんですけど、人ってあそこまで無気力になれるんだって感心しちゃうくらい顔が沈んでて、センタッキーの明るい色の制服着て外歩いてるのに存在感無さすぎて、電柱と勘違いされて犬におしっこかけられてましたもん」

そのあまりにあんな話をして、鈴乃はにわかに信じることができず目を白黒させる。と同時に、頭の中に不安な記憶がよぎった。

ガブリエルとラグエルの騒動で、代々木のドコモタワーから発信したソナーの中に、尋常でなく弱い反応が一つ混じっていたのを思い出したのだ。

「ははは、な、何を、バカな。腐っても大天使だぞ？ そんなことが……」

それでも信じ難くて確認を重ねる鈴乃に、千穂は沈痛な面持ちで首を横に振った。

「チワワでした」

答えになってない上に、今までで一番どうでもいい情報だった。

※

「いらっしやいませー、こちらに見やすいメニューございますー」

翌日。夕方のセンタッキーフライドチキン幡谷店は、ディナータイム前ということもあって、客入りは半分程度と言った様子だ。

それでも店内の雰囲気は明るく、レジの女性も大変に快活な声で千穂達に呼びかけてくる。

揚げたてのチキンが客の目につくレジの後ろに並べられている様子は食欲をそそるが、新たな女性客三人の目的は、残念ながらチキンではない。

アイスコーヒーを三つ注文し、レジと入り口に近い席に陣取った千穂と恵美と鈴乃は、きつと店内を見回してサリエルの姿を探す。

「いませんね。バックヤードかな。それともキッチンか二階にいますか」

「店にいないってことじゃないといいけど……」

恵美は今日になって、千穂の衝撃の情報を聞いて、仕事を上がってから急遽駆けつけた。

恵美もサリエルを、魔王やエンテ・イスラ勢力に対する大きな抑止力として期待していただけに、木崎にフラれて廃人状態などと情けない話を放置しておけるわけがない。

「いや、微かだが店の中のどこかに気配がある。家具の隙間や物陰にいるかもしれない」

家庭内害虫ではないのだが、とにかく鈴乃に言われて恵美もなんとなく周囲に注意を払い、「本当だ……でも、こんな近くでこの程度しか力を感じられないって、相当ね」

二人が一体何を以ってサリエルの存在を感知しているのか、千穂にはさっぱり分からない。

「それも、法術ですか？」

尋ねてみると、二人は困惑して顔を見合わせた。

「術……とは違うわね」

「こればかりは感覚としか言いようがないが……そうだな、千穂殿、都庁の上で魔王が変身したとき、息苦しかったのを覚えているか」

「は、はい」

件のサリエルとの戦いの際、千穂は真奥の変身後の魔力に耐え切れず呼吸不全を起こし、鈴乃の結界に守ってもらったことを思い出した。

「別に術持ちでなくても、魔力を感じ取って体調が変化しただろう？ その感覚が鍛錬と経験で研ぎ澄まされただけのことだ」

「これ、変な感じしない？」

恵美が突然、千穂の眉間に向けて真つ直ぐ指を差し出してきた。

千穂は思わず恵美の指先を見てより目になるが、やがて眉間の肌か骨か神経か、とにかくよく分からない箇所まで血が滞留しているかのような妙な圧迫感を覚えた。

「しま、す、なんか、もによもによします。あう」

耐え切れなくなつて眉間を手でほぐし始める千穂。

「聖法気は人間には無害な力だけど、やつぱりそうやって放射される存在感みたいなものがあるのよ。その大体の方向を見てるだけなんだけど……」

「しっ、出てきたぞー」

恵美の解説にむずがゆそうな顔で頷こうとした千穂は、鈴乃の注意で顔を上げた。

鈴乃のしている方向には、確かにスーツを着たサリエルの小柄な姿があった。

ところか。

「灰色だあ……」

「見る影もないとはまさにこのことね」

千穂も恵美も、思わず顔を引きつらせるほどに、サリエルの面差しは様変わりしていた。

幽鬼のように瘦せた顔つきと足取りで、女と見れば誰彼かまわず声をかけていた遊び人の空気は微塵も感じられない。

毎食マグロナルドという食生活でよくない太り方をしていただけに、余計に痩せ方が不健康に見える。

「お疲れ様ですー」

他のスタッフからかけられている声も聞こえているのかいないのか、サリエルはほとんど反応することなく店を出ていった。

「どうする？」

「決まってる。追うぞ」

「お、追いかけてどうするんですか？」

ばたばたと席を立ててサリエルを追って店を出た三人。

とぼとぼと力なく歩くサリエルの足取りは遅く、見失う心配は無さそうだった。

「面倒事が起こる前に、なんとかして気力を取り戻させねば」

「もう現時点で面倒事のような気がするけど……仕方ないわね」

「できれば周囲に人がいない状態で話したい。後を尾けて帰宅したなら家に押し入る」

「そうね。最悪戦闘になっても、アラス・ラムスならあいつの鎌もなんとかなるだろうし」
強盗に押し入る相談としか思えぬ物騒なことを言い合う勇者と聖戦者に冷や汗を流す千穂だが、ふと気づいて携帯電話を開き、時計を見た。

「あ……もう六時になる……」

その言葉に、恵美がはっと向かいのマグロナルドを見る。

「そうか、千穂ちゃんこれから仕事？」

「はい、すいません……行つて帰つてくるにはもう時間が……」

「ごめんね、私も仕事なかなか上がれなくて」

「そんな、遊佐さんだってお仕事だったんですから、気にしないでください。でも……」

「分かっている。まずは我々が行つて様子を見よう。千穂殿は今日のところは、仕事に精励してくれ」

「はい、お役に立てなくてすいません」

「そんなことないわよ。千穂ちゃんのおかげであのバカ天使が大変だつて分かつたんだから、後は私達の仕事よ」

落ち込む千穂を恵美が慰める。

センタッキー前で千穂と別れ、恵美と鈴乃はとぼとぼと歩くサリエルの後を尾け始める。

スリムフォンのGPSマップ機能を使いながら道を確かめつつ商店街を抜け、遊歩道を過ぎ

て古い住宅街に出る。そこから更に歩いた先に、そのマンションが見えてきた。

「あれか？」

サリエルの足が向かったのは遠くからでも分かる真新しい外壁のマンションだった。

土地利用制限の問題で低層のマンションだが、それでも窓の様子から見ても、恵美の部屋よりずっと大きな間取りになっていることが分かる。

片側一車線交互通行の交通量の多そうな一直線の道に面していて、都心のマンションらしく一階には商店がテナントとして入居できる作りらしい。

二つあるテナントスペースの片方は小さなコンビニで生鮮食品も売っているようだ。

「雨の日には楽そうだな」

そんな所帯じみた感想を漏らす鈴乃。

もう片方は空き店舗で、テナント募集の札が掲げられているが、残っている外装の雰囲気から、カフェか何かではないかと恵美は推測した。

サリエルは恵美達に気づく様子もなく、横断歩道を渡ってまっすぐそのマンションの入り口へ消えていった。

「どうやらここでよさそうね。でも、何がヘブンズシャトーよ……」

ヘブンズシャトー・幡ヶ谷。

掲げられたマンションの皮肉な名に恵美が鼻を鳴らすが、ふと、

「あれ？」

「どうした？」

サリエルに気づかれぬよう青信号を一回見送って待っていた二人だが、恵美はサリエルのマンションのコンビニから、見覚えのある人物が出てきたことに気づき目を見開いた。

その人物は恵美達の方には来ず、道沿いを歩いていってしまう。すれ違ったら挨拶くらいはしたほうが良いかと一瞬で考えた恵美は、その人物の背中をしばし目で追った。

「どうした？」

「私服姿だから気づかなかった？ 今の人、マグロナルドの店長さんよ。木崎さんだっけ？」

言われて鈴乃は恵美の視線を負うが、一つ先の横断歩道を渡ったその人物は、既に二人の視界から姿を消していた。

「木崎殿……彼女が、何故このマンションに？」

「……さあ？ まさか、関係ないとは思うけど」

「だが、他に考えようがあるか？」

「で、でもそれなら未だにサリエルが灰色小人状態とかおかしくない？」

「た、確かにな」

そんなことを話している間に、

「あ」

二人が待っていた信号がいつの間にか青になっていて、気づいたときには点滅していた。

「……っ」

慌てて渡ろうと一歩踏み出した瞬間完全に赤になり、やむなく二人は出した足を下げる。

「……有り得ないだろう。木崎殿がサリエル様を相手にするとは思えん。大体、千穂殿の話では、木崎殿がサリエル様を袖にした結果、あんなことになってしまったわけだろう？」

「そうね……私も木崎さんと直接話したことはほとんどないけど、魔王や千穂ちゃんの話聞く限り、フラれた程度で気を病んじやうような軟弱男を歯牙にかけそうな人じゃないし」
しばし複雑な思いに囚われた恵美と鈴乃だったが、

「まあ、それは後で考えればいい。まずはサリエル様だ」

「郵便受けから部屋番号見られるかな。あ、でもオートロックだったらどうしよう」
新しいマンションなら、住人の許可なく棟内に入れない可能性は十分あり得る。サリエルだけなら押し入ってもなんら呵責を感じないが、他の住人に迷惑になってはいけない。

なんとか穏便にサリエル宅を訪ねる方法は無いかと考えていたとき、

「あっ！」

恵美と鈴乃はまたも同時に声を上げた。

なんと話題のサリエルが再び、マンションから出てきたのである。

スーツ姿ならまだなんとか普通の体裁を保っていたのに、今度はジャージとヨレヨレのTシ

ヤツというどうしようもない格好である。

「着衣の乱れは心の乱れだ」

鈴乃が益体のない訓示を述べるが、どうやら木崎が出てきたコンビニに用があるらしい。

「どうやらあの様子だと、木崎さんはサリエルのところに来たわけじゃなさそうね」

「そうだな。青になるぞエミリア、折角また出てきてくれたんだ。迅速に確保……」

鈴乃の言葉を持たず信号が青になり、二人が足早に横断歩道を渡ったその瞬間だった。

「!!」

サリエルが、コンビニの手前でビタリと足を止めた。

「？」

自分達に気づいたのだろうか。サリエルを訪ねてきたのだから別に気づかれても構わないのだが、一向にこちらを振り向く様子はない。

「……サリエル……様？」

コンビニの前で棒立ちになっているサリエルに、鈴乃が恐る恐る声をかけた。

「……我が……女神……」

「は？」

「我が女神が今ここにいたか!?」

「うわわわわわ!!!!」



突然血走った目で振り向いたサリエルは、目の前にいた鈴乃すずのの両肩をがっしりと掴む。

鈴乃はサリエルの突然の凶行に慌てて、

「ちよつと何してるの！ ベルを放しなさい！」

「答えろクレステイア・ベル！ いたろ！ ここに我が最愛の女神が今の今までいたろ!?」

「お、落ちてきてくださいサリエル様！ め、女神と言うのは、マグロナルドの木崎店長のことでですか？」

「い、いたのか!?」

鈴乃の確認に急に弱々しくなったサリエルは、細るような目で鈴乃と恵美を交互に見た。

「いたらどうだっていうの！ とにかくベルを放しなさい！ 警察呼ぶわよ！」

勇者が大天使を相手に警察もないものだが、思ったよりも素直に、サリエルは鈴乃から手を離した。

「いや……いたんだ……僕には分かる」

その悲しみに満ちた言葉に、食ってかかれた鈴乃も思わず憐憫の情を傾けそうになるが、

「これは、我が女神の香り……女神の手になるコーヒーの香り」

「気持ち悪いっ！」

恵美の容赦ない一言にも堪えた様子はなく、サリエルはずるずると座り込んでしまう。

「ああ……手を伸ばせば届くところにいるのに……時を戻せるなら……ああ」

「ねえベル、どうしちゃったのコイツ」

「知らん。知らんが、このままではそれこそ通報されかねない。サリエル様、とりあえず、立ち上げれますか」

「……ああ、すまない、取り乱した。買物はやめた。女神の事を思い出したら、もうそれどころではない」

ふらふらとマンションに戻ってゆくサリエルの様子を、恵美と鈴乃は言葉も無く見送る。今日のところはサリエルの現状確認と居住地を突き止めるに留めることにした。追及したいことはあるが、今のサリエルではとても会話にはなるまい。

「三〇二ね」

恵美達はサリエルが確認した郵便受けだけを外から確認し、引き上げることにした。

だが、サリエルの状態は思った以上に重症だ。

木崎にフラれたのが原因なら関係を元に戻せば良いということは分かるが、木崎と顔見知り程度の恵美達に、サリエルを許してもらうよう言うことなどできるはずがない。

だがこのままでは、サリエルが防御機構として機能せず、悪魔達が付け入る隙を放置することになってしまう。

「……なんで魔王の身の上を守るために、こんな頭の痛い思いしなきゃいけないのかしら」
恵美は鈴乃にも聞こえない、複雑な色の独り言を漏らしたのだった。

※

「あれ？ 今日木崎さん来ないんですか？」

千穂は、着替えてシフトに入ったところで、店内に木崎の姿が無いことに気づいた。カウンター先の先輩クルーに尋ねると、

「休憩時間に入ったから出かけてくるって、外行ったよ。今は真奥さんが二階やつてる」
そんな答えが返ってくる。

「そうなんですか？ いいなあ。私も早く二階行きたいです」

先日は真奥と自信が無いような話をしたが、やはり千穂も一度は新しい業態のカウンターに立ってみたいのだ。

だが先輩クルーは苦笑して首を横に振った。

「そう？ 俺は木崎さんのコーヒー飲んだ後だと、二階上がろうって気にならない。木崎さんの味と違うとかクレームもらってもお手上げだし」

「それはそうかもしれないですね」

皆考えることは同じらしく、千穂は苦笑する。と、そこに、

「こら、クレームとは何事だ。お客様のご意見だろう」

いつの間に戻ってきていたのか、社員用のベストと帽子を脱ぎ、シャツの上から日焼け避けのショールを羽織った木崎がコンビニの袋片手に立っていた。

「あ、お帰りなさい。早かったですね」

「おはようございます木崎さん。出かけてたんですか？」

「ちょっと私用でな。すまないがスタッフルームにしばらく籠る。二階は問題なさそうか？」

「はい、真奥さん、なんとかやつてるみたいです」

木崎はちらりと二階のモニターに目をやる。

「うむ。だが、いずれは全員二階をできるようにならないと、シフトを回せなくなるな」

「そういえば真奥さんが言ってたんですけど、マツダカフェ用の資格があるんですか？」

「資格？」

先輩クルーの意外な言葉に木崎を見ると、木崎は事もなげに頷いた。

「別にそれが無ければマツダカフェに入ってはならないものではないがな。一応、受講した者にはちよつと格好いい認定証が出る」

「認定証って……もしかして二階に飾ってある木崎さんの写真入りのあれですか？」

「そうだ。あれは店舗に飾るためのもので、それだけで専門職が店にいることをお客様に示す指標になる」

特に内容を真面目に読んだわけではなかったので、千穂は件の木崎の写真入り証書を店舗管

理責任者の証明書だと思つていた。

木崎は真奥に渡したのと同じ案内をプリントすると、二人に差し出す。

「マグロナルド・パリスタ……真奥さん、これ受けるんですか？」

「ああ。早速今度の回に申し込んでいた。君達も興味があるなら受けてみるか？」

「これ受ければ、木崎さんみたいにコーヒー淹れられるようになります？」

千穂の案内を読みながらの何気ない問いに、木崎は一瞬だけ返事を躊躇う。

「……ほんのわずかに、近づくことはできるかもな」

「敵わないなあ」

先輩クルーはそれほど興味が無いらしく、木崎の言葉を自信に裏打ちされた自負と受け取つたようだ。

千穂は少し考えてから、頷いて顔を上げる。

「私も受けられますか？ ある程度勤務実績が必要って書いてありますけど」

「店舗管理責任者が一筆添えれば大丈夫だ。ちーちゃんの場合、まーくんと違って時間帯責任者を経験していないレギュラークルーだから受講料は免除されないが、それでいいなら」

「面白そうなので、受講してみたいと思います」

「そうか。じゃあ明日にでもその申込用紙に判子押して持ってきてなさい。今ならまーくんと同じ回に滑り込めるはずだ」

「分かりました。ありがとうございます」

千穂は申込用紙を丁寧に折りたたむと、スタッフルームに向かい、ロッカーの自分のバッグにしまう。

マグロナルドのクルーとして技術と知識を磨きたい、という思いに、偽りは無い。

だが千穂にはもう一つ、思惑があった。

「……真奥さん、本当はどう思ってるのかなあ」

恵美も芦屋も、エンテ・イスラの事情に無関係な日本人もいない場所で、真奥が今の状態をどう思っているのか聞いてみたかったのだ。

千穂の告白の返事は今もって保留状態だが、自惚れでなく、真奥が千穂のいる日常を好意的に捉えているという確信はある。

鈴乃の部屋に泊まった晩、恵美が行く末に悩んでいるという話を聞いて、真奥はどうなのだろうとふと思った。

思えば、真奥は最初からあまり恵美を敵視していなかったように思う。

人間世界を滅ぼして世界征服をしようとしていた過去を持つのに、今現在真奥が日本で人間を忌み嫌っている気配も無い。

魔王城を訪れて真奥だけを呼び出すこともできなくはないだろうが、間違はなく鈴乃には不審がられるだろう。

惠美が真奥を敵視できなくなり始めて、エンテ・イスラで真奥のあずかり知らぬ悪魔の軍隊が戦争を起こそうとして、千穂が日本には存在しない術を会得しようとしていることを、変わってしまいつつある日常を、真奥はどう思っているのだろうか。

それを、二人きりでいるときに、真奥の口から聞いてみたい。

二人きりで……二人きり……？

「そ、それって、デ……」

「何か悩み事か？」

「ひやうっ？」

ふと声をかけられて、想像があらぬ方向に向かっていた千穂は弾かれたように立ち上がる。見ると、後から入ってきてデスクに腰かけながらコンビニのサンドウィッチらしきものを齧っている木崎と目が合った。

「申込用紙をしまつてから、何やらずっとぶつぶつ独り言を言っているからな。だが今は勤務中だということは忘れてもらつては困るぞ？」

「あ、わ、私そんなにぼーっとしてました？」

千穂は赤面しながら、恥ずかしさのあまり顔をべたべたと触る。

「ちーちゃんらしくない、と思う程度にはな」

木崎は苦笑して、ペットボトルの紅茶を一口飲んだ。

「夏休み明けに学力テストでもあるのか？」

「え？ どうしてですか？」

唐突な質問に、千穂は首を傾げる。

「いや、最近何かに悩んでいるようだったからな。今もそうだが、店が再開してからのもちやんは壁にプチ当たった人間特有の顔をしている。笑うときに眉毛が動かないんだ」

自分では意識して悩みを表に出すまいとしていたのだが、何も知らないはずの木崎にこうもやすやすと看破されるほど自分は分かり易いだろうか。

「分かり易いな。私も今、ガラにもなく気持ち焦っている時期だ。そういうとき、不思議と同類を嗅ぎ分けるカンが働く」

「木崎さんが焦ってるなんて、ちょっと想像できません」

「おいおい、私だって人間だぞ？ 焦るときくらいある。まあ、迷いのない生き方をしていると思われる行動を心がけているのは事実だか」

木崎は大口を開けてサンドウィッチを放り込むと、紅茶でそれを一気に飲み下した。

「アラサーから華の十代に、人生の先輩として一言贈ろう。案ずるより産むが易しだ。世の命運に関わることでなければ、取り返しのつかないことなんてそうそう起こらん」

「そうですか？」

「行動しなけりゃ失敗しない代わりに何も変わらん。行動すれば、失敗するにしろ成功するに

しろ何かが変わる。変わることを恐れていたら、今の時代を生きていくのはしんどいぞ」

「変わるのを……恐れてる……わけじゃないんですけど……」

考え込んでしまった千穂を見て、木崎は小さく頷いた。

「悩んで答えがすぐに出来るようになれば、まずは目の前の作業に集中しよう。今ちーちゃんが為すべきは目の前のマグロナルドの仕事だ」

「あ、そ、そうだ。す、すいませんサボっちゃって」

時計を見れば、千穂は十分近くもスタッフルームで煩悶していたことになる。

慌ててスタッフルームを飛び出す千穂の後ろ姿を見送ってから、木崎はふと、デスクの引き出しにしまっている従業員の面接時の履歴書を取り出した。

「ふむ……」

千穂の履歴書を眺めながら、木崎は二階にいる真奥のことを考えていた。

「ちーちゃんもあれ、受けるんですか」

休憩から戻ってきた木崎から、千穂もマグロナルド・パリスタの講座を受けることを聞かされた真奥。

「ああ、まーくんと同じ日程で受講する。折角だから二人で行ってくだらばいい」

「そうですね、そうします」

気軽にそう言つた真奥を見下ろしながら、木崎はふと尋ねた。

「ときにまーくん、君はちーちゃんちゃんの誕生日を知っているか？」

「え？ いや、知らないです」

真奥は木崎の唐突な質問に戸惑いながらも即答する。

そして木崎の表情が、何やら真奥を咎めるような顔になつたのを見て、自分が下手へたを打つたことに気づいた。

「君が気が利かないのか、ちーちゃんが奥手すぎるのか、判断に迷うな」

「は？」

真奥の間抜けな声に、木崎は呆れたように首を振つた。

「かなり近い、とだけ言っておく。今日び従業員の個人情報はおいそれと漏いらせんからな」

「そうなんですか？」

真奥も日本の常識として、誕生日を祝う習慣があることは知っている。だが改めてそう言われると、誰かの誕生日を意識したことなど一度もなかった。

「どうも君たちを見ていると、最近はまーくんの方がちーちゃんに色々面倒をかけていそうだ。日頃の礼を示す意味で、一つ男を見せてみたらどうだ」

「は、はあ……」

「どうせここのところちーちゃんの様子が変なのも、何か君が関わっているのだろう？」

「!!」

真奥は思わず木崎の横顔を見上げる。

まさか千穂が本当のことを話しているとも思えないが、木崎には魔王であったとしても一切の隠し事はできないということらしい。

「別に言われなくても分かる。新装開店前と後で、随分君達は雰囲気が変わった」

「……そう、ですか？」

「それは別に悪いことではないよ。人間どんなに年を食っても迷いも悩みもする。だがそんなとき、そばに誰かがいるかいなかで随分話は変わってくるものだ」

木崎はにやりと笑って、真奥を肘で突いた。

「たまには君からちーちゃんの懸案を解決してやれ。得点高いぞ」

「……木崎さんて、時々おっさん臭いですよね」

真奥は精一杯の反撃をするが、木崎は素知らぬ顔だ。

「処世術だな。女がおっさん臭くなれると何かと世の中面倒が無い。縁遠くはなるがな」

これは返しが難しい。

「とにかく、君達がマグロナルドパリスタの資格を持てば、二階を多くの人間で回せるようになる。そんなに難しいことはないが、きちんと学んでこい」

「分かりました」

真奥の逡巡しゆんそんを読み取ったか、木崎は自ら話を先に進めた。

「でも、プレゼントか……何がいいんだろうなあ」

真奥の目から見ても、千穂は同年代の少女達に比べて人格が陶冶とくやされており、あまり女の子らしさを前面に押し出したものをプレゼントしても役には立たない気がする。

「役に立つものとか考えちゃうと、お米十キロとかサラダ油セットとかになっちゃうし」

「お中元か」

木崎は呆れる。

「でもアクセサリーなんかは好みがあるし、本も話題のはちーちゃんだったら持つてる可能性あるし、かといって花っていうのはちよつと意味深いみふかすぎませんか？」

「そうだな。君達の微妙な距離感つひまなかんだと、難しいかもしれん」

木崎も少しは考えてくれているようだが、もちろん答えを教えてはくれなかった。

「ま、極論を言えば、プレゼントなんてのは使ってもらえれば御ごの字だ。姿に凝ればそれだけ重荷になってしまう可能性もあるし、要は気持ちだ。心を込めて適当に選べ」

そのとき、新たな客がエアコンの冷気で顔を扇あおぎながら上がってきた。下で何も注文をしなかったということは、マッダカフェの客だ。

顔を見ると、会話をしたことはないが改装前からの常連客の一人だった。

この夏の最中、今も汗が引かない顔でいるのに、プラチナローストコーヒーを注文するとき、アイスコーヒーではなく必ず「熱々にして」と注文してくる。

真奥は心の中でホットさんとあだ名をつけていた。

「いらつしゃいませ」

木崎と真奥は揃って丁寧にお辞儀をする。

「カプチーノ、Mサイズを熱々で」

定番の熱々が出て、真奥は思わず笑みをこぼす。

「かしこまりました。他にご注文はございませんか？」

真奥がオーダーを確定させ、木崎に飛ばす。

「お会計三百円頂戴致します……五千円、お預かりいたします。チェックお願いします」

マグロナルドでは高額紙幣での支払いがあった際、別のクルーにお釣りの紙幣枚数の確認を義務付けている。

真奥は木崎を振り返ると、木崎はなぜか、ストックに並べられたカフェ用のマグカップの底を、指先で順々に触れていた。

「OKです」

木崎はその作業をしながら真奥のお釣りを確認する。

真奥は紙幣と小銭のお釣りを返すと、

「よろしければお席にお持ちいたしますので、かけてお待ちください」

サラリーマンは番号札を受け取って、新品の弾力が心地よいカフェシートの隅に陣取った。

真奥は場所を確認すると、木崎の手順を視界の隅で観察する。

ストックのカップの中の真ん中からカップを取った木崎は、なぜか、紅茶などを出すときに使う熱湯でカップを洗い始めた。

全体にまんべんなく熱湯を浴びせてから、今度は取っ手の上の方を親指で触る。

何を納得したのか一つ頷くと、あとはオーダー通りにサーバーにかけてカプチーノ用の豆をサーバーに設置し、エスプレッソを抽出。スチームミルクのサーバーから泡立てミルクを出して、真奥も何度がマニュアル通りに作ったカプチーノが出来上がった。

「ん」

満足げに頷いた木崎は、自ら客席に出向いてナンバープレートと引き換えにカップをテーブルに置いてきた。

真奥はお客の様子から目を離さない。

ポケットから携帯電話を取り出して、あくまで休憩をしながら体のホットさだったが、口をつけるまでカップを見もせず携帯電話の画面を注視していたのが、

「……？」

一口含んだ途端、テーブルにカップを置こうとした動きが止まる。

携帯電話から視線が外れ、彼はテーブルに置こうとしていたカップ再び口をつけた。

最初の一口より大きく深く味わってからカップを置くホットさんの姿を見て、真奥はやはりあのカップチーノが自分が淹れたそれとは違うことをおぼろげに理解する。

「何が違うんだろなあ……」

その謎は、マグロナルド・バリスタの講習を受ければ少しは解明されるのだろうか。満足げな顔で戻ってくる木崎の顔を見ながら、真奥は不安を拭えなかった。

※

二十二時になって、千穂と共に、朝から勤務に入っていた真奥も帰り支度を始めた。どこか楽しげな木崎に見送られて表に出る。

「んじや、帰るか」

「はいっ」

途中までは帰り道が同じの千穂と真奥。

千穂は真奥が早上がりのシフトだったと知らなかった。これならバリスタ講習の日を待たずとも、真奥に時間を取ってもらって話をする事ができるのではないかと思った千穂だったが、

「……」

駐輪場からデュラハン式号を出してきた真奥が、突然千穂の後ろを見ながら、麦茶と間違えてそばつゆを飲んだような顔になる。

「おや、二人とも今仕事あがりか？」

「……別に、待ってたわけじゃないから、勘違いしないでね」

いけしやあしやあと言つてのけるのは、鈴乃と恵美だ。

どう考えたって真奥達が出てくるのを待っていたとは思えない。

千穂は千穂で、この時間まで二人が近くにいたということは、サリエルはやはり急には復活しなかったのだと理解する。

真奥にエンテ・イスラからの魔の手が伸びないよう、見張っていたということだ。

だが真奥にしてみれば緊急に恵美達に付きまとわれるような覚えはないので、諦めたようにため息をつく。

「なんの用だよ」

「待ってたわけじゃないって言ったでしょ」

「……遊佐さん？」

千穂は、ふと、何かがいつもと違うように感じた。

恵美の真奥への物言いが辛辣なのはいつものことだ。だが、何かが違う。

「エミリアの言う通りだ。私達はセンタッキーの方に用があった。とつくに用は済んだのだが、

があるずとおくが盛り上がってしまつてな」

「お前、ガールズトークって言葉氣に入ってるのか」

げんなりした真奥が、確認するような目つきで恵美を見ると、

「自分に用があるような覚えがあるの？」

勇者である恵美にそう言われてしまうと魔王たる真奥としては、

「まあ、結構腐るほど」

と答えざるを得ない。

「……そう」

「あ？」

だが、それこそ以前までならじゃあ死ぬくらいのことを言つてきてもおかしくない恵美が、面白くなさそうな顔でそれだけ言つてそっぽを向く。

「どんな用があると思うの」

「は!?」

あまりにも予想外の方向から攻められて、目を丸くする真奥。

そんな真奥の目と視線を追つて、千穂はようやく気づいた。

今日の恵美は、真奥の目を見ていないのだ。

普段、視線も敵意も指も遠慮会釈なく真っ直ぐ真奥に突きつける恵美が、その全てを真奥か

らそらしているのだ。

「や……そりやまあ、なんだろうなあ」

真奥はそんな恵美の態度の違いに気づいているのかいないのか、困ってしまったて頭を掻く。

「ちーちゃんと一緒に帰るから、送り狼になるのを警戒してついてくるとか」

「千穂ちゃんのお母さんに頭が上がりないあなたがそんなことできるの？」

「……じゃあ、センタツキーや前の本屋から見張れない二階で俺が悪巧みしてるとか」

「店長さんに心酔してるくせによく言うわ」

「じゃあ、いつもの通りいちやもんか？」

「何がいちやもんよ」

奇立たしげな態度を隠せない恵美は、息交じりの忌々しそうな声で俯いてしまう。

「どうして勇者が魔王のところに来るのに、理由を考えなきゃいけないの？」

「なんの用も無いのに来るのもどうかと思うがな」

「用はサリエルにならあったって言うてるでしょ」

「なんなんだよ。お前、最近ちよつとおかしいぞ？」

真奥も段々イライラしてきて、つい口調が險悪になる。

「……っ！」

真奥の厳しい口調に顔を上げた恵美の瞳には、

「ゆ、遊佐さん？」

「な、なんだよ……」

「……」

涙が浮かんでいた。

恵美の涙を見るのはいつ以来だろうか。

真奥にも、ここ最近の恵美がおかしい理由はなんとなく分かっている。

ガブリエルが恵美に告げた、恵美の父親が生きているらしいという事実が、若い勇者の心を揺さぶっているのだろう。

身近な存在の死から起こる復讐心が、行動の原動力になることは理解できる。

恵美も勇者として当たり前の正義の心は持っているのだろうが、どうやら真奥の侵略に巻き込まれた父の仇を討つことも、恵美の大きな目的だったのだろう。

そこまで思い当たって真奥は思い出した。

魔王に見せる勇者の涙。

それをいつ見たのか。

そういえばあのときも、恵美は、

「なんで、私に、人に、世界に優しくするのよ！」

泣いていた。

「なんで私のお父さんを殺したの！」

悲痛な叫びが、隠しようのない絶望を秘めた声が、真奥の脳裏にこだまする。

「なあ恵美」

「……何よ」

溢れそうになる何かをこらえている恵美にかける真奥の声は、思いのほか優しく、

「やっぱり、俺は世界征服やってた方が性に合うのかもな」

「……は？」

「真奥さん？」

「魔王……？」

状況を静観していた千穂と鈴乃が動揺するほど、不穏な気配に満ちていた。

「やっぱり、人間の世界なんか性に合わねエのかも。俺を待ってる奴らも結構いるみたいだし、やろうと思えばカミーオに連絡取って、迎えに来てもらうこともできるだろうしな」

「ま、真奥さん？　ほ、本気じゃないですよね？」

静かな真奥の言葉を聞いて、そばに立っていた千穂は動揺のあまり声が震える。

「ちーちゃん、大体、おかしかつたんだよ。百を超える魔界の部族を治め、五十万の悪魔の頂点に立って魔王軍を統べてた俺が、人間の世界を学ぼうだなんてな」

「……」

口調を変えない真奥の言葉に、鈴乃の目が警戒心に彩られる。千穂と同じく、真奥の真意を測りかねているのだ。

「やつぱり魔王と勇者は、相容れない。俺は世界征服のために悪逆の限りを尽くすから、お前も改めて俺を殺しに来いよ。そうした方が、よっぽど自然だろ」

「真奥……さん」

「悪いな、ちーちゃん」

千穂の肩を叩くと、真奥は三人の女性の間を割ってデュラハン式号を押して歩き始める。

「芦屋、大喜びすんだろうな。復興しきる前に攻め込めば今度はあっさり行けるかもな」

「……くせに」

「カミィオに、ちよつと迎えの人数大目にしてもらうかな。日本をパニックに陥れて、軽く前菜替わりにしてもいいな」

「……しないくせに」

勝手なことを言っている真奥の背に、小さく恵美の声が届く。

「……蓮佐さん？」

「エミリア？」

千穂と鈴乃の呼びかけに答えず、恵美は顔を上げると、鋭い目つきで真奥を睨み、そして、ユニクロTシャツの背に容赦なく叫んだ。

「そんなこと、できもしないくせにっ！」

「……」

真奥は足を止めて、目だけで恵美を振り返る。

「するつもりも……ないくせに……っ！」

「あんま騒ぐと、木崎さん飛び出してくんぞ」

「店長さんに怒られるのが怖いのに、世界征服なんてできるの」

「誰にでも頭が上がりえない相手ってのはいるもんだ」

「あなた、何がしたいの？」

「だから言っただろ。世界征服だよ」

「そうじゃない。世界を征服してからよ」

「……」

恵美の言葉に、鈴乃も千穂もはっとなった。

「魔界の悪魔達は、魔力さえあれば食べ物だっていらない。かといって人間の社会に馴染むわけじゃない。あなた達にとって人間の世界の土地や財宝がどんな意味を持つのか？ 人間を殺せるってこと以外なんの魅力も無い世界を支配して、そのあとどうしたいのか？」

鈴乃と考察した通り、魔界とエンテ・イスラの価値観は大いに異なる。

「人間を皆殺しにして、世界に絶望を蔓延させてやる、ってのはどうだ？」

「そんなこと聞いてくる時点で、本心じゃないのは見え見えよ」

恵美は怪訝な表情で続ける。

「マラコーダに侵略された南大陸は、殺戮の嵐が吹き荒れてた。西大陸だって、ルシフェル軍の猛攻が凄かった。でも……北大陸は、アドラメレク軍はマラコーダと対照的に騎士団以外には手を出さなかった。東大陸は、一番支配されていた期間が長かったのに、統一蒼帝の一族は今も変わらず東大陸を治めているわ」

「……さすが、世界を巡っただけはあるな。結構勉強してんじやねえか」

皮肉に笑う魔王を、恵美は涙を隠そうともせずに睨みつけた。

「あなたが……あなたが心底血に飢えた残酷な魔王なら、私だって……私だって、こんなに悩んでないわよー」

「遊佐さん……」

「私に面と向かって『この世界で正社員になるー』なんて言った時点でおかしいと思うべきだったんだわー。あなたは世界征服なんかしたいんじゃない！ ただ……」

なぜかそのとき、恵美は千穂を一瞬だけ振り返って、それから言った。

「凄くことをした自分を、誰かに認めてもらいたかっただけなんじゃないの?」

その一言の効果は観面だった。

真奥の顔から一瞬にして表情が消え失せ、次の瞬間、怒りとも羞恥とも違う激しい感情が

一気に噴き出す予兆が惠美にも千穂にも鈴乃にも見て取れた。

だが、次の瞬間、

「……っ!?」

「ま、真奥さん!?」

三人が見ている前で、なんの前触れも無く真奥の姿が自転車ごと掻き消えた。

「な、何……?」

言い争っていた惠美が、一番動揺していた。

今の真奥は、間違ひなく惠美に向かって何かを抗議しようとしていた。

大きく息を吸い込んで、きつと惠美の言葉を否定する言葉を吐こうとしたのだろう。

真奥に魔力発動の気配は無かった。それでも空を見上げ、左右を見回し、真奥がなんらかの超常的な方法で移動して逃げたのではないかと想像し、それが間違ひであることをすぐ悟る。

「ま、真奥、さん?」

千穂がふらふらと、今の今まで真奥がいたところに歩み寄る。

だが、真奥が立っていた歩道の敷石の上には真奥の痕跡は何一つ無い。真奥が立っていたはずの場所に千穂が重なるように立っても、何も起こらなかった。

「ど、どうしちゃったんですか」

夜の町は、いつも通りに動いている。

甲州街道からは絶え間なく車の音が聞こえてくるし、狼狽える三人を横目に、今また新たな客がマグロナルドに入っていった。

だが、真奥とデュラハン式号の姿だけが幻だったかのようにその場に無い。

「真奥……さん」

千穂は、真奥が消える直前に触れられた肩に、思わず手を当てる。

「え、エミリア、まさかこれは」

「私も一瞬そう思ったけど……でも、こんなこと有り得るの？」

鈴乃と恵美が想像したのは、恐れていたバーバリッティア一党による真奥の誘拐だ。だが、今も、そして先ほども、魔力どころか聖法気すら察知することはなかった。

「……魔王城は、大丈夫なのか？」

鈴乃の一言で、恵美は息を呑む。

そうだ。芦屋や漆原にも、もしかしたら異常が降りかかっているかもしれない。

異常と言うか、恵美達が想像していることが本当に起こったならば真奥達にとってはそれが正常な事態なのだが、とにかく今の状況はややこしいにも程がある。

「ルシフェルのスカイフォンの番号は分かっているわ。あとはあのニートがいつも通りパソコンで遊んでくれれば……」

恵美は自分のスリムフォンを取り出して、漆原のスカイフォンナンバーを呼び出す。

だがどういうわけかコール音がしないので不審に思った恵美は改めて画面を見て、電波表示が「圏外」になっていることに気づき目を刺いた。

「え？ け、圏外？」

「番号を見せろ！ 私の携帯で……」

鈴乃が恵美の手からスリムフォンを奪って自分の携帯電話を開くが、

「圏外だ……」

そんなやりとりを見ていた千穂は、自分の携帯を開き、やはりそこに圏外表示が出ていることに息を呑む。

「そ、そんなはずないです。私いつも、お店から出たところで家にこれから帰るって電話かけてました！」

しばらく画面を凝視していても、電波表示は一向に回復する兆しが見えない。と、

「あれ？ もしもし。もしもー……あー」

恵美達のすぐそばを通りがかった若い女性が、顔を響めて携帯電話を見ていた。

「げ、電波切れてる」

その女性はしばし携帯を空中で振り回しながら恵美達から離れていき、しばし離れたところで、再び携帯電話を耳に当てたのだ。

「あそこは、電波があるのか？」

その距離は約五十メートル程。

恵美と鈴乃はその女性を追いかけられるようにばたばたと走り、女性が携帯を耳に当てたところ
で、突然画面に電波が復活したことを確認した。

「よ、よく分からないけどこれで電話できるわね」

恵美が胸を撫で下ろして改めて漆原にコールするが、

「……？」

鈴乃は、なぜか足元を気にしていた。

何かを踏んでしまったような動きで鈴乃は今いる場所から一歩足を下げる。

「おかしい」

「え？」

コール音はするのに電話を取る気配の無い漆原にイライラしながら恵美が鈴乃を見下ろすと、
鈴乃はその場にしゃがみ込んで地面を必死に凝視している。

「ベル、何してるの？」

鈴乃は恵美の問いには答えず、道端の小石を手に取って掌に載せた。

「せつ」

鈴乃が低い声で気合いを入れると、小石が淡く光り出す。聖法気を込めたのだ。

そしてそれを低い位置から指先で弾くと、

「えっ!?」

惠美は目を見張った。

鈴乃の聖法気を込めた小石が、何も無い所で弾き返され、その瞬間、鈴乃のすぐ目の前で微かに蒼い炎のようなものが揺らめく。

「……結界だ」

「け、結界!?」

惠美は驚いたが、鈴乃はもっと真剣な顔で息を吞んでいた。

「しかも、魔力じゃない。これは……法術結界だ! 魔王は、法術結界に取り込まれたんだ!」
「でも、それってもしかして、境目がここにあるってこと!? なんで私達、境界を自由に出入りできるの!?」

相変わらずコールに応じない電話を一旦切った惠美は鈴乃に問うが、それよりも早く、

「……あああああ」

「べル、何か言った?」

「いや、エミリアではないのか?」

「……まあ……ぬうう!」

「え!?」

声は、背後の、空から聞こえた。

「我が女神いいいい!!」

聞きたくもない声が頭上から降ってきて、

「ひいっ」

空中から降ってきたのは、確認するまでもなくサリエルだった。そして幽鬼のように瘦せ細った顔が目を血走らせて歯を食いしばっているあまりの表情に、

「今助けにばぶべっ!!!」

鈴乃が思わず、武身鉄光を振った。

「ぼっ……ぐっ……ばうんっ!!!」

容赦なく振りぬかれた大槌に吹き飛ばされてバウンドしながら転がったサリエルは、

「べふうっ!!!」

歩道の縁石に当たって止まった。

「……………し、死んでない?」

増幅器を用いた法術のお手本のような鮮やかさで武身鉄光を発現させ、息を荒くする鈴乃に恵美は恐る恐る尋ねるが、

「んはっ!」

「起きたっ!」

当のサリエルはそれほどダメージを負った様子もなく、元氣よく飛び上がった。そして、

「こ、これは何事だっ！」

腕を振って恵美と鈴乃に問う。

その瞬間、サリエルの振るわれた手から放たれた聖法氣の波動が、一帯を痺いだ。

先ほど鈴乃がしたのと同じ効果をもたらすそれは、はつきりと結界の境目を虚空に映し出す。道一杯に広がったドーム状の聖法氣の力場である。

「いや、私達にしてみればあなたが何事なんだけど……」

「我が女神は、女神は無事か？」

「き、木崎店長以前に、特に店に何も……」

そう言つて、恵美と鈴乃は、真奥が消えたあたりを見て、先ほどと同じようになんの異常も無く、誰もいないことを確かめ……。

「あ、あれ？」

「千穂……殿？」

千穂が、いない。

携帯の電波が入らない、という話をするまで、千穂も恵美達のすぐそばにいたはずだ。

「おぐっ！」

地面から起き上がり上としていたサリエルの後頭部にシオルダーバッグをヒットさせても氣

にせず、惠美は慌てて千穂がいた場所へと駆け寄る。

どういうわけか、サリエルと違い惠美も鈴乃も結界の境目に拒絶されないのだ。

先ほどまで千穂がいた場所には、やはり誰かがいた痕跡は無い。携帯を聞くと相変わらずこの場所だけが圏外だが、マグロナルドの中を見ると、当たり前のようにクルーが働き、客が食事をしているだけだ。

「どういうこと!? ただの結界なのに、どうして人が消えるの!？」

「わ、分からん! 結界なら魔王も千穂殿も見えなくなっただけで、ここにいるはずなのに……いい、いや、そもそも結界なら我々がこうして境目を自由に行き来できるのもおかしい!」

「これはただの結界ではない!」

地面に這いつくばったまま叫ぶサリエルを、幡ヶ谷駅に向かう会社帰りのサラリーマンたちが、不審な目つきで遠巻きにしながら歩いていく。

「次元移相結界だ! 東京都庁の上で僕が使っただろう!」

「次元、移相?」

惠美と千穂がサリエルに誘拐された際、サリエルが東京都庁全体を結界で包み込んだのを鈴乃も見ている。

だが、真奥のそれと違い、サリエルの結界は明確な境目を持たず、都庁の全てはそのままに、周辺にいる人間だけを忽然と消して見せたのだ。

「ば、僕はよもや、僕を天界に帰還させるために障害となる女神を抹消しようとする天界の陰謀かと思ひ、女神をお救いせんと……」

サリエルの目覚めの寝言を途中からシャットアウトした恵美と鈴乃は思わず背併せになって周囲を警戒する。

見えないだけで、この場にいろのだ。

「私達の……敵が」

※

マグロナルドも、轡ヶ谷の街並みも、自分が支えるデュラハン武号も全てがそのままだ。

だが、音が消えた。人の気配が消えた。

涙に濡れた瞳で自分の心の中に十足で踏み入ろうとした恵美が、消えた。

真奥の動悸は激しかったが、今の動揺は、目の前の奇怪な状態に驚いたわけではない。恵美の一言に、情けなくも自分の心を揺さぶられてしまったのだ。

手には暑さとは違う理由の汗をかき、頭に上る血はそのまま角に変化しそうなほどに負の力に溢れている。

「今な、俺、判断に迷ってるんだ」

「……」

「けーっこう大事な話してたんだわ。でも、俺ちよつと頭に血が上りそうになって、迂闊な
こと言っちゃもう可能性もあつたわけだ」

真奥はデュラハン武号のスタンドをおろすと、ハンドルから手を離す。

「まー確かに失言は回避したかもしれないねえけど、俺としちや言われっぱなしなわけで、結果として今の俺はすっぱえ消化不良な気分なんだよ」

真奥は冷や汗をかく額をTシャツの袖で拭くと、車道の真ん中でこちらを見ている者を振り返った。

「何者だ。簡潔に自己紹介と自己アピールを終えて、気が済んだら失せろ。消化不良分、吐き出すぞ」

そこには、二つの人影。

両方とも、真奥の見覚えのない「人間」だ。

片方は、暑苦しいスーツ姿の青年だった。七三分けされた油光りする髪は、今時の若者ならまず使わないボマードによるものだろう。これまた若者らしくない銀縁の大きな眼鏡をかけているが、真奥の場所からも度が入っていないことが分かる伊達メガネだった。

スーツの生地は妙に明るい紺色で洗練された印象は無く、黒くシンブルな革のビジネスバッグと相まって、時代を四十年間違えた典型的日本人サラリーマン、といった風情。

それでもまだこちらはいい。もう一人は、四十年どころではない。

軽く二百年は時代を間違えている、全身甲冑姿の鎧武者。しかも子供だ。

漆原や鈴乃のように小柄な大人、ではない。

肩や足の骨格、頭と肉体のバランスが、完全に子供のそれなのだ。

それなのに全身真つ赤な甲冑に身を包み、般若の形相の仮面まで被る念の入れようである。

暑そうだし重そうだし、前も見えなさそうだし。

「揃って暑苦しいツラと格好しやがって。天使か、悪魔か、東西南北の大陸のどっかか」

「あまり、驚かれないのですね」

昭和スーツが口を開いた。

「驚いたさ。お前らの仮装にな。合格点もらえたのか？ あの仮装番組に出てた連中のほうが、

もちっと好意的に評価できるがな」

夏休みスペシャルと称して放映していた、素人の仮装を楽しむ伝統番組にかこつけて皮肉を

言う真奥。

「怪しまれることはなかったと自負しております」

「お前はな。だが、そっちのガキはそうはいかなかったんじゃないか？」

「我らも、常に行動を共にしてはおりませんもので」

先ほどから、スーツ姿は真奥に慇懃な敬語を使ってくる。

初対面にしても仰々しいその言葉遣いから、真奥はスーツ姿の方を睨む。

「悪魔だな」

「直接お目通りするのは初めてにございます、魔王サタン様。我が名はファーファレルロ。マレブランケ頭領格の末席を与る者でございます」

「やっぱか」

銚子の海で襲ってきた頭領格のチリアットと同格の強大な悪魔。だが、真奥はマラコーダ配下の頭領格の名を一通り知っているはずだが、その名に聞き覚えが無かった。

「ファーファレルロ……悪いな。聞いたことない」

ファーファレルロと名乗ったスーツ姿の悪魔は、特に気を悪くした様子もなく答えた。

「当然にございます。私が頭領格になりましたのは、魔王様が軍を率い、エンテ・イスラに親征された後のことにござりますれば」

「なるほどな。じゃあそっちの五月人形、お前は何者だ？」

「この者のことは捨て置きください。エンテ・イスラからの水先案内人にござりますれば、魔王様が気にされるほどの者では……」

「誰だって聞いてんだよ。お前じゃなくてそのガキに」

ファーファレルロの口上を遮り、真奥は鉋兜の子供を睨む。

「……イルオーン」

赤い甲冑の隙間からは、意外にも素直に真奥の問いに答え名乗った少年の声が漏れた。

「イルオーン。人間か、悪魔か、天使か」

「……人間」

「なんで悪魔と一緒に行動している」

「……命令」

「そうか」

真奥はとりあえず、イルオーンと名乗った甲冑少年への追及をやめる。

今初めて出会った少年の行く末を案じても仕方がないし、イルオーン少年が命令をどう思っているかも、その命令の裏の効果も、今の真奥には察することはできない。

「で、仮装した悪魔とガキが、俺になんの用だ。ファーファレルロつつたな。魔力を感じないが、俺達と同じで人間に身を落としたのか？」

「左様にございます。チリアットらがこの国への侵入に失敗した原因の一つは、この国に馴染まぬ我らの姿形であると結論づけられました。それに」

ファーファレルロは眼鏡の奥で、幡ヶ谷の街並みを見回す。

「この国に無用な危害を与えることを禁ずると、バーバリッティアの命にござりますれば」

「ほお、マレブランケの連中は、結構血の気が多い奴らだと思ってたが」

「仰る通り、頭領格らは皆その必要があるのかと疑問を抱きましたが、そうするようバーバ

リッティアに進言した者の説得に従った形となります。魔王サタン様はこの国に格別の思い入れがあり、迂闊に破壊行為に及べば、行為者を許さないだろうと」

真奥は鼻を歪めて吐き捨てた。

「オルバか」

「御意」

真奥の心中を行動で知っていて、今エンテ・イスラに戻っている者と言えば、エメラダとアルバートとオルバしか有り得ない。そしてエメラダとアルバートが、恵美を裏切る勢力に与するはずがない。

「随分素直だな」

「魔王様に尋ねられましたことに對し、全て包み隠さず答えよと命が下っております」

「正直なのはいいことだ。じゃあ、本題に入ろうか」

真奥は目を細めて、ファーフアレルロを睨んだ。

「なんの用だ」

ファーフアレルロの答えは、カミーオが銃子に現れ、バーバリッティアが魔界を割って出たと聞いたときから、いつかは起こるだろうと予想だけはしていた内容だった。

暑苦しいスーツの生地を軋ませてその場に跪く。

「魔王サタン様の御無事をお喜び申し上げると同時に、我らマレブランケ、身命を賭して、エ

ンテ・イスラ再侵略の橋頭保の確保に成功致しました。ついでには魔王サタン様に再び我らをおみち」

「やーなこった」

「びきいただきたく私めと共に帰還してはあ？」

真奥が放った言葉が耳に入っても、口上が止まらなかったファーフアレルロ。途中まで流れでそのまま言い続け、脳がようやく真奥の返事を理解した途端、間拔けな声で顔を上げる。

「はあ？　じゃねえよ。やなこった。断る、却下。帰れ」

「わ、私の日本語の語彙が不足しているのでしょうか……魔王様、まさか、今、断ると……」

「そう言っただろ。そっちの不気味なガキ連れてさっさと帰れ」

「……………」

不気味なガキは、求められなければ言葉を発しないのか、黙ったまま。表情も窺えないから何を考えているのかも分からない。

「な、何故にございますか？　東大陸の統一蒼帝は我らに恭順を誓いました。魔王様ご自身も、世界制覇の大望を未だ諦めておられぬと聞き及びます。それどころか、いずれはこの国すら膝下に置かんとしておられると」

「そうだよ」

「ならば、ご帰参いただき我らを手足としてお使いくださりませ！　魔王様の大望、我らマレ

ブランケが全力で補佐し奉ります故―」

「あつそ」

「……あ、よもや、聖剣の勇者が近くにいるということを案じておられるのでは……」

「近くっていうか今もその辺にいるぞ。別にあいづは関係……なくはないけど、気にするほどじゃねえよ」

「で、では……」

「ではなんだよ。この国じゃ、仏だつてお手付きは三回しか許しちやくれねえぞ。俺に三度目は無い。断る。帰れ」

「な、何故でございますか！ 魔王様!! 理由をお聞かせくださりませ!!」

ファーフアレルロは蒼白になった顔で真奥を見上げる。

真奥はそんなことも分らないのかと顔を歪めて、言った。

「お前は、俺が……この魔王サタンが、他人の禪で相撲を取って昇り詰めた横綱で喜ぶような、器の小せえ奴に見えんのか」

「……………」

ファーフアレルロは、二十歳そこそこの青年にしか見えない真奥の威圧感に、思わず生唾を飲み込み、そして、

「お、恐れながら、魔王様」

「あ？」

「た……「タニンノフンドシ」とは、どのような意味でしょうか……？」

そんな的外れな質問を飛ばしてきた。

「おいっ!!」

想像の埒外の反応に、真奥は思わず脱力してしまう。

「お、お前日本語勉強してんだろうが！」

「恥ずかしながら、比喩表現や諺の類いまでカバーする時間がございませんで……」

「敬語使えるのにおかしいだろ！ ええっとつまりだな、纏ってのは下着の一種で、日本の伝統的な格闘技の相撲では褌しか身につけちゃいけないんだよ」

「そのフンドシを破壊すれば、勝利ですか」

「壊すな！ そんなことしたら相撲中継消滅するわ！ それ着て……着るってのもおかしいけど、試合に臨むだけだよ！ 要するに他人の鎧じゃ戦えないってことだよ！」

「なるほど。フンドシなる防具を着て、戦いに臨むことを、取る、と表現するということは、試合の中でお互い「スモウ」なる何物かを取り合う戦いなのですね？」

「耳で聞くとそれほど間違っていないように聞こえるが、お前の頭の中では盛大な勘違いが起きている気がするぞ……っていうか、なんでボケに失敗して自分のネタ説明してる痛い芸人みたいなことしてんだよ俺は!!」

「真奥さん！ お相撲さんがつけてるのは禪じゃなくてマワシですー」

「え？ あ、そうか、マワシだったー え？ じゃあなんで他人の「禪」なんだ？」

「な、何者だ貴様っ!?」

「昔は禪だったらしいですよ!? 私は真奥さんの……え、えっと……なんだろう、その、こ、こ、後輩ですー」

「そうだ、この子は俺の職場のこうは……えええええ??」

フンドシ談議のおかげで折角の決め台詞も、深刻な空気も何もかも吹き飛んだ心の荒野に、
「ち、ちーちゃん!? な、なんでここに!?」

今の今まで真奥も視認すらしていなかった千穂が、当たり前のように降って湧いたのだ。

ファーファレルロもイルオーンも、新たな存在の出現に警戒心を抱いているようだが、真奥は真奥で混乱していた。

ファーファレルロが真奥と日本を切り離すためになんらかの結界術を使ったのは間違いない、真奥は恵美も鈴乃も、当然千穂も、その術の範囲外にいることを最初から確認している。

だが、こうして千穂はなんの前触れもなく現れた。

恵美や鈴乃が破ったのなら、全員で雪崩れ込んできそうなものだがそうならないということは、信じがたいことだが、千穂一人でなんらかの手段で結界を破ったのだ。

全員の度肝を抜いて魂喪と戦場に躍り出た千穂は、目の前の得体の知れない二人組に向かっ

て、多少声を震わせながらも宣言する。

「ま、真奥さんをエンテ・イスラに連れ帰るなんてダメです！ 真奥さんはまだまだ日本でや
らなきゃいけないことがわっ！」

「ち、ちーちゃんいいから！ ちよ、ちよっと下がれ！」

そのままだ体当たりでもしかねない勢いの千穂を、真奥は思わず引き寄せて背後にかばう。
今は人間の姿に身をやつしてゐるファーフアレロだが、マレブランケである以上どんな裏が
あるか分からない。

イルオーンも、見た目の異常さもさることながら、マレブランケの頭領格が「水先案内人」
と称するからにはただの子供と侮れない力を持つてゐるはずである。

「何故、その人間をかばわれるのですか」

ファーフアレロの目に暗い炎が灯る。真奥は、危険を感じた。

「何故も何もねえよ。お前だってそのイルオーンでガキとつるんでんだろうが」

「心外にございます。我らがこのイルオーンを使役しているのであつて、対等な関係にあるわ
けではございません」

ファーフアレロの物言いに、イルオーンはなんの反応も示さない。

「魔王様、その者の申すことは、真にございますか」

「何がだよ」

「その娘、『この日本でやらないことが』とそう申しましたな。この日本なる国で、魔王様は何をしておいでなのですか。一度は強大な魔力をその身に取り戻されたと聞き及び、我ら、この国にも魔王様の版図が広がっているものと、秘かに心躍る思いでございましたのに」

ファーフアレルロは、真奥の全身を頭からつま先まで眺める。

「斯様に威厳の無いお召し物で、人間の少女を背後にかばわなければならぬ、魔王様の『やらないといけないこと』とはなんなのですか」

「……」

ユニシロに謝れ！ と全力で言いたい真奥だが、さすがに空気がそれを許さなかった。

「恐れながら、マレブランケの中には魔王様の世界征服の意志が奏えたのではないかと暗に噂する者も少なくありません。特にチリアットが東大陸に帰還せず、それでいてこの国に魔王様のお力がわずかも及んでいない有様を見ますに、私のとても及びのつかぬ長大な計画の途上にあられるのか……それとも……」

ファーフアレルロの目は、真奥ではなく、真奥にかばわれた千穂に向けられていた。

「魔王様は、我ら悪魔を……魔界を見捨て給うたのか……」

その瞬間の、真奥の気迫の変化は劇的だった。

「フザけるな！」

腹の底からの怒号が発せられ、かばわれた千穂がびくりと震える。

「俺は……俺はいつだって、魔界の、俺を王と慕^よつてついてきてくれた連中のことを忘れたりなんかしねえ!!」

「ならば!」

「ならばじゃねえ! 俺への忠誠を失っていないと言うなら、何故^{なぜ}カミーオの下^{もと}で俺の帰還を待たなかった!!」

「……っ」

今度は、ファーフアレルロが黙^{もく}る番^{ばん}だった。

「パーバリッティアが魔界を割^きつて出たのは、オルバのクソ野郎に扇動^{せんどう}されたからだってな? 俺は、エンテ・イスラ進軍後の魔界の政務をカミーオに一任^{いちにん}した。言うなれば奴^{やつ}が魔王代理だ! その魔王代理に従^{したが}わなかった貴様^{あなた}らを、何故^{なぜ}信じられる!」

「さりながら! 大勢の魔王軍将兵^{しやうへい}が魔界からエンテ・イスラに降りたとして、魔界の窮状^{きゆうじやう}が解決したわけではございませぬ! 真に魔王様^{まおうさま}がお討^うち死^しにされたのならば、第二第三の軍を送るは急務^{きふ}にして必定^{ひつじやう}にございます! カミーオ様^{さま}にはその気概^{きがい}があられませなんだ!」

「気概^{きがい}だと!? 最強の四天王大元帥^{だいげんすい}率^{りつ}いる精兵^{しやうへい}軍団^{ぐんだん}が、勇者というイレギュラーがあつたにせよ三年も持たなかったんだぞ! それを覆^{くつがへ}せるほどの企圖^{きとく}が貴様^{あなた}らにあつたのか!」

「覆^{かた}すこと能^{あた}わずとも!!」

ファーフアレルロは鋭^{えい}く反論^{はんろん}した。

「その命の数だけ……魔界は、生き長らえまする」

「……えっ？」

真奥の耳は、疑問を抱いた背後の千穂の声を聞き逃さなかった。

だが、今は目の前のファーフアレルロだ。

「それが浅はかだと言うんだ!! そうやって、小出しにエンテ・イスラに戦士が流出していずれどうなる!? その全てが順に死んでゆけば、魔界は結局緩慢な死を辿るんだ!」

「それを憂いての、第二次魔王軍にございますー 我らマレブランケ、魔界を離反せども魔界を思う気持ちに変わりはございませぬ。オルバなる者、第一次魔王軍を壊滅せしめた勇者の一味の一人なれど、話の分からぬ者にはございませぬ。いざとなれば必要だけ知恵と情報を搾り取って抹殺することも容易いこと! 何卒、帰還して王の役目を果たさせ!」

「その考え方そのものが間違いだと言っている!!」

真奥はファーフアレルロの言葉をそれ以上の語気で弾き飛ばした。

「あの血と暴力が支配していた世界を救うには、それだけじゃダメなんだ! 俺達が、悪魔が悪魔として生きていくためには! それが分かっていたからルシフェルも、マラコーダも、アドラメレクもアルシエルも支配を維持できなかった、俺すら負けた!」

「此度は違います。我らはエンテ・イスラ東大陸を膝下に置き、人間同士を相争わせ、再び全土に血と混乱を振りまき我らの楽土を……」

「愚か者っ!!」

真奥の声に、力が籠った。

「っ—」

「きゃっ—」

「……………」

ファーフアレロが氣圧されたように口を嚙み、背後の千穂が悲鳴を上げ、今まで棟立ちだったイルオーンが初めて身構えた。

声の氣迫、それだけで、真奥はマレブランケの頭領格を黙らせる。

それは、ユニシロに身を包んで尚失われない、王者の威風であった。

「その結果が、これだ!!」

真奥は自分の身を広げる。

「『世界征服』の意味すら分からず、徒に血と惨劇を振りまき、魔界の版図を拡大することしか頭に無かった王の末路だ! 今俺が貴様らの元に帰って、用意された道が以前と同じ破滅の道なら、俺は再び民を殺した最悪の魔王として今度こそ新たな勇者に討たれ、魔界は滅ぶしかない! かつてのように魔界の民同士で争い、空も大地も海も、己の血で赤く染め上げる世界に還るだけだ!」

「……何故……何故お分かりくだらないのか、我らは決して、前の轍を踏みはいたしませ

ぬ！」

「前の轡わだちを避けただけで違う道を行った気になってるお前らには何度だって言つてやる！ 地図をいくら書き換えたって現実の道は変わらぬえー！ 道そのものを変える覚悟が無きや、世界なんて変わるわけねえんだ!!」

「真奥さん……」

「……道、そのものを変える……?」

真奥の言葉に反応したのは、千穂と、そしてイルオーンだった。

未だ諦あきらめたままのファーファレルロだったが、その目には、真奥の言葉が心の奥まで届いてないことがありありと分かる失望の光が見え隠れしていた。

「もう一度だけ言う。オルバが何を言おうと耳を貸すな。東大陸から引き揚げ、魔界に帰参しろ。チリアットが貴様らの窓口になってくれる。カミーオも貴様らを処罰はしない」

「……これまでのようにございますな」

ゆらりと、ファーファレルロが立ち上がる。

「オルバに聞かされたときには、まさかと思いましたが、魔王様はこの国にはだされ牙きばを抜かれてしまったと……こうして御前にてその真実を理解せねばならぬわが身の苦しさ、お分かりただけませぬでしょうな」

「なんだと……」

ファーフアレルロからゆらりと殺氣が放たれ、真奥は身構え千穂をより深く背でかばう。

「よもやそれが真実で、魔王様に世界征服の意志を復活させること能わねば……」

「……なんだ？ 俺を殺してバーバリッティアが新たな魔王を名乗るつもりか？」

「いえ、魔王様は人間に身をやつし、心の在りようが変わってしまったものと推測されます。それゆえ、魔界の力をその身に復活せしめれば、お心もかつてのように猛きものに戻るかと」
言うなりファーフアレルロは、隣にいたイルオーンの頭の兜をわし掴みにした。

「!?」

すると兜と仮面が闇のように凝縮し、黒い球体の形になった。

「これをお納めください。そして、願わくばかつての誇り高き魔王サタンのお姿とお心を取り戻されますよう」

黒い球体を真奥目がけて放るファーフアレルロ。真奥はそれを払いのけて地面に落とす。
ゴムボール程度の大きさのそれは街路樹の脇に転がり、そして止まった。

「……」

兜と仮面が消滅したことで、初めてイルオーンの顔が晒された。

やはりイルオーンは少年だった。まだ十歳にはならないだろう。あどけないと表現してよいその顔はしかし、表情というものが一切無かった。

真奥を見ているはずの赤い瞳は、それでいて真奥の視線と交わらない。

「……？」

だが、真奥は、どこかでイルオーンの顔を見たことがあるような気がしていた。

「何か……誰かに似てるような……」

それは千穂も同じようだ。真奥の体の陰から顔だけ覗かせるようにして、イルオーンの顔を見つめている。

艶めいた黒い髪に、瞳と同じ色の赤い髪が一房だけさがっていた。

「おい、これは」

真奥は地面に転がった、イルオーンの兜だったものを目で示す。

「擬態させた魔力にございます。この国には主食となる穀物を丸め固めて食す習慣があるはず。鎧兜に擬態しているよりは、幾分かまかせられるでしょう」

「お、おにぎりのつもりなんですか……というか、魔力が、主食？」

千穂の眩きを聞きながら、真奥はフーフアレルロから目を離さない。

「お前、地面に落ちたものを王に食わせるつもりか」

「非常事態にございます。それに魔力を取り戻すこと自体を、魔王様とて拒むことではございませんまい」

「……」

魔力の擬態、ということとは、イルオーンが身に纏う全てがそうなのだろうか。

ファーフアレロが人間の姿をしているのも、自分の魔力を限界まで抽出して、イルオーンの衣類として擬態させているのだろう。

となれば、いざとなればファーフアレロは、即座にイルオーンに預けてある魔力を解放して悪魔に戻れるということだ。

チリアットもそうだったが、ファーフアレロもまた、この日本で魔力を保持する能力を有している。

イルオーンという少年は、その事実に関係しているのだろうか。

「……いいだろう、預かっておく。だが、俺の気持ちは変わらんぞ」

「預かる？ 何を仰います。是非この場でお召し上がりください。久しく魔界の純粋な魔力には触れておられなかったのでしょうか？」

「……家に帰って、洗ってから食うよ」

「ここで、というわけには参りませぬか。お気に召さなければ後々私を斬るなり、如何様にも罰してくださいませ」

「何故だ、何故そこまで急ぐ」

「……」

「一年以上、俺は生死不明だったんだ。今更一日二日待って、何が困るんだ」

「それは……」

「!?」
 ファーフアレルロが露骨に顔を曇め、それでも何かを言おうとおもむろに口を開いたとき、

突然イルオーンが空を見上げた。

「破れる」

「むっ？」

イルオーンの言葉に、ファーフアレルロが身構え、真奥も千穂も思わず空を見上げた。

「な、なんだ？」

空に、ヒビが入っていた。

何も無い空に一直線にヒビが入り、四人が見上げている間にもそれはどんどん大きくなり、
 そして、

「天衝光牙!!」

裂帛の気合いと共に、黄金の稲妻が真奥とファーフアレルロの間に落ちた。

「え、恵美!?」

「遊佐さん!!」

それは緋色の瞳を見開き蒼銀の髪をたなびかせ、輝く聖剣を携える遊佐恵美、勇者エミリア
 だった。

進化聖剣・片翼からは、鋭い聖法気が放射され、今まで「光る強い剣」程度の認識でそ

れを見ていた千穂は、仮にも聖法氣を操る身になって、初めて聖剣に内包される力と恵美自身の力が、自分が想像していた以上の途方もない次元にあることを感じ取った。

これが夕方恵美と鈴乃が言っていた、存在の圧力を感じる、ということか。

空に開いた結界の穴から大槌を構えた鈴乃も降りてきて、真奥と千穂を守るようにフーフアレルロとイルオーンに對峙する。

「え、恵美、鈴乃！」

「……二人とも、無事だったわね」

エミリアは相変わらず真奥の顔を見ようとはしないが、それでも背中越しにかけられる声には、かすかな安堵が混じっていた。

「エミリアー、ベルー！ 結界を作っているのは、子供の方だ!!」

更に上から降ってきた声に、真奥は信じられない思いで頭上を振り仰いだ。

なんと、サリエルだ。

サリエルが翼を広げ、瞳を紫色に光らせて、結界に穴を開けているのだ。

「お、お前ら、こんな町中で……」

真奥は遠慮会釈なく色々なものを有り得ない色で光らせているエミリアとサリエル、非常識な武器を振り回している鈴乃に思わずそう言ったが、

「今夜は月夜だ。サリエル様の力が最大限になる日。この結界のさらに上に、次元移相の結界

を破せた。今この結界を破っても、外の人間には携帯の電波が復活する程度の変化しか起こらない」

鈴乃が振り向いて、ちらりと空の穴に視線を飛ばす。

「……こっちから売った喧嘩の最中に消えられるんだもの、消化不良もいいところだわ」

エミリアは相変わらず不満そうな声色。

そういえば、結界に捕われるまでは恵美と言い争いをしていたんだった。ファーフアレロとの舌戦が激しすぎて、そのことを完全に失念していた真奥。

「いいわよ、深く考えなくて。この結界砕くのに大暴れしたから、なんかスッキリしたわ」
「なんだそりゃ」

勝手すぎるエミリアの言い方だが、むしろ今までの彼女らしくてつい笑ってしまう真奥。

「で……私達の子想が正しければ、あなた達は東大陸へ魔王を連れ帰るために遣わされた、マレブランケの使いつてところかしら」

「何者だ？ 何故、それを知っている」

スーツに眼鏡姿のファーフアレロは、イルオーンの甲冑に手を当てながら、身構えてエミリアを誰何する。

「あら、私を見たことないの？ あなた、悪魔でしょ？」

エミリアの嫌味たっぷりの自己紹介に、ファーフアレロの眉が逆立った。

「き、貴様まさかっ!!」

「私は、人間の世界で悪魔が大手を振るって歩くことを許すほど心が広くないの。勇者エミリア・ユステイーナの名、その胸に刻んで死になさい!」

「くっ! な、なんということだ!」

ファーフアレロはイルオーンの鎧を魔力化しようと動くが、神速の動きのエミリアがそれを見逃すはずがない。

軽い足音がしたと思ったら、次の瞬間、エミリアはファーフアレロのみぞおちに深く拳を突き刺したのだ。

魔力を落として人間に身をやつしていたファーフアレロはたまらず地面を舐め、その背にエミリアの靴のヒールが突き刺さる。

「ぐおっ!」

「日本で見たことを全て忘れて、魔界に帰って大人しく余生を過ごすなら見逃してあげてもいいわ。でも、ちよつとでも余計なことをしようとしたら、この場でその首落とすわよ!」

「相変わらず勇者の言うことじやねえなあ……!」

真奥は恐る恐る眩き、目だけで振り返ったエミリアの緋色の視線に射すくめられて黙る。

一方の、ファーフアレロの返事は、一言だった。

「イルオーン!!」

「!?」

ファーフアレロの呼びかけに、イルオーンは即座に動いた。

エミリアに向かって無造作に体当たりを仕掛けようとしたのだ。

「と、止まれっ」

それを横から止めようとした鈴乃が、

「!?」

弾き飛ばされて宙に舞った。

「鈴乃さんっ!!」

十歳にも満たないような少年とエミリアの間に割って入った鈴乃は、車に撥ねられたような勢いでイルオーンを数瞬も止めることができずに弾き飛ばされた。

「ぬっ……ぐおっ」

鈴乃はなんとか空中で体勢を立て直すか、着地の衝撃に耐えきれずうずくまってしまう。

「な、何っ!?」

イルオーンはそのままエミリアに向かって突進する。

天兵連隊すら屠る一流の戦士のはずの鈴乃が、油断していたとはいえあつさり吹き飛ばされた姿にはエミリアも動揺した。

とはいえファーフアレロを押さえた足を外すわけにもいかず、エミリアは破邪の衣のシー

ルドを起動させ、鈴乃を吹き飛ばした衝撃に備える。

イルオーンは眉一つ動かさず、エミリアのシールドに向かって一直線に走り込みをして、
「がっ!!」

エミリアをすら、ファーフアレルロの上から吹き飛ばし、たたらを踏ませる。

勇者として変身し、進化聖剣・片翼と破邪の衣を全開で展開したエミリアである。鈴乃が吹き飛ばされたのを見て、油断も無かった。

体にびりびりと衝撃が走り、エミリアは思わず防御反応で、イルオーンに向けて聖剣を振るってしまふ。

今度こそ、誰もが予想だにしないことが起こった。

「なっ!!」

イルオーンの腕が、聖剣の刃を受け止めたのだ。

ファーフアレルロが擬態させた鎧が、ではない。聖剣の刃は、鎧の手甲と、その下に着用しているらしい布製の袖を苦もなく切り裂いていた。

だが、更にその下の地肌が、聖剣の刃相手に傷一つついていないのだ。

「イルオーン!？」

そのとき、エミリアの頭の中に、エミリアのものではない声が響く。

「ままー イルオーン! だめ! たたかっちゃだめ! イルオーンめってしないで!」

「え？ え？」

アラス・ラムスの抗議は、予想外の形で現れた。

「ちょ、ちよっと!? 何をするの!?」

エミリアの意志を無視して、聖剣が勝手に消滅してしまったのだ。

「イルオーン、めってしないで！ おねがい！」

「ど、ど、どういふこと!?」

サリエルと戦ったときを除けば、エミリアの意志を無視して聖剣が自律的に消滅するなど今まで例が無い。

「っ！ アラス・ラムス!?」

すると、まるでエミリアの頭の中の声が聞こえたかのように、イルオーンがエミリアから大きく距離を取った。

それどころか今、イルオーンは、エミリアの聖剣に宿る赤子の名前を呼んだではないか。

「あなた……一体……?」

「ええい、何をちんたらやってる！」

そのとき、更に頭上から下りてきた声があった。サリエルだ。

「墮天の邪眼光。――」

しびれを切らしたのか、サリエルがイルオーン目がけて、聖法気を消失させる力を持つ墮天

の邪眼光を放ったのだ。

「ぬっ!!」

正面から邪眼光を食らったイルオーンはその場で膝をつく。

だが、魔力の鎧を纏っているせいか、エミリアが食らったときよりも効果は低いように見えた。

それでもイルオーンは真奥や鈴乃、エミリアと対峙したときにも見せなかった憤怒の表情でサリエルを睨みつけている。

「い、イルオーン……ひ、退くぞ……」

「！」

だが横たわるファーファレルロの一言で、イルオーンは顔から憤怒を掻き消した。そしてエミリアから大きく距離を取るよう飛びさるとさっと手を横に払った。

すると、エミリアが突き破った結界が消滅した気配と共に、更に大きなサリエルの結界に包まれる感覚が周囲を包む。

「ま、魔王様……いずれ、お迎えに上がりますぞ」

「ガキに担がれた状態でそんなこと言われてもな」

イルオーンの肩に担がれた状態のファーファレルロはお世辞にも迫力があるとは言えない。じりじりと下がるイルオーンとファーファレルロを見て、傲然と言いつ放ったのはサリエルだ。

った。

「貴様ら、僕の結界から逃げられるとも思つてなぬううううう」

サリエルがどれほどの規模で結界をかけたか知らないが、イルオーンはその境目をあつさりと越えてしまったらしい。

大人一人を担いだ少年とは思えぬ跳躍で、イルオーンはあつという間に真奥達の前から姿を消した。

「……この、役立たず」

「な、なにおう!?」

思わず眩つふやいてしまった真奥だが、反撃するサリエルも若干いふのかんのためらいがあつたあたり、本人もここまで容易たやすく抜けられるとは思つていなかったのだろう。

「とはいえ、一応は助かったわけだから礼は言っておく。鈴乃すずの、大丈夫か？」

「む……ほ、骨に異常は無いが……かなり、効いた」

「よくあれと正面衝突して無事に済んだわね」

エミリアはシールドを構えた胸をさすっている。

それだけ、イルオーンの衝突が響いた証拠だろう。

「それにしても、アラス・ラムス、ダメじゃない、勝手に剣を……え？」

「ど、どうしたんですか？」

エミリアが、頭の中のアラス・ラムスとの会話の中で息を呑んで止まってしまう、不審に思った千穂が尋ねる。

「げぶらって……あの、イルオーンって子が？」

「どうした？」

真奥の問いに、エミリアは驚きを隠しきれない顔で、言った。

「イルオーンは……アラス・ラムスと同じかもしれない」

「え？」

真奥だけではない。

鈴乃も千穂も、そしてサリエルさえも息を呑んだ。

「アラス・ラムスの言葉がはつきりしないから正確なところは分からないけど……」

サリエルの結界で、人っ子一人通らない轡々谷の夜は、夏だというに妙に肌寒い空気をその場の全員に運んだ。

「あの子、イルオーンは……セフィラの一つ、ゲブラーから生まれたそうよ」



魔王と勇者、新たな夢の
一歩を踏み出す

「さあ！ もう一度だ！」

「あ、あの、さ、サリエルさん、すいませんすがにちよつと体力が……」

「何を言う！ 時間は待つてはくれないぞ！ ほらベル！ 電話だ電話！」

「は、はあ……だ、大丈夫なのだろうか……」

「おいこらちよつと待て。ちーちゃんがしんどいって言つてんだろうが。もう二時間ぶっ続けなんだぞ、休憩させろ！」

「黙れ軟弱魔王！ 限界とは自分で決めるものではない！」

「自分で限界を見極められないようじゃ話にならないと思うけど」

「お前の限界の低さに、私はいつも堪忍袋の緒の耐久力の限界が鍛えられているぞ」

「あるしえーる、るしふえるめつてしないで」

「アラス・ラムス、ルシフェルを甘やかさないの」

「ねえ、おかしくないそれ。普通逆じゃない？ 僕がアラス・ラムスに甘やかされてるの？」

「さあ佐々木千穂！ 今一度腹から声を出せ！ 行くぞっ！」

「そ、その前にせめて水を……」

「いい加減にしろこのバカ天使が！ ちーちゃん殺す気か！」

「これが成らねば殺されてしまうかもしれないのだから！ 今の苦勞が明日へと繋がり、そして我が女神の再臨に繋がるのだ！ さーあ張り切つて行こう！」

「別に誰も殺されるなんて言っただろうが！」

「あ、あのサリエル様、やはり少し休憩を挟んだ方が……」

広々とした体育館で、千穂はサリエルによるスバルタ教育にへばる寸前であった。

マグロナルド幡ヶ谷駅前店から歩いて十五分ほど。サリエルのマンションにはほど近い場所に、幡ヶ谷スポーツセンターと呼ばれる施設がある。

陸上競技用の広大なトラックを始め、地下には温水プール、格技場などが設えられ、地域のイベントやスポーツ教室などを開くために市民に有料で開放されている。

真奥達はその中の一番大きな施設。バスケットコートが二面取れるほど広い体育館を、六時間借り切っているのだ。

目的は一つ。千穂に完全な形で概念送受を習得させることである。

「わあああああ……げほっ、うえほっ……」

「仕方ないな！ 十分休憩だ！」

サリエルの無茶振りにもなんとか大声を上げようとした千穂が咽せてしまい、渋々サリエルも休憩を認める。

「短い！ 三十分は休ませろ！」

「黙れ魔王！ お前はここの娘の保護者か何かか!? ああ？」

「今この場においてはそうだ！ 俺にはちーちゃんのを安全を確保する義務がある！」

「二人とも、暑苦しいから言い争いは隔っこでやって頂戴。千穂ちゃん、大丈夫？」

「あ……はっ……げほっ！」

気丈にも笑顔で応えようとするが、やはり晒せてしまう千穂。

「佐々木さん、お疲れ様でした。水とタオルを……」

恵美の横から戸屋がタオルとペットボトルを差し出して、千穂はうめきながらもそれを受け取る。

「いかな、電池が切れそう。エミリア、充電器を貸してくれ」

「はふう……あ……私も充電……げほっ」

一息ついたところで、鈴乃と千穂が携帯電話の充電を始める。

「おら！ 充電は十分じゃ終わらねえだろ！」

「なら、充電が終わるまでは精神統一の基礎訓練を……」

「お前なあっ！」

体育館での概念送受習得訓練を提案したのは、なんとサリエルだった。

千穂の基礎訓練の内容を知ったサリエルは、体育館なら大声を出しても、ある程度暴れてもそれほど不審には思われず、術者同士の距離が取れるので訓練に最適だというのである。

最初真奥は信じなかったが、鈴乃がその訓練は理に通っていると言うので渋々納得はした。

とはいえ季節はまだまだ夏。体育館の中は蒸し風呂に等しく、ただ立っているだけの真奥達

ですら汗をかく。

まして未だ聖法氣の鍛錬が十分でない千穂は集中するためにいちいち大声を張り上げなければならず、運動部所属とはいえ、ただの人間である千穂の疲労は想像を絶する。

サリエルが提案した概念送受の訓練は、携帯電話を使ったイメージ訓練だった。

概念送受の基礎的なイメージは、その名が示す通り概念の送受信である。そしてこの法術最大の肝は「自分が考えることを口を開かず相手に伝えることが実際に可能であると心と体が理解すること」である。

当たり前だが、普通の人間は言葉を喋るか特定の動作をしなければ相手に自分の意志を正確に伝えるのは困難だと魂が理解している。

その理解の壁を打ち壊すのが殊の外難しい。魂に刻まれた固定観念というのは、望んだからといって排除できるものではないからだ。

それ故に、通常の訓練では術者が顔と顔を直接触れ合わせ、頭の中の思いを通わせ合うイメージを植えつけることから始めるのだが、サリエルはそれを携帯電話で代用したのだ。

相手の顔が見えない電話越しの通話は、意外に情報の真意が伝わりにくい。

一方で概念送受の基礎である「特定の相手にリンクして」「姿の見えない遠距離から」「情報を伝えることができる」ということを、誰もが当たり前前の固定観念として受け入れている稀有な概念を内包するのが携帯電話なのだ。

なので、まずは千穂と鈴乃の携帯電話を、通話状態にする。

そして普通の会話での肉声が届かない程度の距離を取り、携帯電話を耳に当ててお互いがリンクしていることを実感しながら、法術を電波に乗せて届けようと言うのだ。

実際恵美は、携帯電話を用いた概念送受でエメラダと連絡を取り合っている。

そして千穂は自主訓練もあって、サリエルも驚くほど聖法氣の活性化を容易に行っている。だが、それを術に昇華させるとなるとまた話は変わってくる。

単純なテレパシーもさることながら、声を術に乗せると言うのも、口で言うほど簡単なことではない。

現にこうして、体内の聖法氣の活性化はうまくいくのに、いざそれを術に出力しようと思うと、体育館の端と端という短い距離で、元々通信が繋がっている携帯電話を介してすら術が発動しないのだ。

「ま、真奥さん、大丈夫です。私、頑張りますから……」

「そら！ 本人がこう言っているんだ！ 人間の向上心を摘み取るものではないぞ魔王。さああとは僕に任せて隅っこで正座して過去の己の行いを懺悔してろ」

「なんでテメエにそこまで言われなきゃなんねえんだよああげぶ!?」

「はいはい、今回はサリエルが正しいから、あなたは余計な口出ししない」

「ばば、ちーねーちゃががんばってるの。めっしちやだめなの」

「い、いや俺はちーちゃんを怒ってるわけじゃ……お、おい襟撫むなノビんだろがっ！」
恵美とアラス・ラムスに引きずられてゆく真奥を見ながら、千穂は大きく息を吸う。
そして、

「あーたーらしいーいあーさがきたー きーばーおのーあーさーだっ！」
突然歌い始めた。

「お？」

「へえ、なるほど」

サリエルと漆原が、感心したように千穂を見る。

「心の解放の仕方は、なんでもいいということか」

「みたいだね。これは素直にビックリした」

歌う千穂の体からは、大声を出しているときと遜色のない聖法気が発現している。

むしろ大声のときよりも、わずかではあるが洗練されている気配すらあった。

「私は教会の讃美歌で訓練したけど……まだ教えてないのよね？」

真奥の襟首を撫んだまま恵美が尋ね、鈴乃は頷くが、

「だが……」

鈴乃は、千穂が独自の発想で歌う訓練に辿り着いたことに感心しつつも、困ったように眉を寄せた。

「何故……ラジオ体操の歌なんだ？」

「あ、鈴乃さん知ってるんですか？」

一番を歌い終った千穂は、意外そうな顔で鈴乃を見た。

「私ができる時間に、MHKでやっている。夏休み特集とかでな」

「私、この歌結構好きなんです。なんにも考えずに明るくなれる歌詞だし、それに、ラジオっていうのが、なんだかこの訓練に合ってる気がして」

「そういうものか。真面目に聞いたことがなかったが」

「新しい朝……か」

引きずられるままの真央がふと眩き、恵美がちらりと横顔を見る。

「その歌って、そこで終わりなのか？」

「二番ありますよ？ ええっと」

千穂は少し記憶を探るようにして、また歌い始める。

奇しくも二時間にわたる発声練習のおかげで、千穂の歌声は美しく体育館に響き渡った。

新しい朝のもと、輝く緑。さわやかに手足伸ばせ、土踏みしめよ。ラジオとともに、健やかな手足。この広い土に伸ばせよ、それ一、二、三。

千穂の快活な歌声がラジオ体操の歌二番を歌い上げる。

「なるほどな、悪くない」

「ですよねー！ 友達はみんなダサイとか恥ずかしいとか言うんですけど……」

真奥の同意が得られて嬉しそうにする千穂。

そんな千穂の顔を見て、恵美も鈴乃も、真奥も芦屋も心が少し重くなる。

千穂は新しい力の獲得を純粹に喜んでいる。

だがそれは真奥側と恵美側の唯一の共通認識とも言える、千穂をエンテ・イスラの荒事に巻き込まない、という不文律が破られる可能性が生まれたからこそこの状況なのだ。

ましてサリエルまで巻き込んで千穂に訓練を施すという状況など、あつてはならなかった。だが、こうなることは真奥と恵美が選んできた道の末のことでもあり、後悔と、心の底から自分達の力になりたいと願う千穂に感謝する気持ち合せめぎ合い、また心が揺らぐ。

ファーフアレルロとイルオーンの二人組と邂逅した夜、サリエルすら交えた話し合いが魔王城で持たれた。

夜も更けた時間に大挙してやってきた招かざる客にさすがの芦屋も肝を潰したが、真奥の命令で顔を顰めながらも全員分のお茶を出す。

芦屋は真奥と千穂には緑茶を水で出した冷茶を淹れるが、それ以外のメンバーには漆原を含め、全員に熱いお茶を淹れるあたり、嫌がらせの度を越えて大元帥の美学が感じられる。

「あ、美味しい」

千穂は冷茶の涼しさを喜ぶが、座は暑さと人口密度の問題で非常に重苦しい空気で満ちていた。何せ、六畳一間に悪魔が二人、大天使が一人、墮天使一人、勇者と聖戦者と女子高生。

陣容と肩書きだけ見れば、ここで宇宙の歴史が決定されていてもおかしくない面々である。体の大きい芦屋など、畳に座れず結局キッチンに立ちっぱなしだった。

状況の整理をする意味も兼ねて、真奥が芦屋と漆原に櫓ヶ谷駅前で起こった事態を簡潔に説明する。

その中で、やはり一番衝撃的だったのは、イルオーンなる少年が、アラス・ラムスとは異なるセフィラから生まれた存在であるらしいということである。

そしてそのイルオーンを悪魔であるファーフレルロが、使役に近い状態で帯同していることが、一同の混乱を深くしていた。

今までイエソドの欠片以外のセフィラがエンテ・イスラを取り巻く事情に関わってきたことは一度も無い。

強いて言うならば海の家大黒屋の主、大黒天祢が「ピナー」という言葉を出したが、天祢は謎の存在でこそあれ、真奥達の周りで暗躍するような存在ではなかった。

故にアラス・ラムスの勘違いではないか、という意見も出たが、

「でも、アラス・ラムスがそんな重要なことを間違うはずがないわ。わざわざ自分の意志で聖

剣を引つ込めたのよ？」

夜も遅く、すっかりおねむのアラス・ラムスを腕に抱えて、惠美は言う。

「それにそんな存在でもなきや、デュランダルだって斬った聖剣の刃を、いくら振りが甘かったからって素手で止められるはずがないわ」

「そうだな。信じたくはないが、イルオーンがセフィラ・ゲブラーだとすれば、先ほどの戦いでも納得できる点はいくつもある……いたた……」

鈴乃はイルオーンに弾き飛ばされた際に捻った肘を押さえながら解説する。

「セフィラ・ゲブラーの対応する数字は『5』。宝石は『ルビー』。鉱石が『鉄』。色は赤で惑星は戦火王の星。神の力を司り、守護天使はカマエルだ。司る鉱石である鉄色の髪に一房だけ赤い筋が入っていたのは、アラス・ラムスの髪と同じ特徴だ」

鉱石の銀と紫色を司るイエソドから生まれたアラス・ラムスは、銀の髪に紫の房を持っている。「アラス・ラムスがこうしているなら、他のセフィラに人格が宿っていてもおかしくない。イルオーンが初めて現れた別種のサンプル、ということになるだろう。問題は……」

「それを、悪魔が使役していた、ということだろうか？」

「そういうことです」

相変わらずサリエルには敬語を外せない鈴乃は、洗々顔き、そしてある重大な事実に気づき、顔面が蒼白になる。

「お、お待ちください……サリエル様は、アラス・ラムスのことを……」

「――」

あまりに自然に輪に入っていたため全員が失念していたが、サリエルはそもそも恵美の聖剣を狙う敵だった。

かつて木崎が抱きかかえる赤ん坊に衝撃を受けつつも、その赤ん坊がイエソドのセフィラから生まれたアラス・ラムスという存在であるとは知らなかったはずだ。

サリエルの顔を見て殺気だったのは真奥と恵美であつたが、サリエルはこけた頬を膨らませながら小さくため息をついた。

「知ってるよ。ちよつと前にガブリエルが店に来て、エミリアの聖剣の回収に失敗したって愚痴ってたから。僕が女神の子と勘違いしたあの赤子、今はエミリアの聖剣と融合しているって聞いたけど？」

そのとき告解を受けた鈴乃も、それ以外の誰も、サリエルにアラス・ラムスについて教えたことはない。

「正直、女神の子でないのならどうだっていい。僕は女神さえいればそれで……あちつーな、なんだこの茶は！ この季節に何考えているんだー」

恵美の聖剣を狙っている天界の一員とは思えないことを言いながら、項垂れたサリエルは、何も考えずに芦屋が出した茶をすすろうとし、その熱さに今頃になって目を白黒させる。

「本当に木崎さんのことしか頭に無いんですね」

手に取っても湯のみの熱さに気づかないほど清々しく痛々しいサリエルの様子に、千穂は思わずそんな感想を漏らす。

どこまで本気なのかは分からないが、イルオーンのことを語る以上、サリエルにアラス・ラムスのことを隠したまま話を進めるのは不可能と判断し、とりあえず真奥も恵美も鈴乃も、警戒して浮かした腰を下ろした。

気を取り直して鈴乃は声を上げる。

「アラス・ラムスとイルオーンが等質なものとするなら、イルオーンもグブラーのセフィラ、またはその欠片から生まれたと考えるのが妥当だ。でも……」

「……少なくとも、僕が天界からこつちに来たときには、グブラーに異常があるなどという話は聞いたことはなかったね」

鈴乃が言おうとしたことをサリエルが俯きながらも引き継いだ。

アラス・ラムスは言うなればイエソドの欠片が砕かれるというイレギュラーから生まれた存在だ。だが、イルオーンまでそうと考えるのはあまりに短絡的である。

「実は天界も一枚噛んでたって話が一番簡単だとは思うがな」

真奥がこともなげに言い、

「ですよね、天使の人たちって……」

千穂は思わず漆原とサリエルを順繰りに見てしまい、

「なんだよ」

「なんだ」

「あ、そ、その、なんでもないです、すいません」

慌てて視線を落とした。

「佐々木さんの仰りたいこと、この芦屋よく分かります。天使を名乗る者、今のところ百パーセントの確率で不埒者ばかりでしたから」

漆原とサリエルに対してなんら遠慮するところのない芦屋がバツサリ斬って捨てた。

「まあ、僕らが言っても説得力は無いとは思うけどさ」

「おいルシフェル！」

「黙ってて。とにかく、天界って言われるとちよっと自信無いけど、でもカマエルって天使個人になってくると、今の話に喰んでるってのは考えにくいんだよね」

「どういうこと？」

恵美の問いに、漆原は答える前に鈴乃を見た。

「カマエル……神の絶対正義。でいいのか？」

「そういうこと」

漆原は頷き、サリエルも否定しなかった。

「ゲブラーの守護天使はカマエル。奴はガブリエルやラゲルなんかと違って、物凄く保守的でカタブツだ。絶対正義を標榜してゐる通り、天界存亡の危機にでもならない限り、ゲブラーを使うところが本人が立ち上がるかどうかも怪しい。まあその分、動いたときの影響は他の連中とは比べものにならないけど、本人もその辺はよく分かっているはずだよ」

「僕もルシフェルと同意見だ。そもそも守護天使達は、そうそう簡単に天界を離れない」「では何故、イルオーンなるものがパーバリツティアどもと行動を共にしているのだ？」

芦屋の問いは、その場の全員の疑問を代弁するものだ。そしてその疑問に、墮天使も大天使も、沈黙で応える。要するに分からない、ということだ。

「あの、芦屋さん」

「なんでしよう？」

芦屋は千穂に声をかけられて、漆原たちに向けるのとは打って変わって柔和な顔を向ける。

「あの、今聞くことじゃないかもしれないかもしれませんが……芦屋さんは、帰りたいとは思わないんですか？ 魔界や、エンテ・イスラに」

千穂の疑問はともすればとんでもない地雷になりかねない。

事実恵美と鈴乃は千穂の突然の質問に色めきだったが、千穂にはある確信があった。

芦屋はエンテ・イスラのマレブランケ達と合流することを、決して良しとしていない。

「勿論本音を言えば帰りたいです。ですが……」

「芦屋はいつになく厳しい顔つきになり、憤慨した様子で腕を組んだ。」

「魔王様の命に背き、魔界の民を混乱させ、東大陸で私が作り上げた支配の土壌を我が物顔で横から渡っていった薄汚いハイエナ共が魔王軍を名乗っていること自体が不愉快です。佐々木さんに言うことではないかもしれませんが、人間に扇動された末であるという一事を取っても、魔王様や私は心穏やかではられません。まして……」

と芦屋は、真奥がファーファレルロから渡された魔力の塊を冷蔵庫から取り出して忌々しげに見る。一応夏場だということもあり、きちんとラップに巻いて冷やしてあるのだ。

「このような下賤の輩の魔力など、頼まれても使いたくはない」

「そう、ですか」

想像していた理由とは少し違ったが、やはり芦屋も、真奥と同じでマレブランケ達の行動を快く思っていないのだ。

これで、真奥と芦屋がファーファレルロの誘いに乗ることがないことだけは確信できた。

「……冷や汗かいたわよ」

「ああ、全くだ」

恵美と鈴乃は顔を見合わせて息を吐くと、目の前の湯飲みに目を向ける。

「……ふん」

「あ、おいー それ俺の飲みかけ……」

鈴乃は湯気のくゆるお茶を素直に飲んだが、恵美は額の汗をハンカチで拭うと、隣の真奥の冷茶のグラスをひたたくつてそれを飲み干した。

「私が熱中症になったら、アラス・ラムスも危ないかもしれないのよ？」

グラスの茶を一気に飲み干してから真奥の方に乱雑に返して寄越す恵美だが、

「い、いや、そういうことじゃなくてその……」

「芦屋さん！」

「は、はいっ？」

真奥を挟んで恵美と反対側に座っていた千穂が、硬い笑顔のままキッチンの芦屋に微笑みかけた。なぜか、芦屋は姿勢を正した。

「遊佐さんにも、冷たいの出してあげてください。お願いします」

「は、し、承知しました」

今度は芦屋と真奥が冷や汗を流す番だった。

「な、なんなの……？」

三人のやりとりに、この一幕を作り出した元凶である恵美は意味が分からず首を傾げるが、

「多分ね、エミリア以外は全員原因が分かっている」

漆原の呆れ果てたような言葉に、ますます眉を蹙める。

そうこうしているうちに芦屋がなぜか千穂の方をちらちら窺いながら、恵美と、真奥にも新

しいグラスを出して、恵美に飲まれたグラスを下げる。

「な、なんなの？」

「氣付かない方がきつと幸せですよ」

千穂はただ、笑顔のまま。その笑顔の奥に、恵美は底知れぬ氣迫を見た氣がした。

「ま、まあともかく、あなた達がバーバリッティアの誘いに乗るつもりがないってことが分かっただけでも、収穫かしらね」

「そーですねー」

恵美は理由が分からないなりになんとか話題を戻そうとしたが、千穂の声がなんだか棒読みなのは氣のせいではない氣がした。

千穂の件はともかく確かに恵美の言う通りではあるのだが、真奥達の意志とファーフアレルロが誘いを諦めることとはまた別の問題である。

「……まあな。でも、ちつとばかり早まったかもしれないねえな」

いつまでも引きずると後で千穂が怖い氣がして、真奥は新しいグラスに注がれた冷茶を煽りながら恵美の言うことを引き取った。

「さつき俺は、思わずちーちゃんをかばっちゃった。ファーフアレルロが馬鹿じゃなければ、ちーちゃんが俺達の関係者だと分かったはずだ。んで、恵美や鈴乃と違って」

「私に戦う力がないことが、バレちゃったかもってことですか？」

「人質にするな。僕だったら」

真奥の言葉は千穂が補足し、サリエルが自分のしたことを顧みずそんなことを言つて、漆原以外の全員が一気に緊張する。

一斉に向けられた非難の瞳を、サリエルは平然と受け止めた。

「だが、効果的だろう？ 実際僕だつてそう思ったからやったんだ」

力の無い千穂と一緒にさらつて恵美から聖剣を奪おうとしたサリエルである。忌々しいが、説得力があると言わざるを得ない。

「でも、思えばどうして千穂ちゃんは、なんにもしてないのにファーフアルロの結界に入り込めたの？」

恵美は千穂に尋ねるが、千穂は首を横に振った。

「分かりません。気づいたらもう、目の前に真奥さん達の姿があつたんです」

「これは想像だが……イルオーンがサリエル様の結界をいとも容易く抜けたのと、関係しているのかもしれない。イルオーンも千穂殿の指輪も、元をたどればセフィラだ」

「『本当に面倒なことを……』」

鈴乃の想像は納得のいくものだったが、それを聞いた瞬間真奥と恵美の表情が思い切り変わった。

「……何よ」

「なんだよ」

思わず睨み合う二人だが、今は言葉被りくらいで喧嘩している場合ではないので、今度も消化不良のまま二人は視線を外し、茶を飲もうとするが、

「……」

二人共既にグラスは空で、同じタイミングで同じごまかし方をした気まづさがありますいたたまれない。

「魔王様、グラスを」

見かねた芦屋が冷茶をボトルから真奥のグラスに注ぎ、恵美の方は勝手に飲めと言わんばかりにカジュアルコタツの上に置いて放置した。

「しかしだ、そうすると、どうなる？」

「どうなるって何が」

「決まっているだろう。千穂殿のことだ」

鈴乃は、真奥と恵美を同時に見ながらなぜか膨れ気味の千穂に視線を移す。

「恐れていた事態だ。ファーフアレルロが千穂殿を我々の『関係者』とみなしたとしたら、我々は千穂殿をどうすればいいんだ？」

「私かあなたが、交代で護衛すればいいんじゃない？」

忌々しげに芦屋を睨みながら、それでも遠慮なく冷茶のボトルを傾けてグラスを満たす恵美

は簡単に考えてそう言うが、鈴乃は首を振る。

「それができないから聞いている」

「え？ どうしてですか？」

これは千穂だ。千穂としても、事ここに至って護衛を遠慮するほど愚かではない。

真奥達悪魔は本来の力を取り戻していない。ならば恵美と鈴乃が千穂を護衛する流れはごく自然なように思えるが……。

「エミリア、どれほど仕事を休める。千穂殿を完全に護衛するならば、絶対に二人以上で事に当たらねば、負けるのはこちらだ」

「あのイルオーンなる輩のことだな」

サリエルの言葉に、鈴乃は頷く。

「そうです。見たところイルオーンの力はファーフアレロと同等か、下手をすればファーフアレロよりも上。それなのにイルオーンはファーフアレロに従っている。しかも、あの結界は魔力ではなく法術による次元移相結界だった。イルオーンに表に出てこられたら、エミリアだけでも私だけでも対処不可能です。何せアラス・ラムスがああ調子では……」

イルオーンの純粋なパワーは常軌を逸して強かった。

考えてみれば、アラス・ラムスですら本気を出せばガブリエルを軽々あしらうほどの力の持ち主なのである。

惠美は聖劍に依存しなくてもアルバート譲りの格闘技や法術戦の心得があるが、それでもセフィラの化身とマレブランケの頭領格を、非戦闘員を守りながら同時に相手することができると言えば、全く問題ないとはとても言えない。

「最悪イルオーンに矢面に立たれたら、アラス・ラムスが妨害に回る可能性もある」

今回アラス・ラムスは、持ち主である惠美の意志に反して聖劍を消滅させてしまった。

妨害は言いすぎにしても、聖劍を当てにはできない、ということになる。

アラス・ラムスと融合した以上、進化聖劍・片翼は惠美の所持品ではなく、人格を持った一つの存在なのだ。

「でもよ、そう考えると、下手したら八方塞がりじゃねえのか？」

真奥がうめくように言った。

「あの結界は、外から簡単に入れる性質のものなのか？」

真奥の問いに、サリエルは腕を組んで答えた。

「はつきり言って術者の気分次第だね。僕が都庁で使ったときには、移相する空間が大きかったのと、外部からの攻撃を防御するよりも中でやっていることを誰かに見られないようにすることに重きを置いたから、あまり境界面を強くしなかった。だから貴様も、すんなり入ってこられただろう？」

「ああ……確かに」

サリエルと鈴乃にさらわれた千穂を助けるために都庁に向かった真奥は、そこに敵がいることが分かった上で突入した。

先ほどの惠美達と違いは明白で、そこに何かあると気づけるか否かが破れるかどうかの境目ということになるのだろう。

概念として現象を理解できるかどうか、にかかっているあたり、術の性能は驚異的だが、法術の原則からは抜け出ていないことになる。

「でも最初、お前らも俺が消えてから突入してくるまで結構時間かったろ？ 万が一ちやんだけ次元移相されちゃったら、その瞬間終わりじゃねえか？」

「……」

重苦しい沈黙が、魔王城を支配する。

「あーあ、核心突いちやったねー……………ご、ごめん」

漆原の軽口も、空気を和らげる役には立たない。というか、もっと重くなった。

「ならば、ここは」

そのとき、場の空気をとりなすように、千穂を指し示したのは芦屋だった。

「当初の予定通り、佐々木さんに自衛の術を習得してもらう以外ないのでは」

「どういうことですか？」

まさか芦屋からそんな提案が起こると思わず、千穂は驚いた。

「そのイルオーンなる者は、エミリアがファーファレルロの首に刃を突きつけても、ファーファレルロに命令されるまでは動かなかったのだろうか？」

「そうだけど……」

頷く惠美に、芦屋は言う。

「イルオーン自身は積極的に我らと敵対する意思が無い。つまり、イルオーンをファーファレルロの武器の一つと考えれば、話は簡単になる」

「イルオーンが、武器？」

「ちよっと、それじゃアラス・ラムスもそういうことに……」

芦屋の論旨に目くじらを立てようとした惠美だが、それを制したのは真奥だった。

「黙ってる。芦屋が話してるのはそういうことじゃねえ」

「……」

惠美がとりあえず黙ったのを見て、芦屋は話を続ける。

「イルオーンが単独で動くことはまずない。遠隔操作されるにしても、必ずイルオーンが見える場所にファーファレルロはいると推測できる」

「何故だ？ イルオーンにも意志がある。厳密に命令を与えれば任務は遂行するだろう。別にそばで見えていなくても……」

鈴乃の疑問を、芦屋は鼻で笑った。

「貴様らには理解できんだろうが、我らが身を人間の姿にやつしているのは、貴様ら人間にとつて裸で往来を歩くに等しいほど耐え難いことなのだ。佐々木さんには、申し訳ないと思ひますが」

「……それがなんだと言ふんだ」

あからさまに人間を侮辱するくせに、千穂に対してだけ予防線を張る芦屋の物言いに不機嫌になる鈴乃だが、芦屋は続ける。

「だがフアーファレルロはそんな人間の姿に身を落としてまで『無関係な日本の民を傷つけない』という命に従っている。それほどに任務に忠実な男が、セフィラなどという強力な武器を、監視も無しに放り出すとは到底思へん」

「例えは腹立つけど、まあ分からなくもないわね」

恵美が頷く。

「反面、使役者の命の危機にも関わらず命令があるまで動かないというのは、対応力が低いとかそれ以前の問題だ。そんなイルオーンが単独行動をして、イレギュラーな事態が発生したら、フアーファレルロの想定を逸脱した行動に出ないとも限らん。ならば確実に、イルオーンはフアーファレルロの行動半径から独立したりはしない」

「な、なるほど」

さすがに司令官としてエンテ・イスラで最も悪魔の支配を長引かせただけのことはある。

「ファーフアレロが、我らのエンテ・イスラ侵攻後に頭領格に上がった、ということにも注目したい。つまりはマレブランケー党の頭領格の中では実戦経験は乏しい部類だ。正面から戦えばエミリアが遅れを取るような相手ではないと思っていだろうか。高性能なロボット兵器も使役者がいなければ自律的な判断は不可能になる」

「つまりイルオーンは無視して、ファーフアレロだけ倒しちゃえばいいってこと？」

「いや、それでは佐々木さんに術を会得していただく意味が無い」

恵美の問いに、芦屋は首を横に振った。

「あ、そうか。芦屋さん、私に術を覚えた方がいいって言ったんですもんね」

芦屋の整然とした説明に、千穂は当初の論旨を忘れてかけていた。

「ファーフアレロだけを殺してしまえば、百パーセント、第二陣が攻めてくる。そうなのはイタチごっこだ。根本的な事態解決にはならない」

「どういうことよ。新人頭領格一人死んだくらいで二陣が来るなら、チリアットと千以上のマレブランケが負けた時点で来ててもよさそうじゃない？」

「愚か者」

「なっ」

恵美の反射的な答えを、芦屋は一刀両断する。

「ファーフアレロを滅してしまうと、イルオーンが単独でこちらに残ることになる。来歴は

不明でも腐ってもセフィラだ。欠片かけらを手に入れただけで、勇者が大天使を一方的に屠ころることでできるようになるセフィラが日本で宙ぶらりんになることを、バーバリッティアが良しとするとは思えん。つまり」

芦屋は部屋に集まる面々を見回しながら言った。

「後顧こうこの憂うれいなきようにするためには、イルオーンごとファーフアレルロに理性的な帰還きかんを促うながすのが一番ということになる」

「それができれば苦労は無い。第一ファーフアレルロを帰せば、千穂殿の情報を持ち帰られてしまう。それこそ第二陣を呼び寄せることになってしまふだろう」

言わずもがなの芦屋の結論の欠点を指摘する鈴乃。だが芦屋は動じない。

「だからこそ、佐々木さんにはできるだけ早く法術ほうじゆつを会得してもらわねばならないんだ。分かんかクレスティア・ベル」

「何？」

「……なるほど、そういうことか」

鈴乃より先に、どうやら真裏まうらの方が芦屋の言うことを理解したらしい。

「でも、結構賭けじゃねえか？ それで納得すっかなあ」

「してもらうしかありません。ですが、最悪のパターンに取り組むのは、最善のパターンを試してみても遅くありません。つまり……」

一足早く理解した真奥まおく以外にも分かるように、芦屋あしやは千穂ちほを見ながら言った。

「魔王様がこの日本で着々と野望を遂行中であり、佐々木ささきさんがその計画にとつて重要な存在であることを彼奴らに分からせればいい。東大陸のマレブランケは、魔王様への忠誠は失っていないのだから、フアーファレルロが納得ずくで帰還すれば、パーバリツティアが我らの邪魔をする確率が減少する」

「それはつまり、千穂ちゃんを悪魔側に引き入れる……つてこと？」

剣呑げんどんな声を上げたのは恵美ゆみだ。

千穂が魔王の仲間である、と公式に認めることが、今回限りで終わる保証は無い。

その事実がエンテ・イスラの人間社会に漏れてしまった場合、今度はエンテ・イスラの人間世界が千穂を敵として扱うことになるかもしれないのだ。

「それで取り返しがつかなくなったらどうするつもり？ 時間がどれほどあるのかも分からないのに」

恵美の言葉に、千穂は思わず顔を上げるが、それよりも早く、芦屋が毅然げんぜんと言い放った。

「先が見えないことを理由に止まることを良しとする生き方をしてこなかったのだ。案ずるより産むが易やすしだ。それに……」

芦屋は恵美と鈴乃すずのを順に見ながら言う。

「エンテ・イスラの人間は、東大陸を侵すマレブランケの言うことと、勇者と教会の訂教審

議員が言うことのどちらを信じる。貴様らが佐々木さんをしっかり守れば、佐々木さんが人間側から敵視されることを防ぐなど造作もないことだろう」

その一言に、惠美も鈴乃もグウの音も出ない。

鈴乃の目標とする最終着陸地点は、教会の網紀南正と勇者エミリアの業績の正当評価、及びエミリアによる魔王軍後の世界の主導だ。

それを為せれば、異世界人である千穂をエンテ・イスラから守ることなど造作もない。

思わず納得してしまった惠美と鈴乃の様子を見て、

「意外とあいつら、詐欺にかかりやすいタイプかもね」

漆原は誰にも聞こえないようにポツリと呟いた。

とにかく芦屋の言う通り、先が分からないからといってぐだぐだと議論ばかりを進めていてもどうしようもない。

目の前のやれること、わずかでも事態の打開に繋がる可能性のあるものを、手当たり次第に動かしていくしかないのだ。

「案ずるよりか……悪魔に言われちゃ、おしまいよね」

惠美の小さな呟きが、全てを決定づける。

「いいだろう。なら、明日から千穂殿に本格的に術の訓練に入ってもらおう。だが、千穂殿に危険が及ぶような結果になったら許さんぞ」

鈴乃が洪々と言つた様子で頷く。

「まあ、何か知らんが頑張つてくれたまえ。僕は帰る」

すると、今まで事態の成り行きを見守つていたサリエルが腰を上げた。

「色々面倒なことになってるようだが、我が女神の身に危険が及ばない限り、僕には関わりのないことだ。邪魔するつもりはないから、精々頑張ればいいさ」

真奥達も、元々サリエルを当てにはしていいないのでそれを止めようとしなかったが、

「あのー」

玄関で靴を履こうとするサリエルを、呼び止める声があつた。

「ん？」

「あの……サリエルさん、お願いします。協力して、もらえませんか？」

千穂だった。

「ちよつと千穂ちゃん？」

「……正氣かい？」

千穂の思わぬ申し出に、恵美は色めき立ちサリエルも怪訝な目つきで千穂を見返す。

「どうして僕が君達のやることに協力してやらなきゃいけないんだ？ もともと敵だし、そうでなくても僕には全く関係のないことだ」

「でも、サリエルさんの目の光は、イルオーンさんを止めましたよね」

「だから何？ セフィラは聖法氣をその身に内包してるから、墮天の邪眼光は確かに有効だけど、それを僕が使えるからって協力する義務も義理も無いよ」

「分かってます。戦ってくれなんて言いません。私が術を学ぶ間だけでいいんです」

「何を言うの千穂ちゃん。それは私とベルが……」

「何かが起こるまでの期間は短いかもしれないけど、悪魔の人たちの動き次第では長いかもしれません。いつまでかかるかも分からないのに、その間ずっと、遊佐さんにお仕事を休ませるわけにいかないです」

急に日常を大事にし始めた千穂に、恵美は驚いてしまう。

「何を言ってるの。今はそんなこと言ってる場合じゃ……」

「場合ですよ。もし今回のことをうまく渡いでも、遊佐さんの来月のお給料が無くなったり、休みすぎてクビになっちゃったりしたらそれこそ申し訳が立たないです」

「気にしすぎだ千穂殿。私には同居人が一人二人増えても問題ないほど十分すぎる蓄えがあるし、万一エミリアがクビになったとしてもエミリアならすぐに次の仕事がある……」

「次の仕事先のお友達まで、エンテ・イスラの事情に巻き込んだらもう手が回らなくなっちゃいますよ」

「！」

鈴乃はテレビを購入したときに真奥に言われたことを思い出して押し黙る。

必要以上に無暗に人間関係を広げることは、今の惠美達には得策ではない。今の真奥も惠美も、一所で人間関係に恵まれ、比較的狭いエリアで人間関係が安定している。

その行動半径や痕跡が広がれば、それだけ「敵」に付け入る隙を与える可能性が広がってしまうのだ。

「で、でもだからって……」

惠美は忌々しげにサリエルを見る。今の今まで忘れていたが、惠美はサリエルに狼藉を働かれ、いたくプライドを傷つけられているのである。

その意味でもサリエルに千穂を預けるなどという選択肢は惠美の中では有り得なかった。もちろん千穂もその現場に居合わせたのだから、惠美の不信はよく分かる。

「もちろん、サリエルさんにだってお仕事はありますからずっと、ってわけじゃないです。でももし遊佐さんや鈴乃さんのカバーに回ってもらえれば……」

だからこそ、千穂はとっておきの秘密兵器を持ち出したのだ。

「すぐって約束はできません。でも、サリエルさんが私達に協力してくれるなら、木崎さんとの仲直りのきっかけ、探してあげます」

「さーあ、充電が済んだかあ！ 行くぞベル！ 向こうの端へ行っただ行っただ」

「はいっ」

「はあ……」

結果がこれである。

そのときのサリエルたるや、直るほどの仲が元からあったかどうかとも怪しいのに、太陽のとき明るい聖法氣を全力で放射して、折角知将らしい演説をぶった声屋を一瞬で昏倒させてしまったほどだ。

「で、昼間っからこのクソ暑い体育館で、ずっとこういうことやってるのね」

仕事を上がつてからやってきた惠美は、訓練の様子を見ながらうんざりした様子で眺めているが、訓練法自体は理に適っているので文句を言う訳にもいかない。

「毎回さつきみてえに俺が休憩させろって言わねエと、ちーちゃんも頑張っちゃうからさ」

「でも……この調子なら、下手したら今日中に術の一つくらい使えるようになったっちゃうんじゃない？ 凄いわよ、千穂ちゃんの活性センス」

「それは褒めるなって、サリエルにも言っている。ちーちゃんが自分で術を開発しちゃおう危険があるからな」

「その判断は正解ね。まあ、そう簡単にできるとも思えないけど」

「ちーねーちやすごー」

アラス・ラムスも、本能で分かっているのだろうか。訓練する千穂から目を離そうとしない

のだ。

「で」

「ん？」

「……仲直りの目はあるの？」

「……知らん」

ある意味、ファーファレルロよりも、イルオーンよりも、全員の心の中で不安が拭い去れない点はそこにあった。

木崎とサリエルの仲直り、と言ったところで、もともと木崎に惚れ込んだサリエルが、毎食マグロナルドで木崎目当てであることを隠そうともせず多額の金を落としていった、ただそれだけの関係だ。

「でも木崎さんも、サリエルを客として扱うことだけは忘れなかったからさ」

真奥は、木崎とサリエルの仲直りとは、サリエルの出入り禁止の解除であると思っている。

それだけならなんとかかなりそうな気がしないでもないが、サリエルがそれで納得してくれるかどうかはまた別問題。

今は表面上真面目にコーチを買って出ているサリエルだが、もし彼の思うような「仲直り」を提供できなかった場合、何が起こるかまるで分からない。

「こんなときに限って、梨香はなんだか頼りにならないしなあ」

「なんでそこに鈴木梨香の話が出てくんだよ」

「復縁ってほどじゃないけど、男女が仲直りするときには大事なこととか、参考程度に聞こうと思つたのよ。彼女、そういうゴシップ話が結構好きでね。でも、ほら、あれ」

恵美は目だけで、千穂の訓練の様子を見守る芦屋の背を示す。

恵美の同僚である鈴木梨香は、恵美達の正体こそ知らないものの、真奥や芦屋、千穂に鈴木とも交流があり、ただいま芦屋に対して絶賛片想い中なのである。

「自分のことが分からんようになった」らしくて、そういうコイバナ的なガールズトークからは身を引くことにしたんですって」

恵美のもう一人の同僚である清水真季には「分からんようになった」原因について今も折にふれて突つつかれてははぐらかすというのが恵美の職場での日常風景になりつつある。

「……お前の方は、それでいいのか」

「何が？」

「あれ」

真奥は同じように芦屋の背中を目で示すと、恵美は肩を竦める。

「ベルから聞いたわよ。私達の人間関係の構築に、偉そうに意見したらしいじゃない」

ぎろりと睨み上げてくる恵美。

「偉そうにしたつもりはねえがな。自分達のこと棚に上げて芦屋から鈴木梨香を引き離そうと」

すんのは不適^{ふてき}だって話はしたかもしれねえ」

「十分偉そうじゃない。こっちの気も知らないで」

「勇者に氣い遣うような生き方してこなかったからな」

睨^{にら}み上げてくる視線から逃げるように肩を竦^{すく}める真奥^{まおく}。

惠美はしばらくそのまま真奥の額^{かき}を見上げていたが、やがてふっと視線をそらした。

「……私も同じよ」

「あ？」

惠美は膝^{ひざ}に額を乗せると、サリエルの指導に息を切らしている千穂^{ちほ}の様子を眺^{なが}めながらぼつりと言った。

「私も「自分のことが分からんようになって」から、人の気持ちにとやかく言う権利なんかないもの」

「……」

今日は随分^{ずいぶん}としおらしい惠美に、真奥はどう答えていいのか分からなかった。

「自分のことが分からんように、か……」

だから惠美の言葉を反芻^{はんそう}して会話をこまかし、惠美から意識を外すようにして改めて千穂達の様子を見る。

「むむう、これだけ活性化が上手にできるのだから、あと一歩という気もするが……」

すると、丁度サリエルが何事かを考え込んで、鈴乃に向けて大声を張り上げていた。

「アプローチを変えるか。ペル！ 今度はそこから送信だー 受信の感覚を掴めば、逆算して体感できるかもしれん」

「分かりましたー」

反対側の端で鈴乃が手を上げて、千穂が意識を集中する。

「とはいえ、何を送ればいいかな」

指示された鈴乃は、しばし黙考する。

「受信から逆算して体感か……そうすると、単なる音の受信より、きちんと会話になりそうな話の方がいいだろうな」

独り言を言いながら、今度は鈴乃側から千穂の携帯電話にコールする。

「千穂殿が流入を分かるくらい内容が具体的、かつ意志を伝える気持ち逆流してくるくらいにこちらも回線を開いておけるワード」

鈴乃側も千穂からの送信をスムーズに受け入れるために、心を開いて聞ける内容が良い。

「……あー」

「どうしたー早くしろペルー！ ラジオ体操の歌が終わるー」

サリエルの呼びかけにも一瞬答えられないほど、鈴乃が至った結論は困った内容だった。

「あー……ごほん」

鈴乃すずのは携帯電話に耳を当てて、必要もないのに、面倒な質問をするときのクセで咳払いせき払いをしてしまう。

視界にある千穂ちほと千穂の携帯電話を意識しながら、鈴乃は自分でも何が恥ちずかしいのかわからないまま、概念送受イデアリントウを送る。こちら側の壁に、真奥達まおくがいなくて本当に良かった。

「千穂殿は魔王とけ……いや、魔王に嫁入りしたかったりするの……」

直接的な言葉を回避したいという羞恥心しゆうしが働き、余計にダイレクトになってしまった送信ワードの効果は、観面くわめんだった。

「(わうううううううううう!!!)」

「かおぐつ!!」

次の瞬間、強烈な感情と狼の遠吠えとんばいのような意志が携帯電話の電波を通じて思い切り鈴乃の脳内に叩き込まれた。

そこに内包された感情とそこからほとばしる音量で、脳震盪のうしんとうを起こしたかと思うほど目の前が真っ暗になり、目を回した鈴乃は携帯電話を取り落としてしまう。

「ちよ、ベル!?」

鈴乃の様子がおかしいことに気づいた恵美けいみが思わず立ち上がる。

千穂を見ると、なぜか顔を真っ赤にして風船のように頬を膨らませながら、過呼吸気味に短い呼吸を繰り返すだけ。

「お、おい惠美、あれ、大丈夫なのか?」

真奥も心配になるほど、鈴乃の反応は目に見えておかしかった。

頭を抱えてうずくまったまま、ぼしぼしと体育館の床を叩いている。時折自分の体やら携帯電話やらも叩きつつ、片方の手は頭に抱えたまま唸っているのだ。

「わ、分かった、わた、わたた私が、私がわわわ悪かった! ちょ、ちょっとおちつ……」

「ちーちゃんっ?」

「あうううう……」

鈴乃がのた打ち回ったと思ったら、今度は千穂が携帯電話を取り落としてその場にへたり込んでしまう。

真奥が慌てて駆け寄り、肩を掴んで呼びかけるが、

「お、おい、ちーちゃんだいじょ……」

そんな真奥と目が合った途端、大きく見開いていた目が更に限界点まで全開になる。

「ままままおまおまおままままおおおううううまままままおうあままあさあ」

千穂は完全にパニックに陥って「ま」を連発し、

「ぬわあああああああああ!!」

鈴乃は「ま」の銃弾に叩かれているように音に合わせて七転八倒し始めた。

「な、なんだこれ? 一体どうなってんだ?」

「ベル！ベルちよつとしつかり！」

千穂も鈴乃もパニック冷めやらぬ中、

「あー……せいっ」

真奥の横からサリエルが千穂の額に手を当てて、

「まままままああ……ふうっ……」

千穂は、真奥の腕の中で失神したように脱力した。

その瞬間、恵美に支えられていた鈴乃も何かから解放されたように、大きく息を吐いて身を起こした。

「ベルはよつぽどとんでもない心の扉をノックしたらしいね」

サリエルは呆れたように千穂を見下ろす。

気絶したかと思われた千穂は、すぐにうつすらと目を開けた。ぼんやりした様子だったが、真奥の顔を認識すると同時に思い切り顔を反らし、誰にも見られない角度で恨めし気に鈴乃を見る。

「一番の壁は、どうやら突破したみたいだな。ベルは、佐々木千穂からの概念送受をきちんと受信していたようだよ」

「!!」

その言葉に、誰よりも千穂が、驚いた。



そしてその言葉を裏付けるように、

「物凄（ものすごい）、大声だった」

鈴乃（すずの）が疲れ切った表情で、そう言ったのだった。

夜の七時を過ぎて体育館の利用時間が終わり、この日の訓練はお開きとなった。

とはいっても、いっどこでファーフアレルロとイルオーンが仕掛けてくるか分からない以上、極力団体行動が望ましいため、運動公園に近い順に帰宅することになる。

「大丈夫か、ちーちゃん」

「だ、だ、だいじょうぶですっー」

偶然とはいえ、初めて術の行使に成功して疲れ切った千穂（ちほ）は、なぜだか異様に真奥（まおく）から距離を取って、運動公園から出て以降ずっと恵美（けみ）の陰に隠れたままだ。

鈴乃（すずの）も最初は足元（あしもと）がおぼつかなかったが、今はなんとか自分の足で歩いている。

「では、明日もまた同じ時間に訓練、ということでもいいのか？」

サリエルは自分のマンションの前で、明日の予定を千穂（ちほ）に尋ねる。

「あ、はい、明日は夕方からアルバイトがあるんでそんなに長いことできませんけど」

「魔王達は」

「ああ……俺は昼から仕事だから、芦屋と漆原が付き添う」

「私も、ベルにお願いしたいところだけど……大丈夫？」

惠美も仕事があるため、終わるまでは鈴乃に場を任せるしかない。

千穂の容赦ない絶叫を直接頭に叩き込まれた鈴乃はまだぼんやりしていたが、それでも問題ない旨頷いてくる。

「では、明日は十三時から十六時までの回で取るか、一同それで……」

いいか、といつの間にか仕切り役になっているサリエルが、なぜか、夕陽が沈みかけ、空に星が瞬き始めている夜空を見ながら唐突に凝固した。

「ん？ おい、どうしたサリエ……」

真奥は何気なくサリエルの視線を追って、

「……え!?」

「……あっ!?」

真奥と同じく振り向いた千穂や惠美も、そこに立っている人物を見て息を呑んだ。

「なんだ、君達か。こんなところで何をしているんだ？」

スーツ姿にファイルや仕事道具が詰まったはちきれんばかりのショルダーバッグ。高いヒールのおかげで真奥すら見上げる上背。

宵闇の色と見まごう美しく長い髪をなびかせたマグロナルド帽タ谷店店主、木崎真弓が、驚

きの表情でそこに立っていたのだ。

「き、木崎さんこそどうして……」

真奥も千穂も、まさかこんなところで木崎に会うとは思わず、動揺を隠しきれない。

一方の恵美と鈴乃も、以前ここで木崎を目撃したのが偶然ではないことを確信し、顔を見合わせる。

「何人か見ない顔がいるが、ご友人か？」

木崎は芦屋と漆原の顔を見て、真奥に尋ねる。

漆原はほとんど外に出ないし、芦屋もマグロナルドに赴いたのは真奥が勤め始めて何回も無い。木崎が覚えていないのも無理からぬことではあったが、芦屋と漆原の間にいた男に目を留めた途端に、親しげな表情が一気に険しくなる。

「……何故ここに貴様がいる。猿江三月」

「あ、あう……そ、その、あの」

「……、これはですね、あの」

千穂と真奥は、うまい言い訳が思い浮かばず空虚に口を回らせる。

「まさか、貴様またマグロナルドの客やうちのクルーにちよつかいを……」

恵美や鈴乃や千穂を見ながら、真奥達の間を割ってサリエルを詰問しようとする木崎。止める方法が真奥も千穂も思い浮かばない。

何せ二人は、サリエルが木崎に出入り禁止を食らった瞬間を見ているのだ。

これでは仲直りどころか、またぞろサリエルに余計な嫌疑がかかり、木崎の態度が硬化し
かない。

そうならば一体サリエルがどのような態度に出るか……。

「こ、こ、ここは、僕が住んでいるマンションなのです」

「……何？」

事態を動かしたのは、サリエルの恐る恐るの一言だった。

「ここが？」

「はい、その……」

訓練中のハイテンションで居丈高な態度はどこへやら。毎日蓄養の花束を抱えてマグロナル
ドメニューを食べまくっていたところからは考えられないほど弱腰なサリエルである。

「いつからだ」

すると木崎は、思いがけず話を別の方向へと進め始めた。サリエルは驚きながらも素直に答
えた。

「センタッキーが幡ヶ谷にできてからですが……」

「こないだいいマンションに最初から住んでやがったのか」

真実が忌々しげに独り言を呟くが、それは誰の耳にも届かなかった。

「猿江三月」

「は、はいっ!!」

突然名を呼ばれて、サリエルの声が裏返る。

「一つ聞く。その頃、そっちの店舗は既に空きテナントだったか？」

「は？」

これまた木崎の予想外の質問。サリエルは真意を測りかねているようだったが、

「どうなんだ？」

重ねてかけられた声に、姿勢を正す。

「ぼ、僕が来たときには、飲食店が入っていたような気がします。そんなに古いようにも見えなかったけど、僕が来てひと月もしないうちに潰れて……」

その答えに、木崎は少しだけ眉を動かした。そして、

「はあ……」

ため息をついた。その色は、怒りでも呆れでもなく、諦観。

「まあ、そんなことだろうとは思った」

「あの……ど、どういうことですか？」

尋ねたのはサリエルではなく真奥だ。

「マッドカフェができてからの木崎さん、何か今までと違うっていうか、今まで以上に張り切

ってましたけど……」

疲れの片鱗も見せたことがなかった木崎が「骨が折れる」と言い、常連客のホットさんに対して、マニュアルに無いやり方でコーヒーを淹れ、そして、

「私は、そのパールマンを目指しているんだ」

サービスのプロフェッショナルであるパールマンになる夢を語った、あの言葉。

そんな木崎が元々飲食店だったらしい空き店舗を調べている。

ここから導き出される結論は、そう難しい話ではない。

「この前、マグロナルドでパールマンになるのは難しいみたいなこと、言いかけてましたよね」

「……ああ」

マグロナルドでの出世の目標として尊敬してきた木崎の不信な様子に、つい真奥も声が強くなる。

「まさか……木崎さん、マグロナルドを辞めげっ!!」

真奥の思いつめた末の問いは、頭をはたいた木崎のファイルによって中断させられる。

「愚か者。考えすぎだ」

「ふあ、ファイルでも角は痛いですって……」

勇者の聖剣も恐れぬ魔王が、店長のファイルの角で涙目になっている。

そんな真奥の様子を見て、木崎は呆れたようにため息をつくが、

「まあ……そうだな。ここ数日、私がらしくなかったのは、クルー達には申し訳ないと思っている。なまじマグロナルドでできることが増えてしまったからな。つい、昔からの夢が変な形で頭をもたげたんだ」

「昔からの……夢？」

真奥は痛む頭頂を押さえながら、木崎を見上げる。

「そうだ。特にちーちゃんを知っておいたほうがいいぞ。大人だって将来の夢を描くんだ」
木崎は微笑むと、

「私は、東京で採用された同期の社員の中では、群を抜いて成績がいい」

突然、改めて言われるまでもないことを言い出した。その視線はサリエルでも真奥でもなく、うら寂しい空き店舗の『テナント募集』の札に注がれていた。

「だが、最近時々思うんだ。私一人の力で、どれほど戦えるのか試してみたい、とな」

「今じゃなくても、将来的に独立を考えていらつしやるんですか？」

「まあ、そんなところだ」

恵美の遠慮がちな質問に、木崎はあっさりと答えて、それが本当にあっさりしすぎていて真奥は度肝を抜かれてしまう。

「もちろん、漠然とそうできればいいと思っっている程度の話だ。何か具体的に行動しているわけではない」

「不動産を見に来てゐるって、結構具体的だと思ふんですけど……」

「こんなのはアルバイト雑誌を眺めて、働いてもいないのに初任給をもらった後のことをあれこれ夢想する程度の遊びでしかないよ」

「う」

「ん……」

「えーつと……」

真奥と恵美と千穂が、何か心当たりでもあるのかわずかにうめいた。そんな若者たちの素直な様子を見て、木崎は微笑む。

「でもそれはそれで立派な動機づけの一つだ。恥じることはない」

木崎はテナントの窓に歩み寄ると、西陽に照る店内を眺めた。

「同期入社の中は皆業績を重ねる私を褒めそやしてくれる。だが、私はそれほど彼らと違うことをしてきた自覚は無い。少なくとも横ヶ谷駅前店が常に前年比百パーセント以上なのは、私一人の力ではない」

「そ、そんなことないですよー よその店長の悪い話とか、やる気の無いバイトとかよく聞きますけど、うちはそういう話とは無縁じゃないですか。困ったお客さんもほとんどいないし、それはやっぱり木崎さんの力ですよー」

千穂が勢い込んで言うが、木崎は振り返らずに首を横に振った。

「そう言ってくれると嬉しいがな、残念ながら本当に私一人の力ではない。あの店に赴任して一年半。店長が一つの店に在籍する期間としては異例の長さだが、私があの店で今の体制を築き上げるよりずっと長い間、私がそうできるだけの土壌を作ってくれた存在がある。なんだか分かるか？」

木崎は窓に映るサリエルの目を見ながら、微動だにせずに尋ねる。

「……前任の店長ですか？」

サリエルの回答に、木崎は眉を蹙めた。

「私を女神女神と恥ずかしい名で呼びまくってストーカーまがいの行動を繰り返しているくせに、私のことを何も分かっていないのだな」

手厳しい木崎の言葉に沈み込むサリエル。

「まーくん、ここまで言えばさすがに分かるだろう。模範解答は？」

「マグロナルドっていう会社……ブランドそのものですね」

真奥はあまり迷うことなく答えることができ、木崎も頷いた。

「私はマグロナルドの一員だ。それは私の誇りだし、マグロナルドから学び受けた恩は計り知れない。だからこそ、例えば私がマグロナルドで頂点に上り詰めたとしても、その轍は多くの人間が歩んだ跡をなぞっただけのことだ。そして私があの店で行ってきたことのいくつかは、マグロナルドというシステムが最初から存在した故に為し得たことだ」

「そういう、ものでしょうか？」

恵美の小さな問いに、木崎は肯定も否定もせず、微笑みを深める。

「あなたは……遊佐さんだったかな。遊佐さんは仕事から帰宅した後、自分の洋服の肩を粘着ローラーでコロコロしたりするかな？」

「えっ？ い、いえ、さすがにそこまでは……」

恵美は思わず自分の肩に目をやりながら首を横に振る。

「では、手を洗う際、肘まで石鹸で洗い、全ての爪をブラシで磨いて消毒したりは？」

「せ、石鹸くらいは使いますけど……」

「そうだろう？ 普通なら石鹸で手先を洗えばそれで十分だ。日本の石鹸は優秀だからな」

そう言うのと、木崎はまるで手のモデルでもできそうな美しい肌の自分の手を、おもむろに夕陽に晒す。

「今言ったのはマグロナルドが長年一つ一つの店舗に浸透させてきた伝統作法だ。マグロナルド以外のところで、その衛生習慣を全従業員に浸透させるのは並大抵の教育でできることではない。そういう面でも、私が一人で作り上げたものなどあの店には何一つ無い」

木崎は、そこで初めて空き店舗から顔を外して真奥道を振り返る。

「もちろんマグロナルドだからこそのできること、やりたいことはまだまだある。この前は調子に乗って、常連客の中でコーヒーの好み分かっている人だけはなんとか対応してみたが、い

やはや骨が折れた。今回も危うく妙な不動産に関わるところだったし、まだまだ実力不足だということははっきりした。次に夢を語るのはまだまだ先になりそうだな」

「そ、そんなことしてたんですか!?」

木崎が初めて弱音を吐いたあの日。まさか二階でそんな人間離れしたことをやっていたとは想像もできなかった。あの日の客数は、オーブンから日が経っていないこともありかなりの人数だったはずだ。常連だけでも結構な数に上るが、まさかその全員の好みを記憶して、その通りのコーヒーを作り上げるとは……。

「じゃ、じゃあ、もしかして俺達が飲んだ木崎さんのコーヒーって……」

「ああ、あれはすまん、ちよっとズルかったとは思う。少しばかり店長の威厳を改めて箔付けしておきたくてな」

木崎は悪戯っぽく笑ってウインクする。

「私は伊達や酔狂で君達に『今日の一杯』を奢ってるわけじゃないんだよ。まーくんは熱すぎない苦みが強いのが好みで、ちーちゃんはミルクたっぷりの無糖派だろう?」

木崎は、その日の日商が目標額に達すると、必ずクルー全員にブラチナローストコーヒーを奢ってくれるのだが、要するにはほとんど細工の施せないマダロナルドのコーヒーで、クルー全員の好みを長い時間かけて把握していた、ということらしい。

「……」

真奥と千穂は、ただただ唖然とするばかり。

「だからと言って、マグロナルド・パリスタの講習が意味の無いものとは思うなよ？ 今現在自分が扱う商品の知識を深めればそれを土台に新たな知識と技術の世界に踏み出せる。どんな夢も、小さな一步を積み重ねながら辿り着くものだ」

木崎はそう言うのと、自分のその言葉を噛みしめるように続けた。

「私は今、マグロナルドで安定した生活を送っている。君達のような優秀な部下に恵まれ、業績も積み重ねているから、いずれは出世も可能だろう。だが……」

木崎は片に伸し掛かるショルダーバッグの重みを手で握りしめる。

「一人の人間として、一から自分だけの歴史を……小さな一步を踏み出したいという夢はいつまでも心のどこかで息づいている。もし機会があるのなら、誰かが描いた地図に後から枝葉末節を書き足すのではなく、全く新しい地図を自分で描いてみたいんだ」

そう晴れ晴れと語る木崎は、まるで少女のように純粋な瞳をしていた。

千穂の歳の少年少女達ですら滅多に語らない未来への夢、将来の夢を、真奥も千穂も憧れる、マグロナルドの敏腕店長が語っている。

全てのサービスのエキスパートであるパールマンになりたい。

それは、木崎の夢だった。

図らずも櫛ヶ谷駅前店にカフェという業態を受け持ったことで、その夢に小さな種火が灯つ

た。

敏腕だからこそ、木崎は現状に満足せず、その先を夢見たのだ。それだけのものを木崎は持っていて、先を夢見る資格を努力と生き様で手に入れたのだ。

「夢の見方は変わるかもしれないが、人間心意気と先立つもの次第で、いくらでも新しい夢を見ることはできる。うまく行くかどうかは全く別の問題だがな」

肩を練めて木崎は、サリエルのマンションの空きテナントを指差す。

「この店、それなりにお洒落な外観だったのではないか？」

「そう……ですね」

サリエルが記憶を探りながら答えて、木崎は頷く。

「設備の割りに安い店賃とは思ったが、やはり裏があつたのだな」

鼻を鳴らす木崎だが、言葉から察するにただ見に来ただけではなく、実際に不動産屋に問い合わせたりしたのだろうか。

「でも、どうしてですか。マンション下なら住んでる人に使ってもらえそうですし、他に飲食店も近くに無いから競合することもなさそうだけど……マンションに合わせたお洒落な外観なら、人も入りそうな気はしますし……」

真実の疑問に反論する形で言つたのは、今まで黙っていた戸屋だった。

「……よく言えばそうですが、考えるにそれらは全てマイナス要因にしかないのでは」

「何故そう思われるのですか？」

面識があまり無いので、木崎は芦屋に敬語で尋ねると、芦屋はおずおずといった様子でサリエルのマンションを見上げた。

「見たところこのマンションは世帯数はそれほど多くありません。いくら近場にあるとはいえ、住人全員が毎日同じ飲食店で食事をするはずがない。飽きられた途端、客は来なくなります。店賃も轄々谷である以上は平均から見ても安くはないでしょう。そうすればその分を商品の値段に反映させざるをえません。コーヒー一杯を五百円と仮定しても、昨今それだけの値段を取るには、商品の質以外の付加価値が必要です。ですが……」

芦屋は周囲を見回して続ける。

「先ほどから私達が大人数でたむろしているのに、通行人の邪魔になっ
ていません。交差点の無い片側一車線の直線道路では、ここを通る車は脇目もふらずに通
過してしまうので、交通量の割には期待できる来客数は少ないでしょう。もう少し行けば商店街や多様な店舗が数多くある行政道路に出られるわけです」

芦屋は今度はマンションの住居部分を見上げる。

「駅からも商店街からも遠く近隣に商店もありません。競合店が無いと言え
ば聞こえは良いかもしれませんが、他に店が無いということはこの周辺そのものに
目的的需要が無く、結果このカフェにも客は訪れません。通勤客をアテにしよう
にもこのあたりは住宅地なので、周辺に居

住している人にしか店の存在を気づいてもらえない。集客半径が狭いのです。トドメが、隣がコンビニであるという事実」

芦屋の解説を、木崎は感心して聞いている。

「この周辺にファミリータイプのマンションは多くありません。大体が単身者用。一戸建てが集まる住宅街からは距離があります。マンション住まいの単身者が使うのはカフェとコンビニのどちらかなど考えるまでもありません。今どきコンビニなら、ムーンバックスや怒涛流などの商品が当たり前のように置いてあります。単身者のマンションの生活スタイルを考えても、人が訪ねてくることなど滅多にないでしょうし、あったとしても全てのイベントは家の中で行われることでしょう。この点でも隣のコンビニには絶対に敵いません。……こんなところでしょうか」

饒舌に語った芦屋だが、相手が木崎であることを思い出し恐る恐る意見を促す。

途中から形の良い顎に手を当て目を閉じて聞いていた木崎は、芦屋ではなく真実を見た。

「君には、立派なブレーンがいるのだな」

「お、恐れ入ります」

間接的に褒められて、大きな体を折り曲げる芦屋。

「私もあなたと全く同意見だ。この店舗がいいのは外観と設備だけ。あとは飲食店の店舗として集客に必要な要件を何一つ備えていない。立地の特性から考えるに、理髪店や美容室にする

のが一番いいだろうな。それが分かったただけでも、まあ収穫だった」

さて、と木崎は笑顔で頷く。

「つまらんことで引き止めてすまなかつたな。私は店に行くが、君達は帰るのか？」

「あ、はい、今日はもう」

真奥が頷くと、木崎は惠美達に顔を向ける。

「そうか。遊佐さん達には他人の夢物語に付き合わせてしまったからな。お詫びに、今度マツグカフェで特製のカフェオレをごちそうしよう。近くに来たときには是非寄ってくれ」
そう言つて颯爽と歩き出そうとする木崎の背に、

「……あ……」

小さくかけられ、そしてひっこめられた声があつた。

ヒールの音にすら掻き消されるかと思われたその声を、木崎の耳は拾つた。

「……最近貴様の元気が無いのは、店の売り上げが芳しくないという話ではなさそうだな？」

木崎は振り返らない。だが、その言葉は、

「い、いえ……その……あの……」

縫るような小さな小さな声を発したサリエルに向けられていた。だが、サリエルもその理由を話せば今以上に木崎に幻滅されると分かっているのか言葉尻を濁すが、それを逃す木崎ではない。

「聞き及んだところによると、私が出入り禁止を言い渡したせいだとか」

「むぐっ！」

マグロナルドとセンタッキーに直接関係のない恵美と鈴乃だって千穂からの又聞きで納得できたくらいである。木崎も初めから分かつていたのだろう。

「意外に普通のメンタルをしていたのだな。貴様なら構わず翌日にでも赤い藟葉に暑苦しい色のガーベラでも添えて突撃してくるかと思ったが」

「そ、そこまで行くと最早ストーカーの域かと……」

恐る恐る進言するサリエルだが、木崎は鼻で笑って肩を練める。

「それまでの行動だって、こちらに笑って済ませられる度量が無ければ十分ストーカーだ。どこで私の年齢を聞いたか知らんが、今時歳の数の藟葉など下手をしなくてもセクハラだぞ」

「そ、そんなことしてたんですか」

「ないわ、それはないわ」

「うっわ、はっず。お前がそういうことするから僕たちの株が下がるんじゃないの」
千穂と真奥と漆原に口ぐちに非難されてグウの音も出ない。

「出入り禁止の措置は今でも妥当だという確信がある。手当たり次第に女性に妙な態度を取っている貴様が全面的に悪い……か」

木崎は眉根を寄せたまま、わずかにサリエルを振り返った。

「今のままでは、私が貴様の恋心を利用してセンタッキーを貶めているようで気分が悪い。商売敵を商売以外のところで負かすなど、パールマンにあるまじき恥すべき行爲だ」

「……で、では……」

木崎は大仰にため息をつく、振り返っていた顔を再び背ける。

「不景気なツラで犬に小便かけられてるのを見せられるくらいなら、うちの店内ではっちゃけていた方が明るい分だけ良かったです。明日から、好きに来るがいい」

そのときのサリエルの表情の変化を、どう表現すればよいのだろう。

厳寒のブリザードに耐え忍んでいたペンギンのヒナが、雲間から差す恵みの陽光に目を開け生きる喜びを知る、そんな心象風景が見えるような、魂の色が変わった顔だった。

「ただし――」

木崎はびしりと釘を刺す。

「薔薇はもうやめろ。店舗内に植栽の類いを飾るには管轄事業所に申請が必要なのは貴様のところも同じだろう。いちいち面倒でかなわん。それと、二度目は無い。次にうちのクルーやお客様に迷惑をかけることがあったらそのときこそ永久出入り禁止だ。訴訟も辞さん」

そこまで一気に言う、木崎はサリエルの返事も聞かず、足早に宵闇の幡々谷の町を歩いていった。

「……い、これは、結果オーライってやつ？」

「か、かもな」

思わぬ形で懸案が解決したことに恵美と真奥は呆けていたが、

「ん……？ さ、サリエル様!?」

「サリエルさんサリエルさんー！ しっかりしてくださいー！ う、う、浮いてます!!」

地輪のような張りついたような幸福の笑顔を浮かべながら呆然と木崎を見送っていたサリエルは、その内側から溢れんばかりの喜びのためか、自覚もなく体を光らせ、地面から浮き上がっていた。

人通りが少ない道だから良かったようなものの、サリエルの意識を回復させて精神的にも物理的にも浮わついている状態を矯正するのに、それから十分ほど時間を要したのだった。

※

週末の土曜日。

マダロナルド・パリスタの講習会当日は、嫌になるほどの快晴だった。

サリエルが木崎に出入り禁止を解かれて数日の間、真奥が見ている限り、千穂の技術にそれほどの進歩は無かったように思う。

真奥も恵美もつきつきりでいられるわけではないが、芦屋と鈴乃が報告してくる限りではそ

んな様子だ。

フアーファレルロとイルオーンもあの夜きり姿を現さず、状況は長期戦の様相を呈^てしてきている。

午前九時、笹塚^{ささづか}駅で千穂と待ち合わせた真奥は、昇りきらない太陽が、夏の最後の光を全力で照射するかのような気温にうんざりしつつも、今日の講習を受けるのを妙^{たも}に楽しみにしていた千穂を待っていた。

夏休みとはいえ、勤勉な学生は意外と忙しい。学校の部活、アルバイトもこなし、空いた時間^{かん}は訓練に費やしているのだ。

勉強関連の課題は七月中にとくに終わらせているあたりが千穂らしいが、彼女を日本の常識にかからない事態に巻き込んだ責任を感じている真奥は、今日くらは講習後にでも日頃の労をねぎらってやろうかと思っていた。

と、ポケットの中で真奥の携帯電話が震え始める。

「なんだ？ 珍しいな、遅刻か？」

講習のために、珍しく筆記用具などを入れたトートバッグ^{たつぷ}を担^{かか}いでいる真奥。バッグのポケットから携帯を取り出し、開いて耳に当てたその瞬間^{しゆんかん}、

「（真奥さん、後ろです）」

「うおわああっ!?」

突然頭の中に声が響いて、真奥は驚きのあまり飛び上がる。

「あ、ご、ごめんなさい、驚かせちゃって」

見ればシャーベットブルーのワンピースに、大きな目のショルダーを担いだ千穂が、携帯を手に真奥の後ろに立っていた。

「大丈夫ですか？ ちょっと驚かそうと思って……すみません」

千穂の姿を認めてもまだ心臓の動悸が止まらない真奥に、千穂は本当に申し訳なさそうに頭を下げる。

「い、いや、いいんだけど、いいんだけどその、今のって」

真奥は、千穂の手に携帯電話が握られていないことに気づき、目を瞬かせた。

「はい、概念送受です」

「ま、マスターしたのか？」

千穂には聖法気活性化による息の乱れや疲労の気配は無い。真奥を驚かせた声も、間違いく真奥の頭に直接語りかけるものだった。

「実は、まだです。今、真奥さんの携帯が鳴ったと思うんですけど」

「ああ、鳴った」

真奥は開いたままの携帯電話を凝視する。思い立って着信履歴を見ると、

「非通知？ 俺、非通知は着信しない設定にしてたはずんだけど……」

千穂からの連絡だと決め打ちして出たため着信内容を確認していなかった真奥だが、履歴には「非通知」の文字が残っていた。

「私の力じゃまだ増幅器の力を借りないと術が成立しないんです。私自身はなんとか何も持たずに済んでるんですけど、相手が携帯電話を持っていないと、術を受信してくれなくて」

「普通に使える俺達からしてみれば、むしろそっちの方が難しいんだけどな……」

「鈴乃さんとサリエルさんにもそう言われました」

千穂は苦笑する。

「聖法気で電話かけてるようなもんだろ？ 通話料ゼロ円とかそんなレベルじゃねえぞ？」

「どうしても相手の頭に直接リンクするって概念が分からないんです。でも、携帯電話なら特定の番号と周波数を送れば通話ができるって分かるから、試しに鈴乃さんの携帯電話の番号を暗記してやってみたら……なんか、できちゃいました」

「できちゃいましたって」

事もなげに言う千穂だが、そんな使い方はエメラダと電話を介して概念送受をやりとりしている恵美だっけと思いつかないだろう。

大体増幅器は、本来術者側が持っているべきものである。自分は持たずに相手の増幅器に頼るとは、どういう理屈なのだろうか。

「……マネしようにも、俺達は魔力の上限がえらい少ないからなあ」

真奥は今に至るも、恵美と鈴乃がどのようなにして聖法氣を補充しているのか知らない。

漆原は何かのきっかけで知ったようだが、

「知ったところで僕らにはどうにもできない」

と言つて教えてくれなかった。

千穂も恵美達と同じ方法で補充をしているなら、今日どこかでそれを見られる瞬間があるのだろうか。

「ま、まあとにかくだ、なんにせよ、ちーちゃんがSOSを出せるようになったのはいいことだ。送受信の範囲はどれくらいなんだ？」

「昨日までの訓練で、今のところ半径百メートルくらいまでならなんとかあります」

「半径百メートルか。初心者にしちや上出来すぎるが、それでも広いのか狭いのか分からんな。イルオーンの結界は携帯の電波を遮断してたらしいからな。術自体は電波状況にそれほど左右されねえだろうけど、その理論値の最大距離は考えない方がいいだろうな」

少し真剣な顔でそう言いつつ、

「ま、今日はずっと一緒に過ごすわけだから、あまり気にしなくてもいいか」

「……っ」

真奥がナチュラルに放った「一緒に過ごす」に、千穂は小さく息を呑む。

「ひ、久しぶりですね、ま、真奥さんと二人きりで長い時間一緒に……」

思い切ってそう振ってみると、真奥は少し記憶を探るような仕草をして、

「あー……そういや、新宿の地下道以来か……。あれから三か月しか経ってねえってのも、ちよつと信じられないな」

それだけで会話を終わらせた。

「……………はあ」

分かっちゃいたが、それでも千穂としては嘆息せざるを得ない。

「じゃ、まあ行くか」

そう言うのと、真奥はあらかじめ買っておいた切符を取り出して改札口に向かう。

「……………はあい。あ、待ってください、私切符買います」

千穂は残念そうに口を失らせながら、慌てて券売機の方へと向かい、一駅分の切符を買って二人で改札を抜けてゆく。

そんな魔王と女子高生の姿を、柱の陰から見つめる三対の瞳があった。

「なんでこんな、人のデートを尾行するような出歯亀しなきやいけないの」

「仕方がないだろう。いくら千穂殿が概念送受を一応習得したとはいえ、魔王自身に戦闘能力が皆無なんだから」

「我が女神のクルーの安全のためなら、僕は全てを犠牲にする覚悟があるよ」

「あなたのその変わり身の早さもどうなの。今日は仕事は休みなわけ？」

「なんとでも言え。女神も言っていただろう。人はいくつになっても、新たな夢のために前に進むものなのだっ！ もちろん女神に対して恥ずかしくないよう、仕事をさばるようなマネはしていないぞー きちんと有給取ってきた！」

恵美と、鈴乃と、サリエルであった。

当然、真奥と千穂の護衛のためにこの尾行は最初から決まっていたことであつた。

意外だったのは、サリエルが千穂の安全を本心から気遣っていることである。

木崎に許されたことで千穂の訓練に付き合う約束が消滅してしまうかと思つた恵美達だったが、サリエルは前にも増して千穂の訓練に熱を入れるようになっていた。

真奥や恵美に対しても気味が悪いほど愛想が良く、千穂が増幅器を用いて安定的に術が発動できるようになるまでの練習場レンタル代を全てサリエルが出したほどだ。

そして今日も、真奥と千穂が連れだつてマグロナルドの講習に赴くと知って、頼んでもいないのにこうして朝からついてきているのである。

「まあ、邪魔しなきゃいいけど……見失わないように、行きましよ」

真奥達を追って改札を抜けた三人は、新宿方面の先頭車両乗車位置にいる真奥と千穂を見ながら小さな声で話す。

「人はいくつになつても言うけど……やっぱ、あなた達は『人』なの？」

恵美はこの機会に、ガブリエルから得た情報の真偽を確かめるため、核心を突く問いをサリ

エルに放つ。

少し前までサリエルが恵美と好意的に接するなどという状況は奇跡でも有り得ないことだったのに、それがマグロナルドの店長によって叶えられるなど、事実は小説より、である。

「ガブリエルあたりが、口を滑らせたか？」

サリエルはあつさり肯定した。それどころか、恵美がその考えに至った原因がガブリエルであることまで言い当てて見せた。

「じゃあ、やっぱり……」

「まあそうだな。少なくとも僕は、自分がそれほど超常的な存在だと思つたことはない。天使と言つたって、エンテ・イスラの人間より寿命と知力と体力と聖法氣受容量と見目麗しさと神聖なカリスマ性に優れた、ただの超常的な人類つてだけのことさ」

「ああ……私の信仰心が音を立てて崩れてゆく……」

二人の後ろで鈴乃が唸っている。

「その言い方は物凄く鼻につくけど……じゃあ、一つ質問」

「なんだ。好みの女性は、我が女神だ」

「知ってるわよ。それやめろつて本人に言われてるでしょ。疲れるからそういうのやめて」
恵美は額の汗にハンカチを当てながら尋ねた。

「天界の社会構造って、どうなってるの？」

「随分おおざっぱな質問だな。説明してたら京王八王子まで行つて帰つてこられるぞ」
 新宿と反対側の終点駅を出して首を傾げるサリエル。その時間が長いのか短いのかは判断に
 悩むところだ。

「それでは……天兵連隊」

「ふむ？」

惠美に変わつて、鈴乃が小さく尋ねる。

「彼らの武器は、サリエル様の大鎌やガブリエルのデュランダルには遠く及ばない粗末なものでした。天使や大天使とは厳密に区別されている天兵連隊とは、どのような者なのですか？」
 鈴乃の部屋には、代々木のドコモタワーでの戦いで碎いた天兵連隊の武器の欠片が保管されて
 いる。

鈴乃の職りの一撃で破壊されるほど精錬技術の低い金属で鍛造された粗末な武器は、およそ
 天使を名乗る者の武器としては相応しくないものだった。

「ああ、天兵連隊は元々ただのエンテ・イスラ人だからな。多分彼らが、勝手に作つてるんじ
 やないか？ あるいは、元から持つてきてたとか」

「はあ？」

予想外の答えに驚きの声を上げたのは、惠美も同様だった。

「天兵連隊がエンテ・イスラの人間？」

「そうだよ」

サリエルがあっさりそう言つて、二人の度肝を抜く。

「人間が天使に召し上げられるなんて話は聖典や神話の中にいくらでも転がってるだろ。あれ、結構本当なんだ」

「し、しかし、教会の名だたる聖職者の中にも、教会に列聖された者はいても、天に召し上げられた者など一人も……」

丁度そこに新宿行の電車がやってきて、話はエアコンの効いた車内に持ち込まれる。

「こつちにだって選ぶ権利はある。教会の中で延々権力闘争繰り広げて、知らない知恵ばかり増長させた名誉欲だけ一丁前のジジババ拾つて何か役に立つ？ 獅子身中の虫にしかならない。僕らが拾い上げるのは民間からさ」

「民間って……」

「戦災孤児とか、大国に虐げられている奴隷とか、そういう人たちの中からビックアップされたのが天兵連隊。彼らは天界の色々な雑務を進んでやってくれる、便利で大事な人材さ。おまけに本当にビュアな信仰心を持つてる人をどん底から救い上げたから、絶対に僕らを裏切らない。君達が天界に上がることを望むなら、選俗した方が確率高いよ」

身も蓋もないとはまさにこのことだ。教会の全否定もいいところである。

「もちろん必ずしも教会が不要なわけじゃない。信仰心を抱く習慣を作る機能として、あれは

ど優秀なものはないからね」

教会の、信仰の拠り所としての機能と政治的機能を論理と理性で区別できていた鈴乃ですら、この話には頭を抱えてしまった。

「もちろんそれだけじゃなく、天界にとって有用な人材は多少難があっても引き上げることがある。具体例は多くないけどね。オルバ・メイヤーはその枠狙ってんじゃないのかな」

「バカなこと言わないで。オルバがやっていることは、エンテ・イスラで新たな惨劇を生む片棒を担いでいるのと同じよ。いくらなんでも、それが認められて天に召し上げられたら、天界ごと滅ぼす必要が出てくるわ」

恵美が顔を強張らせるのを見て、サリエルは肩を竦めた。

「全く怖いねエ……」

笹塚を出て高架を走っていた電車は、やがて地下へと降りてゆく。トンネルに入ったら、新宿まですぐだ。

「ただ……ガブリエルのような。第一世代。と、僕やラグエルのような。第二世代。の間には、大きな情報量の隔たりがある。第一世代の連中がそれを明らかにしないのは気に入らないと言え気に入らないね」

「第一世代と第二世代って？」

「あれ？ 気づかなかった？ 君らの前に現れた天使、二種類いるでしょ」

「……あ」

鈴乃は思わず手を打って、横に立つサリエルの瞳を見る。

「瞳が紫の天使と、赤い天使……」

「そも、赤が第一世代。紫が第二世代。まあ天兵連隊の連中は置いておくとしても、大別してその二種類さ」

「ということは、ルシフェルは第二世代なの？ それなのにガブリエルと同等なわけ？」

「んー……ルシフェルに関しては、僕もよく知らないことが多いんだ。生活態度が悪いのは昔かららしいけどね」

サリエルは首を振った。

「僕が物心つくころには、ルシフェルはもう天界にはいなかった。でも僕自身、第二世代の中じゃ結構な古参のはずだから、それ以前の第二世代っていうとどういうことになるのか、ちょっと分からない」

「では第一世代と第二世代は、何が違うのですか？ 第一世代を親に持つとか、そのようなことでしょうか」

鈴乃の問いに、サリエルは大きく頷いて答える。

「ああ、それを説明しないとな。第一世代と第二世代の境目は……」

そのとき、電車が新宿駅地下ホームの切り替えポイントに差しかかり、電車が大きく揺れる。

「着くわね」

サリエルの話の先は気になるが、真奥と千穂を見失うわけにもいかない。

さして混雑していない車内を扉の方に移動する三人。

終点新宿に到着したアナウンスと共に告げられた真実を、この時点ではまだ、恵美も鈴乃もどう捉えるべきか、判断できない内容だった。

「『大魔王サタンの災厄』の前に生まれたのが第一世代。後に生まれたのが第二世代。少なくとも、僕はそう聞いている」

広大な会議室の中には、真新しいコピーサーバーがきっかり十台、据えつけられていた。

この日の「マグロナルド・パリスタ」の講習に参加するために新宿西口方面にあるマグロナルドの本社ビルに集まったクルー・社員は、真奥と千穂を含め百名ほど。

自分達以外にも、マッドカフェの技術を磨くべくこれほど多くのクルーが一堂に会することに真奥は胸が熱くなる。

「本日はお忙しいところ、マグロナルド・パリスタの講習会にお越しいただきありがとうございます。まず講習にあたり、申込用紙の番号と机の上の番号が合っているかどうかをご確認ください。そのあと、配られた資料が全て揃っているかどうかの確認を……」

マグロナルド本社製品管理部の社員であるという司会進行役が、丁寧な物腰で講習に当たり必要なものの確認を進めてゆく。

「ではまず最初に、マッグカフェがそもそもどのような業態なのかを知るためのDVDを二十分ほど見ていただきます。そのあと、具体的な講習に入っていきたいと思えます」

会議室の中が暗くなり、教材として編集されたビデオが会場のスクリーンに大写しになる。

「こういう淡々としたのも、分かり易くていいな」

テレビ番組との編集の違いを考えたりしながらも、結構そのDVDを見て真面目にメモなどを取っていたが、

「……これは、なんなの？」

突然隣から声をかけられて、真奥は驚いて真横を向く。

気がつくと、会議室にいるのは真奥一人。申し込み順の関係で少し離れた席にいる千穂もない。そしていつの間にか、自分の隣には、甲冑姿のイルオーンが座っていた。

「……ファーフアレロは、ここにはいない。近く建物で僕の動きを見張ってるけど、ここには、僕一人」

慌てふためく真奥をなだめるようにイルオーンは無表情に語る。

「け、結界に隠れてうろつきまわってたのか？」

「あなたをさらう隙を探せと言われた。でも、周りに人が多すぎて、さすがにできない」

素直すぎる荒っぽい回答。

画面には、それでも教材用DVDが流され続けている。

このあまりにシュールな状況に、真奥は思わず笑いが込み上げてきた。

「ファーファレルロには、あなたが世界征服のために何をしているのか確かめるとも言われた。これは、なんの映像？ 世界征服に必要なもの？」

画面には、海外のマグロナルドのクルーが、橋ヶ谷駅前店よりずっと巨大な設備でマッグカフェメニューを作るシーンが映し出されている。

そもそもマッグカフェはオーストラリアで始まったものらしく、それがアメリカ本社に逆輸入され、ついで日本もその業態を取り入れることになったものらしい。

マグロナルドのクルーとは思えないほど屈強なアングロサクソンの男性が、カプチーノの泡にハートマークや葉っぱの模様を描いている姿はコミカルだが感心させられる。

「必要だぞ。俺が今やっていることで、世界征服に必要なじゃないことなんか、無いと思ってい

い」

「へえ。そうなんだ」

「……素直な奴だな」

感心したように答えるイルオーンに、真奥はやや調子が狂う。

「ファーファレルロ達は、武力と恐怖で世界征服を進めるのが正しいと言っている。これは、



武力を高める薬を作る映像？」

その上、思ったよりもよく喋る。フアーファレルロが近くにいないというのは本当のことなのだろうか。

「うーん、そうだな。巡り巡ってそういうことになるかもしれない。産業って言うて分かるか？ 産業っていうのは、色々なところで相互に、多様に、密接に結びついてる。美味しいコーヒーを淹れることが生産性の向上に繋がって、士気を高め、良質な兵器と武力を生むこともないとは言えない」

「さんざよう？ ……よく分からない」

本当に困惑した顔でイルオーンは首を傾げた。

「俺もよく分からないから、今ここで勉強してるんだ」

「べんきよう？」

首を傾げるイルオーン。世界征服が分かるのに、勉強、という単語が分からないのだろうか。真奥は解説しようとして、

「……シンプルスすぎて、なんて言っているのか分からないな」

しばし唸ってから、真奥はDVDの映像に、見たことのない南米のコーヒー豆畑が映っているのに気づく。

「あー、そうだな。勉強するのは自分の知らないことを知るために行動することだ」

「その……さんぎょうを、べんきょう？　することが、世界征服に繋がるの？」

まだよく分かっているらしいイルオーンは、アラス・ラムスのように覚えてたての言葉をなんとか並べて質問してくる。

「そう、俺達魔王軍は、『国』が『民』を支配することがどういうことなのか、まるで分かっちゃいなかった。俺は、それを学ぶためにこの国で世界征服の準備を整えてる。これはその一環だ。俺の」

画面では、日本のマグロナルドにおける今後のマッグカフェ展開についてのビジネスビジョンが語られていた。

「次のステップ……新しい形の世界征服の、夢のためのな」

「あたらしい、ゆめ」

その言葉を口の中で転がすように、ゆっくりと復唱する。そして、

「楽しそうだね」

そう一言言い残すと、忽然と目の前から姿を消した。

代わりに真奥の視界に大勢の受講者たちがスクリーンに注視する講習の風景が戻ってきた。千穂の様子を窺うと、こちらの異常に気づいた気配は無く、千穂自身もイルオーンの結界に捕われた気配は無い。

「ね、ねえ」

「ん？ なんすか？」

突然背後から小声で肩を叩かれ後ろを振り向くと、真奥の後ろの席に座っていたよその店舗の男性クルーが、暗がりでも分かるほど顔を蒼白にしてこちらを見ていた。

「き、君、ずっと、そこにいた？」

なるほど、千穂は気づかなくても、すぐ後ろに座っていた彼にしてみれば、イルオーンの結界に捕われた真奥の姿が、幽霊のように消えたり現れたりしたように見えたのだろう。

真奥は少し考えて、小声で答えた。

「あーその、ペン落としちゃって、なかなか見つからなくて」

「……あ、そ、そうか、そうだよね。うん、変なこと聞いてごめん」

男性クルーはどこか釈然としない様子を見せながらも、それ以上追及はしてこなかった。

「ま、怪しまれたってこんなもんだ」

真奥は聞こえないようにそう呟くと、改めて講習のDVDに意識を集中させたのだった。

「あー あれじゃない？」

「ようやく終わったか、いい加減待ちくたびれた」

「また外に出るのか……はあ」

勇者と聖職者と大天使が、マグロナルド東京本社ビルにほど近いムーンボックスで、ぎこちないお茶会をしながら待つこと実に三時間。夏の陽が一番元気な時間帯に、マグロナルドのビルから一斉に多くの人間が出てきた。

そのほとんどが気軽な私服姿であることから、本社社員ではなく講習に集まったクルーであることはほぼ間違いないだろう。

「魔王と千穂殿はどこだ？」

「ここからじゃ分からないけど……」

軽く百人近くの人間がいるようで、なかなか真奥と千穂の姿を発見できない。

やがてその集団が三々五々に散っていった後に、

「あれじゃないのか？」

サリエルが、正面玄関前にただ一人残っている男の姿を発見する。どうやら真奥のようだが、しきりに周囲を見回し、携帯電話を耳に当てているのが見て取れた。

その姿を見て、恵美と鈴乃は心胆が寒くなる。

真奥の顔つきは、はぐれた人間を探している程度の生易しい有様ではない。

まさか。

「魔王!!」

恵美は意を決して飛び出し、狼狽する真奥のもとへと駆け寄ってゆく。

「あ、え、惠美！」

真奥は突然惠美が現れたことに驚いた様子だったが、惠美がいることを聞いたたすよりも先に、口を突いて出た言葉があった。

「ちーちゃん、見てねエか!?」

やはり。

惠美は心の中で歯噛みする。

「千穂殿がいなくなったのか!?」

「全く、何をやっているんだ貴様は」

「お、お前らまでいたのかよ!?」

続けざまの鈴乃とサリエルの登場にさすがに驚く真奥。

「一体いつはぐれたの!?」

「まだ十分も経ってねエ。会議室を出るときは、確かに一緒にいた！」

「手洗いに行ったとか、そういうことでもないのだな？」

「ああ……くそっ！ 油断した！ 完全に俺のミスだ！ あんときもっとしっかりあのクソ野

郎問い詰めとけば……」

本気で悔やんでいるらしい真奥だが、そのあたりの責任追及は後からでもできる。

「今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！ あなたも私達も気づけなかったってことは、

イルオーンの結界で誘拐された可能性が高いわ。あなたにも私達にも概念送受を送ってこない
ってことは、気絶させられてるかもしれないわね」

恵美の分析は説得力があるように思え、気ばかり焦る真奥。

「くそっ……どうすりゃ……どうすりゃいいんだっ!!」

「落ち着きなさい! あなたが焦ってどうするの!」

恵美は真奥の肩を揺すって活を入れるが、真奥は全く落ち着きを取り戻せない。

一休会議室の中で何があったのだろうか。真奥が「油断した」ということは、まさかイルオーンの接近自体には気づいていたのだろうか。

「話しかけられた……」

「なんですって!」

そこまで密な接近とは思ひもしなかった恵美は、思わず目を剥く。

「一体どうしたというのだ魔王! 貴様らしくもない、現時点で奴は敵だろう!」

真奥は、頭を抱えてしまう。

「……似てたんだ。だから、油断した。話をして、いなくなつて、それで」

「似てた? 誰に」

顔を曇める真奥は、その問いに恵美の目を見て言った。

「アラス……ラムスに……世界を、もっと知りたい。そんな願してた……イルオーンは、俺達

みたいなのに利用されていい奴^{やつ}じゃねえ」

「楽しそうだね」

そう言つて笑つたイルオーンの顔は、新しい驚きに出会つて喜ぶアラス・ラムスと全く同じ笑顔^{えがな}だったのだ。

真奥^{まおく}はなんの根拠も無いが、その笑顔を見て、イルオーンが本当にセフィラから生まれたアラス・ラムスの同類であると確信した。

最初に彼の顔を見て似ていると思つた相手は、アラス・ラムスだったのだ。

「だとしても今のイルオーンは悪魔に利用されてる。それを忘れたのはあなたのミスだけど、その思い自体が間違つてたかどうかはこれからの行動にかかってるんじゃないの!？」

「……恵美^{えみ}……」

真奥^{まおく}に真奥を見上げてくる恵美。

今まで恵美から投げかけられたことのないストレートな励ましに、真奥の心が少しだけ冷静さを取り戻す。

「そうだ……そうだな」

浅かった呼吸を元に戻して、真奥は現状を分析する。

「講習が終わつたのは正確には九分前。イルオーンがちーちゃんを担^{かか}いでいったとしても、ゲートで逃げたのでもない限り、まだ西新宿^{にししんじゅく}のどこかにいるはずだ」

「なるほどな。なら、僕が力を貸そう」

真奥の分析に頷いたのは、意外にもサリエルだった。

「佐々木千穂の左手には、イエソドの欠片の指輪があるのだろう。なら、よほど遠距離に逃げられなければ、僕の力で捕捉できるはずだ」

「ど、どうやって」

「忘れたのか、エミリア」

サリエルが口の端を上げてにやりと笑う。

「僕がどうやって、君の居場所を正確に突き止めて襲撃したと思っている。オルバからの情報があったことは事実だが、GPSに勝るとも劣らぬ僕の索敵能力を見せてやろう。聖法気やセフィラの欠片が相手ならお手の物だ」

中天に輝く太陽に顔を撃めながら、サリエルは空に何かを探していた。

「あった」

真奥達はサリエルが見ている方向に顔をやる。太陽の光を手で遮って目を凝らすと、蒼穹の中にぼつりと、白い丸いものが浮いているのに気がつく。

「遠隔増幅器を使った法術など、なまなかなことでできはしない。佐々木千穂、鍛えればいい法術士になるかもね。まあ」

サリエルは、空に浮かぶ真昼の月を不敵に見上げて言った。

「僕には敵わないけどな」

その瞬間、サリエルの瞳から紫の光が発せられる。

するとどうしたことが、真奥達が見ている真昼の月が、突然サリエルの瞳と同じ色に変化して、輝き始めたではないか。

「ちよ、ちよっと何してるの？ あんまり目立つことは……」

新宿どころか世界中どこからでも見える月の色を変えるなど、無茶苦茶もいいところである。惠美の焦りは無理のないことだが、サリエルはなんでもないことのように言った。

「実際に月の色が変わったわけじゃない。変わって見えるのは、新宿周辺くらいのものだ」

「な、なんだ……それなら安心……」

「なわけねーだろ!!!」

訳の分からないところで安心している惠美に突っ込みを入れざるを得ない真奥。

日頃真昼の月など意識して空を見上げることなど滅多にないが、この広い新宿の中で、それをしていない人間がいはいはさすがない。

写真を撮られてネットにでもアップされたら、ちよっとした騒ぎになるのではないかと心配する真奥だが、

「テレビの衝撃映像特集程度にしか騒がれまいよ。この地球で昼間の月が紫色になるなどという現象は起こり得ない。怪しまれたって、その程度のものだ」

どこかで聞いたようなことを言うサリエルだが、それでも真奥は安心できない。

「さて、少し黙だまっている。周辺を探る」

やがてサリエルは、空の月に手を翳かざして意識を集中し始めた。

真奥や恵美達にすれば、千穂ちほの行方ゆくえももちろん気になるが、それ以上に誰かが通りがかってこの場面を見られないかどうかひやひやものだ。

本当に瞳から光を発して、空に手を翳かざしていたら、事情が分かろうが分かるまいが通報ものである。

そんな自分の怪しさを分かっているのかいないのか、サリエルは小さく法術ほうじゆつを起動させる言葉ことばを呟つぶやいた。

「月天鏡」

そして法術の名を呟つぶやいて、ほんの二、三秒で、サリエルは拍子抜けしたように術を中止してしまった。

「なんだ、すぐ近くにいないじゃないか」

「は、本当か!?」

勢い込む真奥にサリエルは事もなげに頷うなずくと、すっと指を上げてあるビルを指差した。

「因果なことだが……あそこの屋上に結界が張られている」

「あそこ……ってー!」

鈴乃がそのビルを見上げて息を呑んだ。

「全く忌々しい。僕のやり方をバクらないでほしいな」

そこは、この場の四人にとって大変に因縁深い場所。

東京都第一庁舎ビルの屋上だった。

「どうする。どうやら例の悪魔もいるみたいだ。突入すれば戦闘は免れんぞ。次元移相結界は人は避難させられても、建物は保護できない。我ら四人が全力を出せばあのイルオーンとかいう小僧もなんとかなるだろうが、その代わり被害は甚大になるだろうな」

「なんでもいい、ちーちゃんとファーフアレルロがそこにいるんなら、行くまでだ」

「どうするつもり？」

例によって無策の行き当たりぼったりで突撃しかねない真奥に不安を抱く恵美だが、そのとき真奥が、思いもよらぬことを言い出した。

「……恵美、鈴乃、悪いが、力を貸してくれ」

「え？」

「な、何？」

思わぬ真奥からの申し出、いや、要請に、恵美も鈴乃も目を丸くする。

「芦屋が言ってた通りだ。ファーフアレルロには、納得して帰ってもらわなきゃ、またちーちゃんを危険に晒しかねえよ。そうならないために、お前らの力が必要だ」

そう言つて、更に真奥は、恵美達の予想だにしなかった行動に出た。

「頼む」

頭を下げたのだ。

悪魔の王が、勇者と、聖職者に、一人の少女を守りたいと言つて、頭を下げた。

「……本当に」

真奥のつむじを睨みつけながら、恵美はため息をついた。

「こっちの都合も気持ちも、全部お構いなしなのね」

だが、その口調は、存外に優しくかった。

「魔王だからな。他人の都合を考えない行動をすることでは俺の右に出る奴はいねえ」

「威張るな」

鈴乃も、あまりの物言いに思わず笑つてしまつてゐる。

「勝算はあるんでしょね。あなた達の言う『最善』の勝算が」

「ある。だが、重ねて言うが、それにはお前ら二人の力が必要なんだ」

頭を下げたまま言う真奥。

恵美と鈴乃は顔を見合わせる。

「考えている時間は無いわね」

「千穂殿の危機だ。致し方あるまい」

「恩に着る」

真奥は頭を上げると、サリエルに向き直った。

「この前と同じように、イルオーンの結界の上にもう一段重ねること、できるか？」

「可能だが、どうするつもりだ？」

「極力デカく張ってくれ。そうしたら、あとは俺がなんとかしてみせる」

真奥はそう言くと、トートバッグの中から、真っ黒い球体を取り出し、それを力強く握ったのだった。

※

「一体どういうつもりだ」

ファーフアレロは、目の前の少女に問いかける。

佐々木千穂、と名乗った少女は、イルオーンの誘いに抵抗することなく、むしろ素直についてきた。

魔王の目を盗んでの誘拐という複雑な任務をイルオーンが簡単に遂行できたのは、むしろ被害者である佐々木千穂の協力に拠るところが大きい。

「抵抗して、怪我させられたり眠らされたりしてもイヤですし」

「なるほど、見た目より、肝は据わっているのだな」

「色々怖い目に遭ってきてますから」

そう言って苦笑する千穂は、確かに普通の人間よりよほど肝が据わっているだろう。

そうでなければ、イルオーンの細腕しか頼るものがないマダロナルドの本社ビルから都庁屋上への一足飛びの跳躍を、慌てず騒がずいられるはずもない。

「では、これではどうだ？」

時代遅れのサラリーマン姿のファーフアレルロは、イルオーンの甲冑に触れる。

途端にイルオーンの甲冑が黒い霧となって霧散し、ファーフアレルロの肉体に殺到した。

「きゃっー」

千穂は思わず顔に手を当てて目を隠す。

一瞬の後に、細身のサラリーマンは格々しい悪魔の姿に変貌していた。

蝙蝠の翼に四肢から伸びる巨大な一本爪。だが、その顔立ちには、思いのほか人間に近いものがあった。

千穂は思わず手で顔を覆ったが、こっそり指と指の間から目を覗かせ、

「あ、ちゃんと鎧の下に服着てたんですね」

と、イルオーンが目の粗い麻素材のアンダーウェアを着ていることに安心して、顔から手を下ろしてホッと胸を撫で下ろす。

「……そっちな。この姿を見て、なんとも思わないのか」

日本にいない悪魔の姿を晒したことよりもイルオーンの着衣を心配されてしまったのは、ファアレルロとしても立つ瀬がない。

しかも、千穂はファアレルロの本当の姿を見ても、なんら恐れる気配を見せなかった。

「その、何かすいません、もうちょっと物凄く変身するのかと思ってました」

「……」

明らかにファアレルロが機嫌悪くなったのを見て、千穂は少し慌てる。

「あ、あの、決して怖くないわけじゃないんですー。じゅ、十分怖くて格好いいと思いますよ!? で、でも、あの、私、ま……サタンさんとか、アルシエルさんの本当の姿見たことあって、ちよつと免疫ができちゃつてるんだと思います」

恐れられるどころかフォローされてしまい、ますます立つ瀬のないファアレルロ。

「……もういい。正直、今初めて貴様を殺したくなった」

「あ、す、すいません」

分かっているのかいないのか、千穂はとりあえず素直に謝罪する。

「しかし……魔王サタン様のお姿を見たことがある、だと? どこで、どのようにしてだ」

「え? あ、ここと、この間お会いした場所から歩いて二十分くらいのところですよ」

「そば近くで、御尊顔を拝したのか」

「えっと……今のあなたと私の距離くらいです」

「……」

ファーフアレルロは無表情を貫いていたが、心は驚きで乱れていた。

魔王が本来の姿に戻っていたこと自体は伝聞として聞いていたが、その姿をただの人間にしか見えないこの少女が間近で見たことがある、ということが信じられなかった。

普通の人間なら魔王サタンの魔力に近づくだけで、その闇の力に当てられて氣死してしまうことがほとんどだ。

「まさか……貴様が、エメラダ・エトウーヴァか？」

「は？」

唐突にぶつ飛んだ勘違いをされて、千穂は目を丸くする。

「勇者エミリアを補佐した人間最強の法術士は、小柄な女だったと聞いている。佐々木千穂、という名で、この日本に暮らしているのか」

「ち、違いますよー エメラダさんは知り合いですけど、私じゃないです」

人違いも甚だしいが、ファーフアレルロは勇者時代の恵美達と直接干戈を交えたわけではないので、勘違いするのも無理はない。

「たととしても、エミリアやエメラダと交誼を結び、魔王様の魔力に当てられずに済むというのなら、貴様も並みの戦士ではあるまい。やはり貴様は、魔王様をこの国に留めている枷の一つ

なのだな？」

もう、これは何を言っても信じてくれそうにない。

これで手習い程度の術を訓練しているなどと言えば、あつという間に地球の平和を守るヒーローにでもされかねない勢いだ。

「でも……拙^たつて言われたら、そうかもしれません。私がいるせいで、サタンさんも遊佐^{あそ}……エミリアさんも、大変な目に遭^あうことがしょっちゅうですもん」

「……？」

「ふあーふあーるれろさん」

「フアーファレルロだっ!!」

「す、すいませんっ!!」

名前間違いは大変に失礼なことである。

「真奥^{まおく}さん……サタンさんが、世界征服の夢を諦^{あきら}めていないのは、本当です。日本で、サタンさんは何かを学んで、それを世界征服に生かそうとしている……」

「べんきょうだねー」

なぜかイルオーンが、明るい声で相槌^{あてづち}を打った。

「そ、そうだね……とにかく、一杯勉強して、何かをしようとしている。お金が無いから働くことに時間を取られがちですけど、それでもサタンさんは、いつも魔界の人達のことを考えて

ます。それは、信じてあげてください」

全く怖気づくことなく、真摯に自分を真っ直ぐ見つめてくる人間の少女。

人間は悪魔に恐怖こそ抱くことはあっても真剣に語りかけてくることなど有り得ないと思っていたファーフアレロにとって、千穂の目は、生まれて初めてみる目だった。

「……私もそうであってほしいとは願っている。だが……」

「だから……教えて欲しいんです。魔王軍が、エンテ・イスラに侵攻した理由を」
その問いに、ファーフアレロは馬鹿にしたように大口を開ける。

「愚かな問いだ。エンテ・イスラを征服すること以外に何が……」

「だから、どうしてエンテ・イスラを征服しに行かなきゃいけなかったんですか!？」

「……」

「この間、ふぁーふあるるれさんが言ってた、死んだ悪魔の数だけ魔界が生き長らえるって話と、関係があるんですか？」

「……ファーフアレ・ル・ロ!!」

ファーフアレロはげんなりして、肩を落とす。

「それを知って、どうするっていうのだ」

「決まっています」

千穂は決然と背筋を伸ばし、高らかに宣言する。

「そこから、前にうまく行かなかった原因を探って、サタンさんの夢の手助けをするんですー」

「ちーちゃん!？」

都庁の麓に辿り着いた真奥は、突然携帯電話が鳴り出して、その表示が非通知であったのを見てこれが千穂の概念送受だと確信する。

「どうやら無事みてえたなー 行くぞー 恵美! 鈴乃! ファーファレルロの野郎に目に物見せて……」

「待って、魔王ー」

「待つんだー」

「……ってなんだよ……」

出端をくじかれた真奥だが、恵美と鈴乃も真奥と同じく、自分の携帯電話の画面を凝視している。

三つの携帯電話の画面に表示されているのは、いずれも「非通知」の文字。

三人は顔を見合わせると、それぞれに携帯電話の通話ボタンを押して耳に当てる。

「(……サタンさんの夢の手助けをするんですー)」

三人の携帯電話からは、千穂の毅然とした声が流れてきた。

「何？」

千穂の言わんとすることが分からず、ファーフアレルロは首を傾げる。

「サタンさん、最近よく言ってます。昔の自分のやり方は間違いだってたて。でも、まだ何をどうすれば良かったのか、分かっていないみたいで……私は、できることならずっとサタンさんの助けになりたい。弱くても、戦えなくても、助けになれることがきっとあります！」

「……貴様は、人間ではないのか」

「人間ですよ！」

「なら何故、悪魔である我らの手助けをするなどと……」

そんなことは、真実と恵美を大切な存在だと疑いなく思っている千穂にとっては心底どうでもいい話だった。

「悪魔も人間も関係ありません！」

「（悪魔も人間も関係ありません！）」

思念は受話口ではなく、三人の頭に直接響いている。

「……おい、ちーちゃん、一対複数の概念送受を……」

「使えるわけないだろう。一対一より遥かに複雑だし、大体にしてつい昨日、ようやく私と数秒程度のリンクができるようになっただけだ」

真奥の問いに、鈴乃は困惑しながら首を横に振っている。

「じゃあ、これは、千穂ちゃんが無意識にやつてゐることなの？」

「他に考えられん……」

息を呑む恵美と鈴乃。

千穂の思念はなおも続く。

「（今できるなら……これからだって、ずっとできるはずなんです！）」

「今できるなら……これからだって、ずっとできるはずなんです！ 魔王と勇者が、仲良く暮らせる世界征服が！」

「……私の日本語の理解力が未熟なのか。貴様の言うことがさっぱり分かん」

「サタンさん、絶対しますよ。世界征服。今だってそのために毎日頑張ってます。でもそれは日本に……この世界に来るまでの『魔王サタン』が考えてた世界征服じゃありません」

「では、なんだと」

問われて千穂は、夏の陽光の下で快活に微笑んだ。

「魔王と勇者が……悪魔と人間が、明日のご飯のために一緒に働く世界征服です」

「……くだらん」

ファーフアレルロはあまりにもあまりな千穂の物言いに呆れてしまう。ここまで付き合った自分に苛立ちすら感じるファーフアレルロだが、それを分かっているのかいないのか、千穂は臆せず言葉を続ける。

「今できてますよ？ これからできないわけじゃないじゃないですか！」

「愚かな。悪魔と人間が共存するなどということは、絶対にありえ……」

「今もうあり得てますもん！」

たった一人の女子高生が、マレブランケの頭領格を、語気だけで遮り黙らせた。黙ってしまったファーフアレルロは、呆然としてわが身を見下ろす。

「誰よりも敵対してるはずの魔王と勇者が、もうできてますもん。子供と一緒に、三人で遊びに行くことだってできるんですよ？ なのに、普通の人間と普通の悪魔ができないはずないじゃないですか」

それは個人だからできることだと千穂だって分かっている。それでも、

「できないって言うなら、私がそうさせます」

千穂ははっきりと言いつつ切った。

「真奥さんも遊佐さんも、私をエンテ・イスラの事情に巻き込んで申し訳ないって思ってくれてるみたいですけど、そんなこと全然思う必要ないんです。だって」

千穂は最早不敵とすら言っているいい笑みを浮かべて、堂々と宣言した。

「私は、私の事情に真奥さん達を巻き込む気、満々なんですから！ サタンさんもエミリアさんも、クレスティアさんもアルシエルさんもルシフェルさんも、今のままずっと、アラス・ラムスちゃんや私と一緒にご飯食べて、喧嘩して、夜になったらまた明日って言合える世界征服になるように、私がお手伝いするんです！」

千穂は、真っ直ぐな瞳でファーフアレルロを見る。

「(……また明日って言合える世界征服になるように、私がお手伝いするんです！)」

「……………」

三人は耐え切れずに、耳から携帯電話を離す。

お互いの顔が見られない。赤面ものだ。

「ち……千穂ちゃんて……」

耐え難い沈黙に、恵美が思わず吐露する。

「わ、私達の想像以上に……なんというか、凄い子ね……」

「私の……信仰心^{しんこう}が、おかしい形に再構成されつつある……」

「……ったくよお……まったく……ったくよお……」

それぞれの反応を示した、勇者と聖戦者と、そして魔王。

「……どうするんだ。やるのかやらののか。その反応だと、佐々木千穂は無事っぽいが」

「いたのかよっ!!」

そんな三人の様子を脇^{わき}から見えていたサリエルが複雑な顔で言う。

真奥は口角泡^{こうかくあは}を飛ばして突っ込むが、どうにも勢いがない。

「……結界、やってくれ」

真奥は赤面したまま都庁を見上げる。

「理想を実現するには、相応の説得力を持つ力が必要だ……恵美、鈴乃^{すずの}」

「わ、私、上行っても千穂ちゃんと顔、正面から合わせられないかも」

「私は崇めてしまいたいそうだ」

「……いいから行くぞー お前ら頼んだ!」

そう言つて、真奥は二人の前で、やおら四つん這^ばいになったのだった。

「これほど情けない号令の姿勢も珍しいな」

サリエルは苦笑しながら、真昼の月から、東京の中心に結界を下した。

「だから、教えて欲しいんです。一体何が原因で、サタンさんは大勢の悪魔と人間を犠牲にしてでも世界征服を急がなきゃいけなかったのか……それが分かれば、次はもつと違う方向に行ける気がするんです」

ファーフアレロが、マレブランケの頭領格が、たった一人の少女の迫力と視線に耐え切れず、目をそらしてしまう。

概念が、分らない。ファーフアレロには、千穂の考える世界が欠片も想像できない。

たった一人の無力な少女が、そんなことができると思えない。

なのに、何故自分はこの少女に気圧されているのだろう。

「……それは……」

そして、根負けしたように口を開こうとしたときだった。

「ファーフアレロー 結界がー」

イルオーンが、空を見上げて叫んだ。

千穂もファーフアレロもその視線を追うと、そこに浮かんでいたのは、紫色の滲む真昼の月。

「来たか……思っていたよりずっと早いな。何故ここが……」

千穂の視線から逃げるように、ファーフアレロもイルオーンと同じく空を見るが、そんな

彼の目に飛び込んできたのは、想像を絶する物体だった。

「あ、あれは……」

「真奥さん！ 遊佐さん！ 鈴乃さん！」

ファーファレルロと同じものを見つけて千穂も叫ぶ。

この場所だと思い起こされるのは、パンツ一丁モップ一本で現れた、千穂の王子様。

今回その王子というか王は、二人の女性に襟首とズボンのベルトを掴まれ、四つん這いの状態で宙吊りにされながら空を飛んでやってきた。

ほとんど首吊り状態になりながら、それでも気丈にファーファレルロを睨みつける真奥の手には、あの黒い球体が握られていた。

あれは、ファーファレルロが凝縮した魔力の塊だったはず。

千穂が疑問を解決するためにイルオーンの誘いに乗ったとはいえ、真奥の目からはファーファレルロが短慮を起こして千穂をさらったようにしか見えまい。

まさかここで悪魔同士の戦闘が起こってしまうのだろうか。

そう危惧した千穂は、思わず真奥に叫ぶ。

「違うんです！ 私が悪いです！ ふあろれるさんは私に何もしてません！」

「もう、なんでもいい」

どうしても千穂がファーファレルロの名を正確に呼ばないことに、本人は諦め気味だ。

真奥を吊り上げている恵美と鈴乃は、ファーファレルロからの迎撃を警戒しながら真奥を屋上に放り出し、自分達も着地する。

「よつと……あ……また襟がグダった。芦屋に怒られる」

真奥は放り出されながらも器用に着地しながら、伸び切ってしまったTシャツの襟を悲しげに見つめて、千穂とファーファレルロに向き直った。

「……無事だな」

「は、はい……あ、あの……？」

真奥は、千穂の視線から逃げるようにファーファレルロを見る。その巨体を見ると、なんとか自分の精神を平静に保つことができた。

「ちーちゃんはお前を弁護するつもりらしいが、それでもちーちゃんをさらおうとしたことだけは間違いないわけだな？」

マレブランケの巨体を目の前に、真奥は冷たく言い放つ。

「どういうつもりだ」

「恐れながら……魔王様の、この国で過ごされた軌跡を、第三者から聞き取りたく……」

それどころか人間の少女の恐ろしい野望を聞いてしまったわけだが、それを真奥達にもぼちり聞かれていることを、千穂もファーファレルロも知らない。

「で、ちーちゃんは。ちーちゃんも悪いって、どういうこった」

「あ、あの、その、私は、どうして真奥さんがエンテ・イスラを征服をしなきゃいけなかったのか知りたくて……真奥さんや芦屋さんに聞いても教えてくれなさそうですし……」

「はあ……そっか」

その話題は、三人が聞いていた概念送受の中には無かった。気恥^{きぢ}ずかしさで遮断^{しやだん}してしまった後のことなのだろうか。

真奥は頭をがしがしと掻^かきながら、千穂とフーフアフレロを真正面^{まへ}から見据^{みよ}えた。

「お前らなあ」

言いながら、真奥は自分の胸を親指でびしりと差す。

「そういうことは、本人に聞け！ 俺はここにいる！ 逃げも隠れもしねえ！」

「はい……すいません」

千穂はしゅんとなって謝る。

「ちーちゃんには……まあ、色々言いたいことはあるが……とりあえず」

真奥は先ほどの概念送受を思い出し、顔をむずむずさせながらも千穂のそばまで歩み寄って、その頭に軽く拳骨を落とす。

「あだっ」

「説教、予約な」

「うう……はい」

千穂はばかりとやられたところ押さえながら、惠美と鈴乃のところに走り寄る。

そこでも惠美と鈴乃にばかりとやられているのを横目で見てから、真奥はフーフアレルロに改めて向き直った。

「んで、お前だお前。ちーちゃんからの聞き取りの結果、お前は俺をどう判断した」

「……正直、判断致しかねます。思わぬ話も聞きましたが、やはりこの国に魔王様の覇道を支えるものがあるとは思えませぬ」

「そんなことないよ。サタンは、さんぎょうのべんきようしてるんだ」

「そういう言い方をすると、俺がものすげえいい加減なノートを取り方してるみたいだな」
イルオーンの幼い物言いに苦笑する真奥は、ポケットに手を入れると、なぜか財布を取り出した。

「なら、教えてやる。この国には……この世界には、魔界の窮状を救うあるものが満ち溢れている。血でも、命でも贖う必要が無い。それが……これだ」

真奥は、百均のビニール製の財布の中から、一枚の紙を取り出した。

ヨレヨレになってしまっているそれをゆつくりと広げる。

「……お札を折らずにしまえるお財布買いなさいよね。いい歳してみつともない」

かつて、そのよれよれの紙で魔王に窮地を救われた経験のある惠美は、忌々しそうに吐き捨てた。

「なんだかわかるか。言っておくが、エンテ・イスラの人間の世界にも当たり前にあるものだ」
ファーフアレロの目には、それは人間の顔と複雑な絵画が印刷された薄っぺらい紙にしか
見えない。

「それは……？」

「これさえあればな、こんなものはもう、やりとりしなくてよくなるんだよ」

そう言つて真奥は、財布を取り出すために小脇に挟んでいた黒い球体、すなわち擬態した魔
力球を無造作に放り投げる。

「そんな紙切れ一枚が、魔力以上の力を持つと？」

「持つ」んじやねえ。皆で「持たせる」んだよ」

真奥は高々と、日本の偉人野口英世が印刷された千円札を掲げた。

「俺達の意志が、世界の在り方を変えるんだ。平和故に失われつつある魔力に変わり魔界で流
通する価値ある資産……それが、金だ。見方を変えれば、世界も現象も変わる。それを俺は、
この世界で知つた」

「金……存じております、人間共が商いに使う札や金属の板にございましょう。そのようなも
の、力の前になんの意味がございますか」

「今はな、無えよ。でもな、これから作り上げていく。そうすればな、俺を殺そうとした勇者
だって、俺に力を貸してくれる世界が生まれたりするんだよ！ 誰も殺さずに、負の力を生む

ことだってできるんだ！」

「あのね、私がお金に釣られて力貸してるみたいな言い方やめてくれない？」

黙っていられなくなった惠美だが、それでも背後から歩み寄ると、真奥の肩に手を当てる。

「報酬があるからこそ動くというのは人間社会の基本的な原理だが、寂然としないな」

反対側の肩には、鈴乃の手。

一体何が始まるのか察しかねる千穂だったが、

「ちーちゃん」

真奥が背中越しに呼び掛けてくる。

「歌ってな。惠美も鈴乃も、カバーにまわれねえから、きちんと活性化して身を護れ」

それだけで、全てを察した。

千穂は、叱られて涙目になった目尻を拭いながら、息を整えて気持ちを落ち着ける。

「千円分、働いてくれよ」

「私の時給換算なら一時間分にもならないけど、仕方ないから協力してあげるわ」

「行くぞ。想定と違っていたからといって、死ぬなよ」

惠美と鈴乃の声と共に、両方の肩から真奥の肉体に膨大な量の聖法気が流れ込み始めた。

「な、何をしている貴様らっ！」

度肝を抜かれたのはファーフアレルロだ。

二人の人間が、サタンの肉体に全開の聖法氣を注ぎ込んでいる。あれでは脆弱な人間に身を落としている魔王など、浄化されてしまうではないか。

「動くな!!」

だが、それを制したのは苦悶の表情を浮かべる真奥本人だった。

「へ、へへ、び、びびってんなって……見てろ、きっとブツたまげるぞ」

「だ、大丈夫なんでしょうね？」

真奥は自信満々だが、実は惠美も鈴乃も、この行動の理由を聞かされていない。

真奥が、絶対大丈夫だから、とフーフアレルロの前でありつたけの聖法氣を真奥の体内に叩き込めと頼んできたのだ。

まさか千穂を危険に晒すはずがないので渋々承諾した二人だが、どう見ても真奥にダメージを与えているようにしか思えない。

「があああああつ!!」

そしてそう長くはない間聖法氣を注ぎ込まれた真奥は、

「……………」

「ちょ、ちょつと!?」

「お、おいっ—」

白目を剥いて失神してしまふ。

一体何をしたかったのか訳が分からない恵美と鈴乃とファーフアレロだか、

「新しい朝が来た、希望の朝だ」

唐突に、千穂の歌が始まった。

ラジオ体操の歌。それと共に千穂の体内の聖法氣が活性化を始める。

失神してがくりと膝をつく真奥。

恵美は慌ててそれを脇から支える。

「喜びに、胸を開け」

そして、その変化は唐突に起こった。

「大空仰げー」

真奥の肉体が、殴られたかのようにくの字に折れ曲がり、

「きゃあー」

「うわっ!!」

真奥が倒れないように支えていた恵美と鈴乃は、たまらず弾き飛ばされてしまう。

突然真奥の体内から、黒い光がほとばしり始めたからだ。

「ラジオの声に、健やかな胸を」

光はどんどん大きくなり、やがて真奥貞夫の肉体を黒く染め上げてゆく。

「こ、これは……まさか」

ファーフアレルロも黒い光の奔流に目をかばうが、それでも視線は外せない。

「この薫る風に開けよ、それ――」

最初に現れたのは、獣の足。

「二――」

そして巨大な体軀、

「三――」

かつて勇者に砕かれた右の角と、健在な左の角。

「あーあぶね、一瞬意識飛びかけた」

それら見る者全てを威圧する雰囲気をもたしめる、ぼやき。

「ど、ど、ど、どうなってるの!?」

誰よりも驚いているのは、恵美だった。

悪魔に聖法気を注ぎ込み続けたら、魔王が生まれるなどと誰が想像できるだろうか。

鈴乃もあまりの展開に尻餅をついたまま、魔王サタンの威容を見上げることしかできない。

「お前らはそんなにビビんなよ。……ちーちゃんは、分かるかな？」

「い、一応は……」

やはり聖法気活性を会得しているとはいえ、生身でサタンの魔力に当たるのは辛いらしい。

それでも気丈にサタンに微笑みかける千穂は、サタンの思惑にはすぐに気づいた。

千穂は、東京タワーの騒動の前に、聖法氣の過剰摂取による反動で体内に生まれた魔力により中毒を起こした。

ではそれを、『人間・真奥貞夫』の体内で起こせばどうなるか。

答えは今、限界を超えてバツンバツンに伸び切ったユニシロのＴシャツとデニムジーンズを着て、目の前にある。

「おっきいねえ」

ただ一人、目の前の状況の変化を楽しんでいるイルオーンが、薄い笑いを浮かべながらサタンの顔を見上げている。

「ま、魔王様……」

ファーファレルロは、思わずその場で片膝をつき、跪いた。

魔王軍壊滅後に頭領格に昇格したファーファレルロは、サタンに直接目通したことがなかった。だがいざこうして目の前にすると、自分はなんと愚かな疑問を抱いていたのだらうという思いに囚われ、胸が後悔でいっぱいになる。

魔王サタンは、健在だった。今もなお、ファーファレルロなどお呼びもつかぬ次元の強大な力を隠し持って、世界に君臨する準備を整えている。

しかも、それを、かつての仇敵をも味方につけて。

「どうだ。これでもまだ、不服か」

遙か高みよりかけられる声に、ファーフアレロは魂まで屈服し、平伏する。

「全て、この私の短慮にございました。魔王サタン様の御心を疑いました罪、如何様にも罰し
くださりますよう」

しばしの沈黙。

跪くファーフアレロは、いつ自分の命の灯が消えても良いように覚悟を決めていたが、

「誰もンなこと言ってねえだろ」

降ってきたのは、そんな軽い言葉。

「最初から言ってたんだろ。俺には俺の考えがあるから馬鹿なことしてねえでさっさと帰れって。
んでパーバリッティアともども東大陸から撤収しろってよ。俺はこうして新しい世界で、新た
な力を得て、世界征服に備えてる、それを分かってくれりや十分だ」

「……長れ多いお言葉……」

「つつつても、それじゃパーバリッティアも納得しねえだろうしな。帰ったら奴に伝えろ。こ
の国で見つけた『本物の』新生魔王軍の大元帥たる四天王、紹介してやるよ」

「え？」

「は？」

「え？」

千穂と恵美と鈴乃が聞いたことのない存在を突然言い出すサタン。

「アルシエルとルシフェルは覚えてんな。それに加えてこの、勇者エミリア。もしかしたら俺より強いかもしれねえ、戦闘のエキスパートだ」

「ちょ!!」

「そっちの訂教審議官アスサイズ・ベル。教会の外交官教部の出自を生かし、エンテ・イスラのあらゆる情勢に通じる知将だ」

「な、何をっ!!」

「敵だったこいつらと俺を結びつけた、人心掌握の要にして俺の補佐官、マグロナルド・バリスタの佐々木千穂。以上が、俺が作る新たな魔王軍の四天王大元帥だ」

「五人っ!!」

恵美と鈴乃が、思わず揃って絶叫する。

「って、そうじゃないー な、何よ私が魔王軍大元帥だなんて、勝手なこと言わないで!!」

「何を言い出すかと思えばー 名譽棄損だ! 訂正して撤回して割腹して詫びろ!!」

全力の突っ込みの後に、それぞれにまた全力で抗議する恵美と鈴乃。

「大体なによマグロナルド・バリスタって!! 千穂ちゃんをこれ以上危険な目に……」

「マグロナルド・バリスタ……ですと?」

「え?」

「は?」

勇者と訂教審議官とマグロナルド・パリスタが、あたかも同格の称号を表すような言い方をしたサタンだったが、なんとファーフアレロは、それを思い切り真に受け、あまつさえ、

「マグロナルド・パリスタ……王佐の司教司、その少女は、弓兵だったのですか」

「な、な、なんでそうなるのよ!」

マグロナルドの商品知識を深めたことを証明するだけの資格が妙な称号と勘違いされてしまっているが、その理由が恵美にはさっぱり分らない。

「でも、私が大元帥……かあ」

そんな周囲の状況など我聞せず、先ほどまで苦しさを隠せなかったくせに、今は妙に豪快に活性化を行っている千穂は、夢見心地で微笑んでいる。

「そこっ！ 千穂殿も何を喜んでいるー」

鈴乃も突っ込まずにはいられないが、それでも鈴乃は恵美よりは理由が分かっていた。

「マグル・オン・アルド……王に従う司教か……全く、どういう思考回路をしているんだ」
鈴乃のそんな呟きを満足げに聞きながら、ファーフアレロに傲然と言いつつ。

「いずれ俺は、新たな魔王軍を従え、魔界と、世界を再び征服する。この者達は我らの敵にあらず、それをゆめゆめ忘れるな!」

「ははっ!」

「忘れて! 敵だから!!」

恵美の悲痛な叫びは、ファーフアレロには届かない。

「さて……と」

ファーフアレロが心服したのを確認した真奥は、一つ頷くと、

「これ、返すわ」

転がした魔力球を拾い上げると、指先につまんで念を込める。

「ぬっ」

小さなサタンの気合いと共に、サタンの体が一瞬にして黒い炎に包まれる。

「ま、魔王様!?」

慌てふためくファーフアレロだが、次の瞬間、

「……持ってけ」

瞬き一つする間に、巨大な力と肉体と威厳を持つ魔王サタンは、襟どころか全てが完璧に伸び切ってぐっだぐだになってしまったTシャツを纏った人間の青年に姿を変えていた。

「少しは、足しになるだろ。持って帰って食うなり分けるなり好きに使い」

真奥貞夫はそう言うのと、魔力球をファーフアレロに放る。

外見は単なる鉄球の如き魔力球だが、今、そこに内包される魔力は、聖法氣のオーバーロードで生み出した魔王サタンの魔力のほとんど全てである。

「し、しかしそれでは魔王様が……」

サタンは微かな魔力をかりうじて保持する弱々しい姿に戻ってしまっている。今後の覇道のために魔力を手放すのは得策ではないと考えるファーフアレロだが、

「見ただろ。やろうと思えばいつでもあの姿は取り戻せるはずだしそれに……」
真奥は苦笑して、怒り心頭に発している恵美と鈴乃を、蒼い顔で振り返った。

「あいづらが怖いから、しばらくは大人しくしてる意味も含めてな」
ファーフアレロは真奥と後ろの女性陣を見比べて、啞然とするしかない。

「まうおううう!!!!」

そして魔王よりも魔王らしい声色と迫力で、怖いあいづらが真奥の背に迫る。

「魔王! 訂正しろ! 五人じゃ四天王にならんだろう!」

「いいじゃねえかよ四天王でも八王子でも大してかわんねえよ」

「これ以上増やす気? 何が八王子よー とうか、そもそも数の問題じゃ……」

「新たな四天王に魔王様のもたらす新たな文化……魔界の民の士気も、さぞ上がることでしよう」

「だから違うって言ってるでしょ!!!」

恵美と鈴乃の悲痛な叫びと、感極まったファーフアレロの言葉と、活性化した聖法気のおかげで浮き上がりそうな千穂と、抗議をいなす魔王サタンの声が新宿の空に交錯する。

「すごいなあ、すごいなあ!」

色々な意味で阿鼻叫喚の真奥達の有様を見ながら、一人イルオーンだけが、感心したように手を打って喜んでいた。そして、

「……何やってんのかね、いらんならもう結界解くぞ」

一向に戦闘行動が始まらないので様子を見に来たサリエルは、そんな緊張感の無い異世界の人間同士の言い争いを見て、がつくりと肩を落としたのだった。

※

「だ・か・らー！ 何回も言ってるんだろ！ 敵を増やさないためには、味方になったって思わせただ方が簡単だってよ！」

真奥貞夫の悲鳴が、夕暮れの新宿にこだまする。

真奥の姿に戻った後、勝手に魔王軍大元帥扱いされて怒り心頭の恵美と鈴乃に炎天下の都庁の屋上で正座させられて延々説教を食らっていたのだ。

独断専行でファーファレルロ達から情報収集を行おうとした千穂の説教のことなど、皆すっかり頭から抜け落ちてしまっているほど、真奥がファーファレルロ相手に表明したことは全員の上に甚大な影響をもたらした。

こと恵美が怒ったのは、千穂まで大元帥として引き入れたことである。

イルオーンのゲートで帰還したファーフアレロがそのことをバーバリッティアに知らせれば、千穂はもう関係者以上の存在としてエンテ・イスラに関わることになる。

千穂を「敵」とみなす勢力がやってくるかもしれないと、当初の目的がまるで果たされていないと、帰り道の最中もねちねちと嫌味を言い続ける始末だ。

それに反論したのが、真奥の先ほどの絶叫である。

「大元帥だつてことにしとけば、そうそう手え出そうなんて考えねエだろ？ 人間の騎士団だつて、大元帥ですらないバーバリッティアにも対抗できねえんだぞ？」

「そういう問題じゃないでしょ！ 千穂ちゃんがエンテ・イスラの人たちに敵扱いされるかもしれないじゃない！ それに悪魔を差し置いて大元帥なんかになっちゃえば、千穂ちゃんが悪魔の嫉妬の対象になって狙われるかもしれないでしょ！」

「俺の配下にそんな陰湿な奴いねえよ！」

「明朗快活な悪魔なんかいてたまるもんですか！」

「てめえどこに目エつけてやがる！ この俺が陰湿だとしても言うのか！ 人間なんざ俺達の言うことなんかなーんも信じねえくせに、都合のいいとこだけ抜き出してちーちゃん悪者扱いするんだつたらそれこそ陰湿だろうがよ！」

「陰湿じゃなければ、あなたなんか考えなしの脳ミソ筋肉よ！ 何言つたつてそういう風に千穂ちゃんを今までとは違う危険に晒してることには変わりないでしょ！ この馬鹿悪魔！」

「ンだこのー！」

「何よー やる氣？」

「もう……やかましいっ!!」

都庁から京王新線初台駅までの道を、延々罵り合いながら歩く真奥と恵美にしばれを切らせ、鈴乃が一喝する。

「今さら過ぎたこと言っても始まらん。ファーフアレロとイルオーンをこちらに留めたまま事態を解決できなかった私達の負けだー」

「すずねーちゃ、おこっちやめっ」

鈴乃に抱かれたアラス・ラムスがしてしと鈴乃の額を叩き、鈴乃は大人げなくそれを振り払う。

イルオーンがファーフアレロと共に帰還する直前、またも恵美の意志を無視してアラス・ラムスは勝手に恵美の身から飛び出していた。

「……イルオーン」

「アラス・ラムス……久しぶり」

「ん」

その会話を見るに、やはりイルオーンは、アラス・ラムスに限りなく近い存在だったのだらう。

「イルオーン。みんなは、げんき？」

「ごめん、知らないんだ。ただ、僕は元気だ」

「ん」

アラス・ラムスはそれだけで、心なしか明るい顔色になる。

「また、あそぼ？」

「うん」

それで、セフィラから生まれた子供たちの短い邂逅は終わった。

イルオーンが、作り出したゲートでファーファレルロと共に日本からいなくなるまで、アラス・ラムスはじっと見送っていた。

そのあとすぐに恵美と真奥の言い争いが始まってしまい、結局鈴乃がアラス・ラムスを抱きかかえているのである。

「大体イルオーンの由来も聞き出さないうちに帰してしまつて……千穂殿が絡むと、本当に考えなしだな」

「……鈴乃さん、何か呼びました？」

傍らを、どこかふわふわと歩いている千穂は、先ほどからずっと夢見心地だ。

「呼んでない。千穂殿、言っておくが帰つたら説教だ。忘れるな」

「……はあい……」

「……まあたぐいともこいともっ!!」

都庁からずつとぼやぼやしっぱなしの千穂は、話を聞いているのかいないのか。

「すずねーちゃ、おこっちゃめっなの!」

「そうは言うがなアラス・ラムス! 私一人くらい冷静に理知的に物事を見据えなければ、こいつら本当に何も考えてなくて……」

アラス・ラムス相手に真剣な顔で愚痴る鈴乃。

「れーせーにちてきにおのごとおすえるの?」

「……そうだな、アラス・ラムスに言ったって、仕方ないな」

分からないなりに鈴乃の言葉を噛み砕こうとするアラス・ラムスだが、分からないものはやっぱり分からない。その上、

「まあまあ、いいじゃないか。今回は僕が女神と仲直りできたんだ。それで万事良しとするべきだ」

「誰か私の心に平穩をもたらししてくれる人間はいないのかあああ!!」

「あん、すずねーちゃびつくりするのやーの」

地に足つけた状態でも浮つきまくっているサリエルの総括がトドメとなり、堪忍袋の緒が切れた鈴乃は、アラス・ラムスを抱えたまま物凄い勢いで走っていつてしまう。

「あいつも苦勞人だなあ」

「誰のせいよっ」

泣きながら走り去る鈴乃の背を見送りながら、そんな勝手なことを言う真奥。

「でも、どうして魔力をファーフアレルロにあげたの？ 私が言うことじゃないけど」

「なんだ。俺がいつでも魔王に戻れる魔力を持つこと、見逃してくれんのか？」

「だから私が言うことじゃないけどって断ったでしょ！」

真奥の軽口に嘸みつく恵美。

「……ま、確かにお前にしてみりや、魔王に戻った俺がファーフアレルロと一緒にいきなり日本征服を始めれば、俺を殺す理由ができるから良かったのかもしれないけどよ」

「そ、そんなこと私が望んでるわけないでしょ！」

「そんなことってのは、俺が日本征服を始めることか？ それとも、俺を殺す理由ができることか？」

「……………揚げ足取って私を怒らせたいわけ？」

「この前言われっぱなしだった仕返しだ」

二カつと歯を見せてわざとらしく笑う真奥。恵美はぎりぎりと歯を食いしばってソッポを向いてしまう。

「ま、真面目な話するとだ、ちーちゃんに免じて、かな」

二人は、少し後ろでふわふわと浮き上がりそうな千穂を振り向く。

「あんなこと堂々と宣言された後に、お前らとモメごとになりそうな要素残しておくほど、俺もバカじゃねえよ。あ、あとこれ、忘れないうちに仕事料な」

真奥の言うことを頭の中で咀嚼するよりも先に、目の前に差し出されたくしゃくしゃの千円札を見て、恵美は鼻白む。

「なんだよ、いらねえのか？」

「いらないわ」

「なねっ!?」

真奥は、千円をためらいもなくいらないとと言える恵美を危うく尊敬しそうになる。

「それを受け取ったら、本当にあなたとビジネスライクな関係を結んだことになりそうだから。今回も私は千穂ちゃんを助けるためにやむにやまれず協力しただけ。勘違いしないで」

「そ、そこまで考えちゃいなかったが……い、いらないなら本当にやらねえぞ? いいな?」

先ほど堂々と魔界の未来を語ったとは思えないほど卑屈な仕草で、千円をしまう真奥。

「それより、さっき私達が千穂ちゃんの概念送受を聞いたこと、千穂ちゃんには黙ってなさいよ?」

「は? なんだ?」

膨らんだ小銭入れにうまく入らないらしく、ますます千円が悲しいことになっている。

「……本人は私達に聞かれないと思ってるだろうし、それに……」

「……それに？」

言葉尻で言いよどんだ惠美は、夕陽に照らされて輝く瞳を不満そうに細めながら、目だけで真奥と千穂を交互に見る。

「……なんだか……納得しちやいそうで、やだ」

「あ？ 何？」

その言葉がほとんど口の中で眩くような小さな声なので、西新宿の交通量の騒音に掻き消され、真奥の耳には全く聞こえなかった。

「……なんでもないわよ。とにかく、千穂ちゃんには言わないこと！ いいわね!」

「お、おう……なんだか分からねエけど……」

態度は今までの惠美に戻ったが、未だ釈然としないものを抱えているらしい惠美に、訳が分からないなりに素直に頷いた真奥は、

「あ、そうだ、ちーちゃんちーちゃん」

ふと思いついて体ごと振り返る。

「……はあい……え、あ、は、はいっ!」

真奥に呼びかけられて、ぼんやりしていた千穂は思わず背筋を伸ばす。

「まあ、説教は後ですとしてさ、ちよっと寄り道しようと思うんだが、一緒に来ないか？」

「寄り道ですか？」

「どこに行くつもりよ」

この期に及んで千穂を危険に晒すわけにはいかない。場所によっては恵美も無理やりついていく覚悟でいたのだが、

「そうだ、お前も知つとけよ。ちーちゃん、誕生日が近いんだってさ。いつなんだ？」
千穂と恵美の表情が、しばし固まった。

「たん……じょうび？」

「あ、その……はい、九月の、十日ですけど」

千穂は問われるままに答える。

「いやー、考えたんだけどさ、やっぱ魔王だった俺がいきなり誕生日プレゼントなんか考えたって、絶対ちーちゃんの好みのもの用意でられるとは思えねえからさ、もうこの際だから本人に好みを聞いてしまったほうが早いし確実かなと思って」

ぶっちゃけるにしてもあまりにぶっちゃけすぎだし、恵美にしてみれば、魔王が誕生日を祝うという概念を理解していること自体が度し難い。

「でさ、俺、ちーちゃんの好みっていまいち把握できてねえんだけど、恵美みたいな少女趣味ではない気がするんだよな」

「だ、誰が少女趣味よっ！」

「少女趣味だろうが。いい歳してリラックス熊の財布なんか使いやがって」

「あ、あなたの百均財布よりずっとマシよ!! 大体私の本当の歳は千穂ちゃんと同じしか変わらないんだから!」

「あー、まあともかくだ、あんまり高いモンは分かっているだろうけど無理だから、なんかそこそのもんで欲しいのあったりする?」

これまたストレートすぎるほどストレートすぎる。マグロナルドの注文を取っているわけではないのだ。

千穂はほんの少しだけ真奥の顔を見上げてから、

「もう、もらっちゃったかもです」

笑顔で、そんなことを言った。

「そうか? ……って、え? 俺、何かあげたことあったっけ?」

「もらっちゃいましたよ。私が今、一番欲しかったかもしれないもの」

「ん? そ、そうか? うん?」

真奥自身にはとんと覚えがなく、しきりに首を捻っている。

「ええー? 何かあげたっけ?」

結局分らないように、不満げな顔をする真奥だが、千穂は秘密めいた笑みを浮かべながらスキップせんばかりだ。

「もう……どっちもどっちというか……お気楽と言うか」

「え？ 惠美は分かるのか？」

「……分かりたくない」

「な、なんなんだよ」

「ふふふ、気づくまで、秘密です」

千穂は口^{くち}に指を当てて、どうやら教えてくれるつもりがないらしい。

「あ、でもそうだ！ 確か遊佐^{あそ}さんも、誕生日、秋なんですよね？」

「私？」

突然千穂から話をふられて、惠美は目を瞬^{しん}かせる。

「そうなのか？」

「前に鈴乃^{すずの}さんからちらっと聞いた気がして……」

「……」

惠美は真実を不機嫌^{ふきげん}そうな顔で見ながら、渋々^{しぶしぶ}頷く。

「確かに私の誕生日は西大陸の初秋だけど、でも日本じゃいつかなんて分からないし、私のはどうでもいいわよ」

「えー、折角だからプレゼント交換^{せつがく}こしましょうよ！」

惠美の腕を取って楽しい企画を夢想し始める千穂。

「や、やめてよそんな、恥^はずかしい」

千穂の如何にも女子高生然とした申し出に、恵美は頬を染めてやんわりと断る。

「そうでなくても、色々お礼とかしたいのに。真奥さんだって、なんだかんだお世話になってるんだから、たまには恩返ししないと本当に殺されちゃいますよ?」

「千穂ちゃん、あのね……」

千穂のどこまで本気が分からない言葉に困惑する恵美だが、

「……そうだなあ。冷静に考えると、結構惜りがある気がする」

「真面目に考えないでよ。というか、あなたにだけは考えられたくないから本当やめて」

これで千穂に乘せられた真奥からリラックス熊グッズでもプレゼントされようものなら、一気にリラックス熊が嫌いになつてしまうかもしれない。

「でも、お前も俺から何かもらいたかねえだろ?」

「当たり前じゃない。だから考えないでって……」

「じゃあ、こういうのどうだ」

「は?」

真奥が突然手を打って、恵美は嫌な予感に囚われる。

「さっき俺、お前のこと大元帥に指名しただろ」

「それを返上させてくれるのがプレゼントだって言うなら、考えなくもないわ」

「ファーフアレロの手前、そういうわけにはいかねえよ。それでだ、恵美お前、俺のやるこ

と見張るために俺についてこい」

時が、止まった。

「はい？」

恵美と千穂が、硬い声で唱和する。

「お前、どうせ今悩んでるんだろ。俺を今まで通り敵として扱うかどうか。だったらこれから改めて、俺がお前の敵かどうかを見て判断しろよ。大元帥だいげんすいなんだからいつでも俺を背後から斬り殺せるぞ。俺もそう簡単にやられるつもりはないが、俺のやることがやっぱり気に食わなければ、そのときは改めて魔王と勇者として決着つけようぜ。どうだ」

「ど、どうだ……って」

「仕切り直しだよ。俺はお前が思っているような魔王じゃないってことを、行動で示してやる。ちーちゃんも俺の世界征服の動機を知りたいって言ってたし。一から教えてやっから、それでも気に食わなければ、改めて勝負しようぜ。だから」

真実まことはこの上もなくいいことを思いついた、と得意満面の笑顔で、恵美に言った。

「勇者エミリア、スッキリしたけりや俺についてこい。世界征服の過程でお前に新しい世界を見せてやる」

千穂と恵美が、石化している。

その止まった時を、外側から見ていた唯一の存在サリエルは、

「ふむ、言うときは言うんだな」

真奥の言動に感心しきりであった。

そして、

「~~~~~」

「え？ え？ え？」

恵美の顔がガッリンをかけられた火種のごとく、爆発的な勢いで赤くなってゆく。

その瞬間、一足先に初台駅に到着していた鈴乃は、抱きかかえていたアラス・ラムスが突然消滅して目を瞬かせ、同時に恵美の手には、容赦ない力を内包した、進化聖剣・片翼が握られていた。

「お、おい、恵美!? 人目、人目が結構!」

「天衝嵐牙!!」

聖剣技を真奥目がけて本気で放った。

容赦ない暴風に晒され、サタンとは似ても似つかぬ真奥貞夫の軽い肉体は思い切り街路樹に叩きつけられ、植え込みに突っ込んでしまう。

「あああなななたじじじ自分は何何何言ってるかわかかわかあつてんの!」

恵美こそ自分が何を言っているのか分かってない様子だが、真奥はもっと分らない。

「馬鹿っ!! この馬鹿っ! もういいわよ! あなたは私の敵! 金輪際敵! 悩んでた私も大馬鹿よ! こ、こ、こ、今度変なこと言ってみなさい! アラス・ラムスとか千穂ちゃんとか関係ないわ! その瞬間、あ、あ、ああなたの首刎ねてやるっ!! こ、この……」

恵美は瞳を潤ませ、真つ赤になった顔にあらゆる感情を込めて、言い放った。

「この無神経男っ!!!」

そして先ほどの鈴乃を凌駕する速さでつかつかと歩み去ってしまふ。

「な、なんだったん……」

植え込みから這い出した真奥は訳が分からず目を白黒させるが、そんな真奥の顔に落ちる影があった。

「ち、ちーちゃん、ちよつと手を……あれ?」

真奥の前に、夕焼け空を背に立った千穂は、差し出された真奥の手ではなく、襟首をわし掴みにした。

「ちーちゃん?」

「真奥さん。ケーキ、着ってください」

「は!?」

「お誕生日、お祝いしてくれるんですね。なら、ケーキ着ってください。今すぐ!」



「え？ あ、その、なんでちーちゃんもちよつと怒って……」

「知りません!!」

「あの、あの、ちーちゃん、俺、歩けるからさ、その、襟放^{えりはな}してほしいなあって、その」
女子高生にずるずると引きずられ、来た方向へと戻されてゆく魔王。

これから新宿^{しんじゅく}のどんな高級洋菓子店に引きずり込まれるのか想像して、一人取り残されたサリエルは苦笑してしまう。

「仲良きことは美しき哉^{かな}。さて、僕も、夕食を食べに行くか。初マッダカフェだ!」

「なんなんだよ一体……」

真奥は千穂に引きずられながら、空の夕焼けを眺^{なが}めていた。

一体何が恵美の顔をあそこまで紅潮させ、それで何故千穂が怒っているのか考えてもまるで分からない。だが、

「いつもあーゆー顔してりや、少しは可愛^{かわい}げもあんのに」

真つ赤になつて目を潤^{うる}ませている恵美を思い出して、真奥は思わずほくそ笑^えみ、

「何か言いました!」

「なんでもないです」

これ以上は千穂の逆鱗に触れると理由が分からないなりに理解しているので、そこで考えるのをやめた。

そういえば、ふと振り向くと千穂の耳も微かに赤い。

「想像してたのとはちよつと違うが……夢ってのは自分の思い通りにはなかなか見られないものだしなあ」

真奥は、引きずられながら、東京の赤い夕焼けを見上げてぼつりと呟く。

木崎は、夢に浮かされて危ういところで外れの物件を回避した。

サリエルは、木崎と望む関係になるにはまだまだ前途多難である。

アラス・ラムスは、ようやく出会えた仲間と僅かも時間を共にすることもできなかった。

魔力をまた放り出してしまったことを戸屋は嘆くだろうし、漆原はいつだって不満一杯だ。

鈴乃も、千穂も、恵美も、それぞれ思い通りにならない現状を夢見たものに変えるため、壁にぶち当たりながらも前に進もうとしている。

そして真奥も……。

「ま、三時間ぼっちの講習なんかで木崎さんに追いつけるはずねえよな」

マグロナルド・パリスタの講習自体はとも有意義なものであったが、少なくともパールマンを目指す木崎が淹れるコーヒーに太刀打ちできるほどの技術を得るには、この第一歩の先にある新たな課題に踏み出さねばならない。

それでも今、真奥^{まおく}は、そして真奥を取り巻く人々は、例え自分でも気づけないほどに小さくても、それぞれの夢に向かって間違はなく昨日より一歩前に踏み出している。

夕方になってもまだまだうだるような暑さが続く東京だが、それでも空の色は、確実に秋の色が濃くなり始めていた。

「確かに見方によっては、赤い色も、悪くないな」

仰向けに振り仰いだ空の朱^{あか}を見て、そう思った。

「じゃあ私、いちごたーつぶりのショートケーキがいいです」

「こ、この季節イチゴとか高くない？ あ、あ、あ、あんまり高くないので……」

魔王も勇者も悪魔も天使も人間も、結局心も目的も帰り道さえもてんでバラバラのままなのだった。

終章

カウンターの隅の壁には、木崎のものに加えて新たに二枚、マッグカフェメニューに精通する『マグロナルド・パリスタ』が在籍することを表す証明書が掲げられている。

なぜか資格を表す内容の大半が英語で表記されているが、マグロナルドのイメージカラーである赤色の下字に白と金色の文字で所定の講座を修了したことが記されており、額に入れて飾るとなかなか様になっている。

もちろんそこに刻まれた名は、『SADAO MAOU』と『CHIHO SASAKI』だ。
「折角だ。君達がどれほど腕を上げたか、遊佐さん達に飲み比べをしてもらうか？」

木崎は前言通り、マッグカフェにやってきた恵美達にかフェオレを振る舞ってくれたのだが、丁度真奥と千穂がシフトに入っていたこともあり、そんなことを言い出す。

「望むところですよ！」

「私は……まだあんまり自信無いですけど……」

「い、いいんですか？」

木崎の挑戦に真奥は目を輝かせ、千穂はほんの少し怖気づく。

連れだってやってきていた恵美と鈴乃は木崎の申し出に恐縮してしまう。

「ごちそうすると約束しましたし、それに真奥は、今朝の負けを取り返したいでしょうから」
「今朝の負け？」

「午前中に、芦屋さんと漆原さんが来たらしいんです」

首を傾げる恵美に、千穂が苦笑しながら言う。

「木崎さんと真奥さんが同じコーヒーを淹れて飲み比べしたみたいなんですけど……」

「漆原にすら一発で見破られた。すげえ悔しい」

本気で悔しそうな顔をしている真奥に、木崎は苦笑する。

「君のコーヒーには、マグロナルドの豆をきちんと理解した上での安定感がある。それは誇つていいことだぞ？」

「でも芦屋も漆原も木崎さんの方が美味いって……」

「芦屋さんは何かと疲れていそうだから力を抜いてもらうために苦みとコクを重視した。漆原さんはあまりコーヒーを飲むタイプではなさそうだったから、刺激を少なくアメリカンに近い濃さにした」

「……」

常連でもない真奥の同居人の嗜好をズバリと言い当て、木崎は真奥を沈黙させる。

「ま、これも私のズルだ。同居人の上司が実力者であるということを見せつけて安心してもら

うためのな」

「これはもう、飲む前から決まったようなものではないのか？」

鈴乃の擲論てつろんを含んだ声に、真奥はますます奮起してしまう。

「見てろよ！」

「真奥さん、焦らずやりましょ」

エスプレッソ用の小さいカップに、木崎と真奥と千穂がそれぞれレギュラーコーヒーを淹いれて恵美と鈴乃の前に出す。

三つのカップを見比べながら、恵美と鈴乃はそれぞれ一口ずつ飲んでから、

「……右から順に、千穂殿、店長殿、貞夫殿か？」

「真ん中が店長さんなのは私も同意。でも……残り二つもそんなに違う気はしないかな」

「くっ……」

「やっぱり敵かたみいませんね」

真奥がうめき、千穂が苦笑する。二人の読み通り、中央のカップは木崎のコーヒード。

「それでも、お客様が極端に質が違わないと評価してくださった。それだけ君たちの腕うでが上がつているということだ。遊佐さんも鎌月さんも、結局余興に付き合わせてしまつて申し訳ない。我々は仕事に戻りますのでどうかごゆつくり。後ほど改めてきちんとした商品をお出しします」

木崎に促うながされて真奥は悔くやしそうに、千穂は二人に一礼して仕事へと戻つてゆく。

そんな三人の様子を遠目に見ながら、恵美は目の前の三つのカップに目を落とした。

「むしろ美味い部類なのが、腹立たしいわね」

「アルシエルもそうだが、奴らは案外小器用だからな」

素直でない恵美の言葉に鈴乃は苦笑する。

「で、どういう風の吹き回しなの。突然マッダカフェに寄ろうだなんて」

鈴乃からの呼び出しで来てみれば、真奥と千穂の働きぶりを見に行こうと誘われて、こうしてコーヒーを飲んでいる恵美だが、鈴乃は今だに呼び出しの理由を明らかにしていない。

「最初に言っただろう。魔王と千穂殿の働きぶりを見たいと思ったただけだ」

「本気で？」

「ああ、本気だとも。特に……」

鈴乃は、真ん中のカップを手を取った。

「本崎店長の下でどう働いているかを見たくてな」

「……どういふこと？」

今は新たな客に対応している三人を横目で見て、恵美が尋ねる。

「結局うやむやなままなのだろう？　魔王が、何故世界征服を目指していたのかという話は」

「……」

突然振られて、黙り込む恵美。

「どうした。顔が赤いが。陽が当たらない席に移るか？」

「な、なんでもないわよ！」

都庁からの帰りのことを思い出した恵美は、鈴乃の指摘に思わず自分の頬を触る。

どうもあの日のことを思い出すと、自分の中に得体の知れない感情が渦巻いて仕方ない。

「今さら確認するほどのことでもないが、魔王は木崎店長を心底尊敬している。誰にでも頭の上がない相手がいる、という話も、あながち嘘ではないのかもしれない」

「何よ。何が言いたいのか？」

要領を得ないことを言う鈴乃は、真奥達の様子を窺いながら、袖の中から何かを取り出しテーブルの上に置いた。

「それ……あなたが砕いた、天兵連隊の剣の欠片ね？」

鍛造技術が未熟な、小さな鉄片。

「天兵連隊は、エンテ・イスラの人間だった。天使も、どうやら人類であるらしい」

「ん……？」

「誰にでも頭の上がない相手がいる。そんなことを言う生き物を、私は他に知らない」
鈴乃の言わんとしていることがおぼろげに頭の中で形になり始めて、恵美は息を呑む。

「ベル……あなた、まさか……」

「それを知ったからといって、魔王やアルシエルやルシフェルが我々の敵であることに変わり

はない。だが……この日本で奴らの姿を見た私達は、そのことの意味を考える必要があると思
った」

超常的な存在であるはずの天使は、人だった。
ならば。

鈴乃の形の良い口から放たれたその問いの答えを知ろうとすることは、恵美にとって、いや、
魔王軍の侵略に晒されたエンテ・イスラの人類全てにとって、まさしく人心を感わす「悪魔の
誘い」となるだろう。

それでも、最早、遊佐恵美と鎌月鈴乃は、その問いの答えを避けて通るわけにはいかないの
だ。

「『悪魔』とは……一体なんだと思う？」

作者、あとがく — AND YOU —

日々の仕事のお供にコーヒーが欠かせない、という人は世の中に多いと思います。かく言う和ヶ原もコーヒー党でして、机上での集中する作業中は常にコーヒーが傍らにあります。

でも別にコーヒーとはこうでなければならん！ というような哲学があるわけではなく、インスタントだろうが缶コーヒーだろうがそのとき飲めるコーヒーをそのときなりに味わえればそれでいいというスタンスなのですが、自分の好みにパーフェクトマッチするコーヒーに出会えたときの感動は、いつまでたっても忘れません。

今回のお話を思いついたのも、とあるお店で飲んだコーヒーがまさしく「悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粹で、愛のように甘い」とフランス革命期の政治家、タレーラン・ペリゴールのようなことを口走りたくなるくらい美味しかったことがきっかけになっています。悪魔とか天使とか言ってますが言ったのはタレーランであつて和ヶ原ではないので特に深い意味はありません。

悲しいことにその店に行くには高速道路を片道二時間ぶっ飛ばさなければならぬので仕方なくインスタントで作業作業……。

さて、本書をお手に取っていただいた方にはもはや改めて言うまでもないことですが……。

「はたらく魔王さま！」二年目にして、まさかのTVアニメ化決定です。

担当編集さんから知らされたときにはまさしくコーヒーを吹く思いでした。

二年前に第一巻の原稿の文字から029さんが視覚的ビジュアルを生み出してくださったとき、一年前に柊 曉生さん、三嶋くろねさんにコミカライズしていただいたとき。それぞれのクリエイターさんが新しい視点、新しい魅力を引き出してくださって、その都度、自分の作品について多くを学ばせていただきました。

そして今回、アニメ化に当たり、更に自分の描いてきた世界を隔々まで見渡し、魅力を再発見させていただく機会に恵まれております。

それをまた原作に還元し、今まで支えて応援してきてくださった読者の皆様に、新たな魅力を添えて作品をお返ししていきたいと思っております。

今回のお話は、アニメになろうが何をしようが結局楽しい生活が続ける魔王や勇者や女子高生が、ほんのちよつとだけ人生をステップアップしようとしているお話です。

ただし現実の銭湯で修業しても法術の力は目覚めませんので、あしからずご了承ください。ではまた次巻にてお会い致しましょう。

それではっ!!

●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま!」(電撃文庫)

「はたらく魔王さま!2」(同)

「はたらく魔王さま!3」(同)

「はたらく魔王さま!4」(同)

「はたらく魔王さま!5」(同)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。



あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和ヶ原聡司先生」係

「029 先生」係



はたらく魔王さま!6

まおう
わがはらまとし
和ヶ原聡司

発行 二〇一二年十月十日 初版発行

発行所 塚田正晃

株式会社アスキー・メディアワークス

〒一〇二八五八四 東京都千代田区富士見一八十九

電話〇三五一二一六八三九九（編集）

http://ask.jp.co.jp

発売元 株式会社角川タムプブプリッシング

〒一〇二八二七七 東京都千代田区富士見二十三三

電話〇三一一三三八一八六〇五（営業）

監査者 秋篠裕司 (MIETA + MANIERA)

印刷 株式会社税印刷

製本 株式会社ビルディングブックセンター

本書のコピー、スキャン、電子データ化等の無断複製は、著作権法上での
例外を除き、厳禁されています。なお、代わりの複製等には従属して本書のスクリーン、
電子データ化等を許可することは、私的利用の目的であっても認められておらず、
著作権法に違反します。

本書一巻一巻はお取り替えたします。購入された書名を印刷して、
株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部までにお送りください。
送料、手数料等にお取り替えたします。

但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えたしません。
本書はカバーに表示してあります。